

# 余 部 遺 跡 (その1)

2000年3月

大阪府教育委員会



## はしがき

余部遺跡は、南河内郡美原町の南西部から北東部にかけて広がる中世の集落遺跡として知られています。本書で報告します余部遺跡（その1）はその広がりの中の南西部に位置し、西側は堺市日置庄原寺町に接しています。当地周辺ではこれまで近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線の建設や南余部・北余部地区の府営住宅建て替えなど、大型の環境整備事業が進められてきました。これらの事業計画地内では埋蔵文化財の内容を把握するために数次にわたって発掘調査が実施され、その成果はすでに公表されています。

今回報告するのは南余部地区の府営美原南余部住宅建て替え工事に伴い、平成9年度、10年度の2ヶ年に実施した発掘調査の結果です。この調査で明らかにできた中世の農村の一画は、河内鉢物桶の伝承により知られる当地の歴史を別な形で理解する材料といえます。特に農業用水を確保するために利用されたと思われる旧西除川の左支流の跡は、現在も農業用貯水の役割を果たしている溜池へと連なっています。往時のそのような土地利用の痕跡は、狭山池下流に広がる扇状地の開発の一環として捉えられるでしょう。

このような成果をおさめることができたのも、関係各位のご協力によるものであり、感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政へのご理解とご協力をお願い申しあげます。

平成12年3月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 小林 栄

## 例　　言

1. 本書は府営美原南余部第2期住宅（建て替え）に伴う、南河内郡美原町南余部所在、余部遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地における調査は、大阪府建築都市部から依頼を受けた文化財保護課が平成9年度（担当調査第1係技師折本哲、同森屋直樹）、平成10年度（担当折本哲）に実施した。なお調査概要については概要報告書がそれぞれ刊行されている。
3. 遺物整理および報告書作成は平成11年度に折本および資料係技師井西貴子を主担当として実施した。
4. 本書の執筆・編集は、各概要報告に基づき折本・井西が行った。
5. 出土遺物および記録資料は大阪府教育委員会で保管している。
6. 報告書作成にあたって、下記の方々および機関から助言、協力を得た。記して感謝します。  
包丁道明（美原町教育委員会）、森村健一（堺市埋蔵文化財センター）、西田孝司（松原市市史編纂室）、藤田憲司、寺川史郎、田中一廣、亀井聰（(財)大阪文化財センター）

## 本文目次

第1章 位置と環境.....	1
第2章 調査に至る経過.....	1
第3章 調査の方法.....	4
第4章 平成9年度の調査結果.....	4
第1節 基本層序.....	4
第2節 遺構と遺物.....	6
1項 A～C区.....	6
2項 D区.....	13
3項 E区.....	14
第5章 平成10年度の調査結果.....	31
第1節 基本層序.....	31
第2節 遺構と遺物.....	31
1項 F区.....	31
2項 G区.....	35
3項 H区.....	42
第6章まとめ.....	94
付章 分析	

## 挿図目次

第1図 調査地周辺地形図(大日本帝国陸地測量部 明治8年)	
第2図 調査区位置図	
第3図 調査区地区割図(S=1/2000)	
第4図 調査区土層断面図(A・B・E区)	
第5図 A区、溝004・包含層出土遺物	
第6図 B区、土坑014・包含層出土遺物	
第7図 B区、柱列柱間計測図	
第8図 C区、落ち込み・包含層出土遺物	
第9図 A～C区、土坑・溝・不定形落ち込み・落ち込み断面図	
第10図 D区、溝281断面図	
第11図 D区、小土坑252遺物出土状況・出土遺物	
第12図 E区、建物101柱間計測図	
第13図 E区、建物101平面・断面図	
第14図 E区、建物101出土遺物(1)	
第15図 E区、建物101出土遺物(2)	

- 第16図 E区、建物102平面・断面図  
第17図 E区、建物102柱間計測図  
第18図 E区、建物102出土遺物  
第19図 E区、井戸228遺物出土状況・断面図  
第20図 E区、井戸228出土遺物（1）  
第21図 E区、井戸228出土遺物（2）  
第22図 E区、井戸228出土遺物（3）  
第23図 E区、溝230遺物出土状況  
第24図 E区、溝234平面・断面図  
第25図 E区、遺構出土遺物（1）  
第26図 E区、土坑155断面図  
第27図 E区、遺構出土遺物（2）  
第28図 E区、土坑203・132・229遺物出土状況・土層断面図  
第29図 E区、土坑155出土遺物  
第30図 E区、土坑229出土遺物  
第31図 E区、ピット174遺物出土状況・断面図、ピット151・192・214断面図  
第32図 E区、ピット151、包含層出土遺物  
第33図 F区、溝339出土遺物  
第34図 F区、包含層出土遺物  
第35図 土層断面図（F～H区）  
第36図 G区、建物103平面・断面図  
第37図 G区、建物103出土遺物  
第38図 G区、建物104平面・断面図  
第39図 G区、建物104出土柱痕  
第40図 G区、建物104出土遺物  
第41図 G区、溝439遺物出土状況・断面図、出土遺物  
第42図 G区、土坑435出土遺物  
第43図 G区、土坑435遺物出土状況・断面図  
第44図 G区、土坑478遺物出土状況・断面図、出土遺物  
第45図 G区、包含層出土遺物  
第46図 H区、溝629遺物出土状況・断面図  
第47図 H区、溝629出土遺物  
第48図 H区、建物105平面・断面図  
第49図 H区、建物106平面・断面図  
第50図 H区、建物109出土遺物  
第51図 H区、建物107平面・断面図  
第52図 H区、建物108平面・断面図

- 第 53 図 H区、建物109平面・断面図
- 第 54 図 H区、井戸721遺物出土状況・断面図
- 第 55 図 H区、井戸721出土遺物（1）
- 第 56 図 H区、井戸721出土遺物（2）
- 第 57 図 H区、井戸805平面・断面図
- 第 58 図 H区、井戸805出土遺物
- 第 59 図 H区、井戸871遺物出土状況・断面図
- 第 60 図 H区、井戸871出土遺物（1）
- 第 61 図 H区、井戸871出土遺物（2）
- 第 62 図 H区、井戸871出土遺物（3）
- 第 63 図 H区、井戸871出土遺物（4）
- 第 64 図 H区、井戸871出土遺物（5）
- 第 65 図 H区、井戸871出土遺物（6）
- 第 66 図 H区、井戸871出土遺物（7）
- 第 67 図 H区、井戸871出土遺物（8）
- 第 68 図 H区、井戸1237平面・断面図
- 第 69 図 H区、井戸1237出土遺物
- 第 70 図 H区、土壙墓687平面・断面図
- 第 71 図 H区、土壙墓687出土遺物
- 第 72 図 H区、溝600出土遺物
- 第 73 図 H区、溝897出土遺物
- 第 74 図 H区、溝1192出土遺物
- 第 75 図 H区、溝1085出土遺物
- 第 76 図 H区、溝断面図
- 第 77 図 H区、土坑1181遺物出土状況・断面図、出土遺物
- 第 78 図 H区、土坑1202出土遺物
- 第 79 図 H区、土坑1231平面・断面図、出土遺物
- 第 80 図 H区、土坑1244平面・断面図、出土遺物
- 第 81 図 H区、落ち込み1113出土遺物
- 第 82 図 H区、土坑断面図
- 第 83 図 H区、落ち込み1191遺物出土位置図
- 第 84 図 H区、落ち込み1191出土遺物（1）
- 第 85 図 H区、落ち込み1191出土遺物（2）
- 第 86 図 H区、ピット1117遺物出土状況・断面図、出土遺物
- 第 87 図 H区、ピット1140遺物出土状況・断面図
- 第 88 図 H区、ピット712出土遺物
- 第 89 図 H区、集石627平面・見通し図、出土遺物

- 第90図 D区、旧河川断面図  
 第91図 H区、旧河川断面図  
 第92図 D区、木柵出土状況図  
 第93図 D区、南壁木柵部分断面図  
 第94図 D区、池出土遺物（1）  
 第95図 D区、池出土遺物（2）  
 第96図 H区、池出土遺物（1）  
 第97図 H区、池出土遺物（2）  
 第98図 H区、池出土遺物（3）  
 第99図 H区、包含層出土遺物（1）  
 第100図 H区、包含層出土遺物（2）  
 第101図 H区、包含層出土遺物（3）  
 第102図 検出遺構と地籍との関係図  
 第103図 調査区の土地利用の変遷模式図  
 付図1 遺構全体図

## 図 版 目 次

- 第1図 A～C 全景  
 第2図 C区 落ち込み  
 第3・4図 D区 流路・溝  
 第5図 E区 全景  
 第6・7図 E区 建物101  
 第8・9図 E区 井戸228・土坑・溝  
 第10・11図 E区 土坑203  
 第12図 F・G区 全景  
 第13図 G区 溝・土坑  
 第14～16図 H 1～3区 全景  
 第17・18図 H 1区 井戸805・871  
 第19・20図 H区 井戸・土坑・土壙墓687  
 第21・22図 H区 溝  
 第23・24図 H 2区落ち込み・集石  
 第25図 H区 ピット  
 第26図 D区 池  
 第27図 H 3区 流路

## 第1章 位置と環境（第1図）

余部遺跡は、大阪府南河内郡美原町北余部・南余部に所在する。遺跡の範囲は南北約1.2km、東西約0.65kmである。本遺跡の西側に隣接して堺市日置莊遺跡が存在する。周辺の自然地形は西に陶器山丘陵、東に羽曳野丘陵を配し、主要河川である西除川と東除川が台地を浸食しながら北上している。東除川は羽曳野丘陵西縁辺を北流するため、丘陵縁辺に無数に形成された谷からも小川が流れ込み、激しい段丘壁を形成した。一方、西除川は段丘壁の発達が見られず、浅く平坦な谷底平野を形成した。本調査区はこの谷底平野に位置している。また、西除川はかつて上流に存在する天野川と同一河川であったが、狭山池築造により2分された。

調査区は、南余部の旧集落の西約300mの、西除川左岸の中位段丘面上に位置する。現状は府営美原南住宅敷地内にあり、それ以前は条里の地割りが良好に残る田畠であった。地目としては調査区南側に接して中池があり、さらに北500mには更池がある。池の一部は調査区北東から南西にかけて通る近畿自動車道の建設や、調査区南側の府営住宅建替えにあたって埋め立てられた。かつては中池の北、調査区との間に、昭和30年代前半に住宅建設に伴って埋め立てられ、現在はそこに新棟の高層住宅が立つ旧下池（辨池）があった。高度成長期の30年代後半以降、特に住宅地確保のための埋め立てが進んだ経過のなかで、周辺の多くの池が旧地形の改変とともに消えつつあるが、この池もそのひとつである。

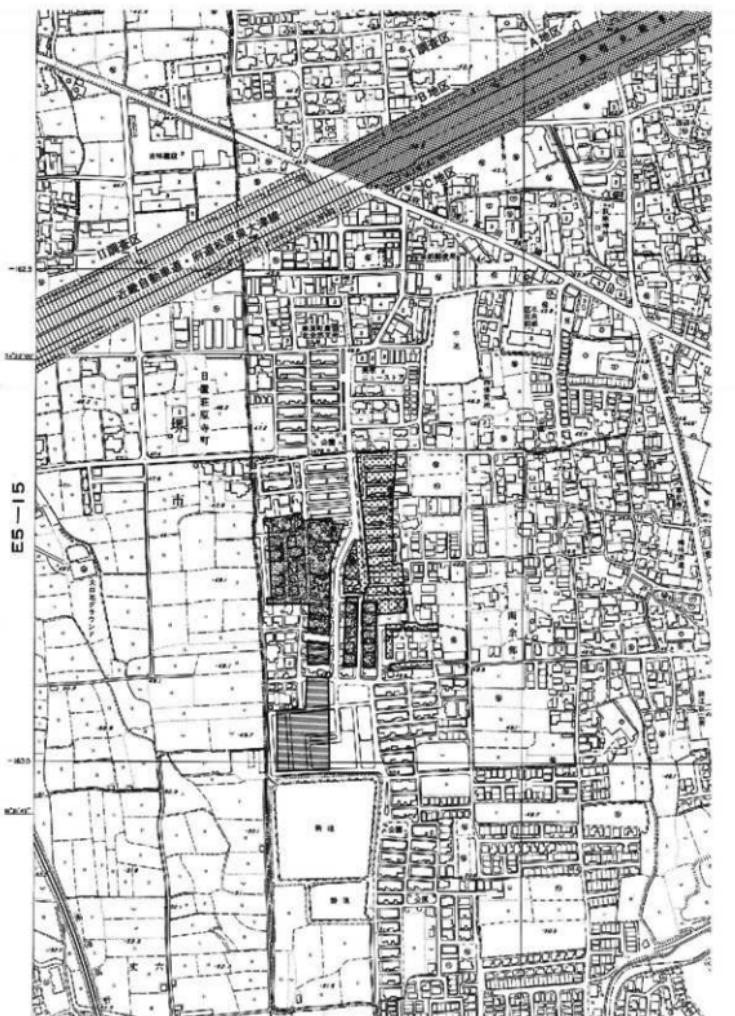
調査区周辺に広く目を向けると、東の羽曳野丘陵と西の陶器山丘陵との間に北へ向かって扇状に開けた空間には、中央を南北に流れる西除川流域の東西に、狭山池方面から現状の河川網と、放射状に展開する多数の開析谷の埋没地形がうかがわれる。この埋没地形に沿う形で現在みると上に多くの池もしくは池跡が点在していた状況は新旧の地図に見いだされる。そして集落の多くがこれらの池に隣接して発達している。概ね南北に通るこのような旧開析谷の地形を東西に横切る街道（丹比道、大津道など）は、特に本調査区周辺の南北・東西に展開する条里の地割りに規制され、また一方上記の池についてもこの周辺で相対的に四辻を整えている。しかし旧集落の位置が池に隣接して、いわば池とセットになるかのように点在する景観は保たれている。このようなありかたはむろん南河内の平野部での農業の発達の必然性にかかわると思われる。そのような意味で本調査区は旧開析谷、つまり河川から池への土地利用上の変化を跡付ける作業を考古学的に検証するうえで興味深い地点と思われる。

## 第2章 調査に至る経過（第2図）

府営美原南余部住宅建て替え事業に伴う一連の発掘調査も1999年度で一応の区切りとなる年度を迎えた。本住宅地内における発掘調査は、平成2年2月に本府教育委員会によって実施された試掘調査の結果に基づいている。その後10年余り総面積にして約19,930m<sup>2</sup>の調査が、(財)大阪府埋



第1図 調査地周辺地形図（大日本帝国陸地測量部 明治8年）



-  1994年度大阪府埋蔵文化財協会調査区  
(平成6年度)
-  1997年度大阪府教育委員会調査区  
(平成9年度)
-  1998年度大阪府教育委員会調査区  
(平成10年度)

0 300m

第2図 調査区位置図

藏文化財協会、(財)大阪府文化財調査研究センター、本府教育委員会文化財保護課によって実施された。調査は年度毎に実施され、建設工事が急がれる個所を優先して行い、調査の終了した時点で順次各種建設工事が始められた。本住宅地内余部遺跡における10年余りに及ぶ発掘調査の成果を以下に報告するが、今回の報告は平成9年度、10年度の2カ年にわたり実施した発掘調査について報告する。

## 第3章 調査の方法

### 第1節 地区割り（第3図）

地区割りは国土座標第VI系に基づき、1万分の1の地形図を使用した縦6km、横8kmの第I区画、2500分の1地形図を使用した縦1.5km、横2kmの第II区画、第II区画内を100m単位で区画した第III区画、第III区画内を10m単位で区画した第IV区画を用いて調査区の位置及び遺構を表示した（付図1）。このうち、遺物の取り上げにあたっては必要に応じて第IV区画内を5m単位で4分割した第V区画を用いた。なおこの地区割りは(財)大阪文化財センター（現(財)大阪府文化財調査研究センター）の地区割りに依拠している。

### 第2節 調査区の設定（遺構名・遺構番号）

本報告での調査区の呼称は、発掘調査時の調査区設定に則り、平成9年度調査区はA～C区、D区、E区、平成10年度調査区はF～H区である。遺構名については、すでに発行されている『余部遺跡（その1）発掘調査概要』1998・3、『余部遺跡（その1）発掘調査概要II』1999・3との混乱をさけるため、基本的には現操作業で使用した番号を踏襲することとした。遺構番号は、同一調査区内において同じ溝の連続であっても検出された部分すべてに番号を付している。また複数の調査区に溝が広がる場合がある。それらの場合、同一と認識した遺構については番号をすべて並記してひとつの遺構であることを示した。

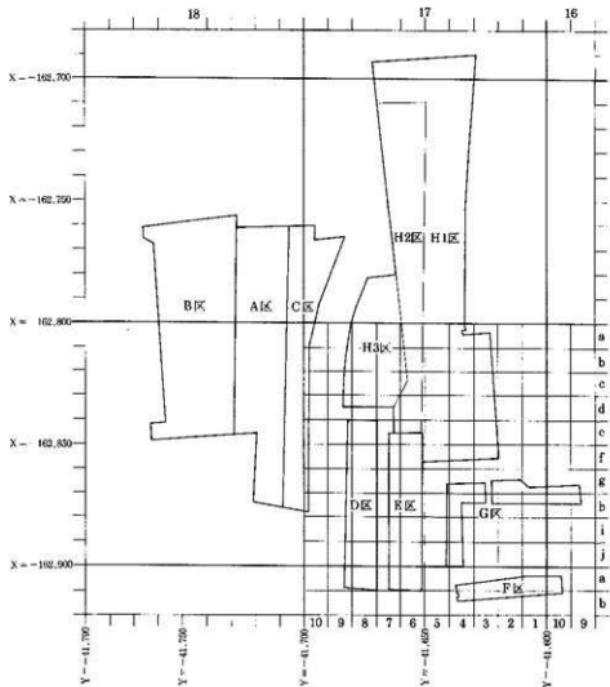
## 第4章 平成9年度調査の遺構と遺物

### 第1節 基本層序（第4図）

平成9、10年度に実施した調査区内において全体の現地表面、包含層上面および地山上面レベルを比較してみると以下の高低差が得られる。南北方向ではE区南端とH区北端で現状地盤については1.8m、包含層上面レベルについては1.7m、遺構検出面の地山レベルでは1.9mの比高差

をもって北に低くなる。また東西方向ではB区からG区についてみてみると、現地表面では高低差はあまり認められないが、包含層上面では0.3m、地山上面では0.05~0.1mと若干東に傾斜する。したがって調査区全体をみれば、北への傾斜は東へのそれよりもはるかに大きい比高差を生じている。それには河川の下刻による影響も大きかったと考えられ、たとえば地山面では1m北行する毎に概ね11cmの比高をもって北に傾斜することになる。

調査区全体にわたって府営住宅建設時の盛土がなされている。また調査開始時にはこの住宅撤去工事に伴う廃材を含む整地層がみられた。鉄筋コンクリート建物の基礎、排水管その他による擾乱も調査区全域に認められたが、とりわけA~C区に著しかった。以上の擾乱・盛土の下にはかつての田畠である耕土がある。中世包含層は基本的に中世の耕作土の床土とみられる細い黄色帶とその上に重なる灰褐色系の粘質土のセットによって数層に分層されるが、大きな時期差はほとんど認められず、13世紀の土器類を中心とする点は、いずれの調査区でも同様である。その内容は瓦器、陶磁器を始めとする中世遺物に加えて、サヌカイト製石鎌、埴輪、須恵器、土師器な



第3図 調査区地区割図 ( $S=1/2000$ )

ど中世以前の遺物も若干混入する。また、河川堆積層でも包含層と同様の遺物が検出され、包含層の形成と河川の埋没が共に進んだとみられる。

A・B区の特に西側ではそれが希薄で、耕土直下が地山の砂礫層となる。またB区西壁断面では南から北にかけて何枚かの田畠の削平段が現われている。中世遺物包含層の堆積状況はH区においても同様で、南端では希薄もしくは認められない部分がある。

地山層は基本的に砂礫土と黄灰色粘土とからなる。堆積順序としては前者が先行し、その起伏面の窪地となった部分に後者が溜まっていたとみられる。東～北東へとこの地山が低くなるので、C区でも、特に北半部には中世包含層が比較的厚く堆積している。それ以前の包含層は、古墳時代前期の遺構が数ヶ所で検出されているにもかかわらず、全体的には観察されなかった。中世とそれ以後の開発により削平されてしまったのだろう。またE区南端では以上の基本堆積層のほかに、D区の埋没河川とその後それが池として利用されていく過程に連動すると思われる築堤盛土の堆積土の一一部が観察される。

中世包含層の堆積状況から、府営住宅建設以前の耕作地の原形を形作ったと考えられる開墾が、13世紀から大規模に行われた。このために古墳時代の土坑や溝、また中世包含層に混入する埴輪片や石礫などの遺物によって推し量られる中世以前の遺構はかなり削平され、消滅したと思われる。

## 第2節 遺構と遺物

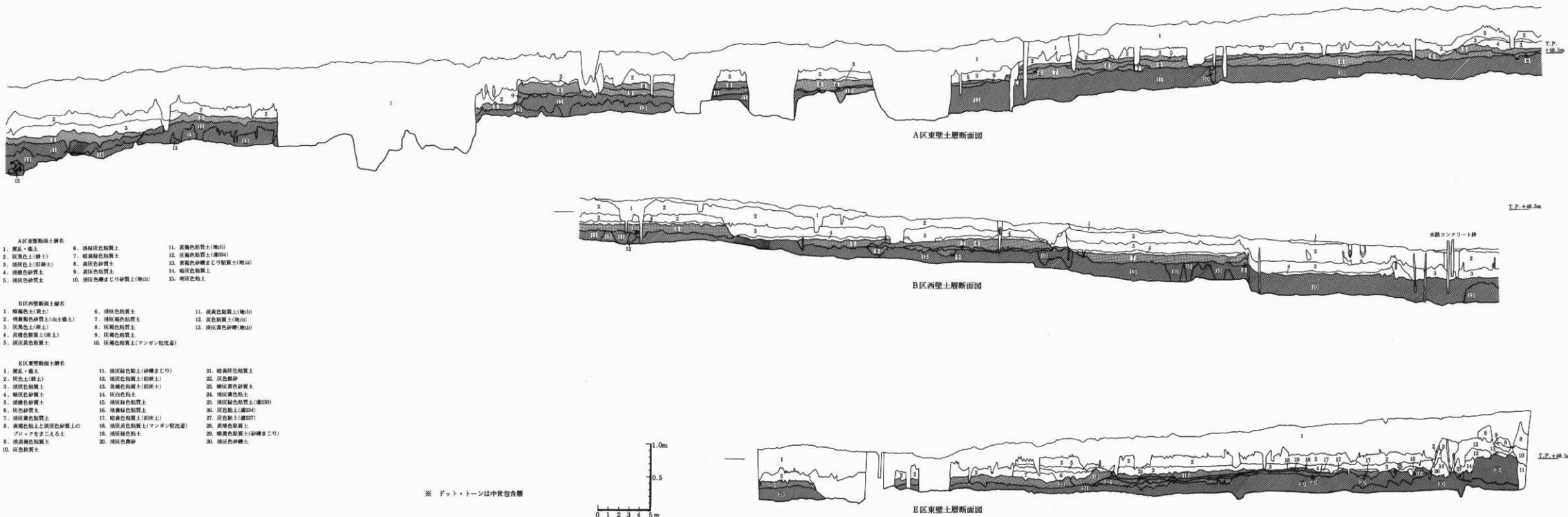
### 第1項 A～C区（付図1・図版1）

A～C区は東西が隣接した調査区を設定しているためまとめて報告する。古墳時代の溝、土坑、古代・中世の不定形落ち込み、溝、柱列、耕作溝、近世・近代の耕作溝、井戸などが検出された。

#### 古墳時代前期

溝004（第5図） A・C区東半中央で南東から北西にかけて延びる。方位はN-45°W、幅0.5～0.6m、深さ0.2mであるが、北西してやや幅広く、かつ浅くなる。A区に入ると2条の平行する形で検出された。埋土は灰褐色粘質土である。現地割りにのる東西方向の耕作溝に数ヶ所で断ち切られている。A区で検出した溝の埋土内から布留式甕の口縁部片（1）が出土した。また、C区のやや幅広になった位置から図上復元できるものはなかったが、土師器細片が出土している。

溝019 A区南端で検出された南東～北西に延びる溝である。中世以後の地割り線の方向とはまったく異なり、中世の開墾以前の旧地形に沿っている。方位はN-40°W。出土遺物は、摩滅した土師器細片数点で、器形は不明である。図上復元できる遺物はなかった。しかし前述した溝004や後述する土坑の埋土・方向に近いので古墳時代前期にさかのぼる可能性は否定できない。



第4図 調査区土層断面図(A・B・E区)

A区包含層出土遺物（第5図） 弥生後期の甕の底部（2）、土師器の高杯の脚部（3）、須恵器の甕の口縁部（4）が出土した。

土坑014（第6・9図） B区南端で検出された不定形な土坑である。長軸は5.2mで、東西方向示し、短軸は2.8m、深さ0.32mを測る。埋土は9層を区分した。第2層には須恵器片を混入していたが、第3層以下、特に第6層を中心として布留式の甕口縁部（5）、高杯杯部（8）、脚部（6、7）、小形丸底などの破片等がみられた。（5）は口縁端部を若干つまみ上げて仕上げる。内外面の調整は摩滅が著しく不明である。出土した遺物は、いずれも細片のため図上復元できたものは少ない。

B区包含層出土遺物（第6図） 白磁碗の底部（9）が出土した。

#### 古代～中世

溝037（第9図） B・C区北西部で検出された溝。南西から北東に延び、そこからほぼ直角で北西方向に転じている。方位は南部ではN-50°-E、北部でN-20°-Wである。幅0.7~1.0m、深さ0.2~0.3mを測る。埋土は

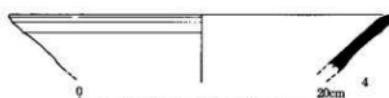
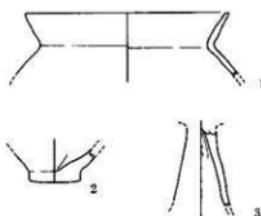
第1、2層が灰褐色系粘質上で、底面に堆積する第3層は砂もしくは砂が混じる粘質土である。北部で溝040に切られている。

南部では050、039がこの溝の最終堆積時またはその後に流れ込んでいる。埋土の粘質土中から土師質把手付き鍋の把手部分、須恵器甕脚部片、瓦器椀底部片、サヌカイト片などが出土している。

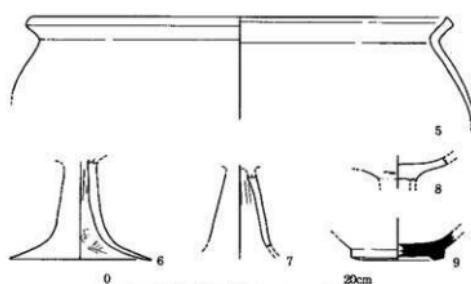
細片とはいって、他の遺構の出土遺物に比べてやや時期のさかのぼる土師器や須恵器が混入している点、遺構の方位が中世以降の遺構にみられる方向性とは明らかに違い、むしろ先の古墳時代の遺構の方向性に近い点から、少なくとも中世以前に掘込まれた可能性がある。

#### 落ち込み（第8・9図・図版2）

C区東端中央にみられた東側への落ち込みである。北側が攪乱され、東側の調査区外に及んでいるので、形



第5図 A区、溝004・包含層出土遺物



第6図 B区、土坑014・包含層出土遺物

状・規模は不明である。埋土は暗褐色粘質土である。西側の肩部で流れ込む形で黒色土器（12）が1点出土した。黒色土器はB類で、口径14.80cm、器高5.80cm、体部は直線的にのびる。内外面を密にミガキし、口縁部は横ナデによりやや外反気味となる。11世紀前半が考慮される。

轍跡 A区中央で検出した細溝状の痕跡である。埋土はすべて明灰色の微砂で、鋭角に切り込む三角形の断面が特徴である。延長は長短あるが、2条一対となり、その間隔が1.3~1.4mとはほぼ共通している。方向は南西~北東、東南~北西の2つに密集する傾向が認められる。切り合いも認められる。この方向は中世遺構の地割りに沿わないが、また一方で古墳時代の溝004を断ち切っている。

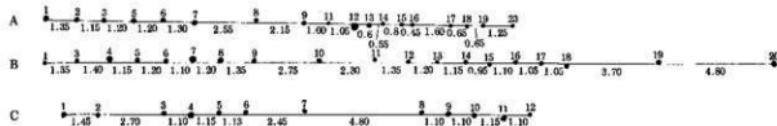
## 中世

中世のものとみられる遺構の大半は耕作に関係する細溝である。その他には柱列、不定形土坑群などがある。各遺構の軸方向は現在の地割りとほとんど同じである。埋土はすべて中世包含層と同じである。したがって削平されずに残った中世包含層のあるところに東西溝、南北溝が比較的よく残っている。

柱列（第7図）B区南西端で検出した南北方向3列の柱列跡ある。

柱列A 延長19.3m分を検出した。方位はN-1°-W、攪乱坑で削平されたピットもあるが、ほぼ等間隔（平均1.23m）を考慮して掘込まれた模様である。この等間隔から外れるピット（A-3、13、15、18、19）は掘り替え、補強などの柱穴と考えられるかもしれない。ピットの径は20~30cmを中心とする。検出面よりの深さは4~22cm、底面の地盤高はTP48.10~48.19mを測る。埋土は淡灰褐色、やや灰色の強い粘質土を基本とする。出土遺物はない。

柱列B 柱列Aの東に1.6~1.7m隔てて検出した、延長21.5m分のほぼ等間隔のピット列である。さらに北の延長線上で2箇所のピット（B-19、20）が認められる。南から連続するピット群の間隔とは開きがあるので確定しがたいが、延長部分と考えておきたい。やはり攪乱坑により数ヶ所のピットが削平されている。B-10、11にはピットの痕跡は認められなかった。掘込みが浅く、後世の開発で消滅したか、そうでなければ意識的に2柱間分を開けたままにしたかもしれない。



(単位:m)

第7図 B区、柱列柱間計測図

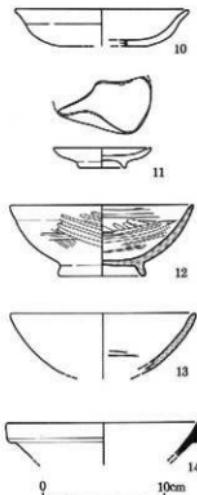
方位はN-0.5°-Wで、柱間は平均1.19mを測る。B-6（調査時呼称番号015）の埋土中から土師器片2点が出土したが、細片のため器形はわからない。柱穴径は15~20cmで、埋土は柱列Aと同じく淡灰褐色粘質土である。深さは7~22cmを測り、底面地盤高はT.P.48.11~48.16mを測る。

柱列C 柱列Bの東に約2.2m隔てて掘込まれたピット列である。延長19.2m分を検出した。方位はN-1.5°-W。ピットの形状、埋土は柱列Bと同様である。深さは7~18cm、底面地盤高はT.P.48.10~48.18mを測る。出土遺物はない。柱間は1.16mである。C-2~3間は2間分が空いている。C-7~8間は4.8m測り、ほぼ4間分となるが、擾乱、削平により消滅したと思われる。

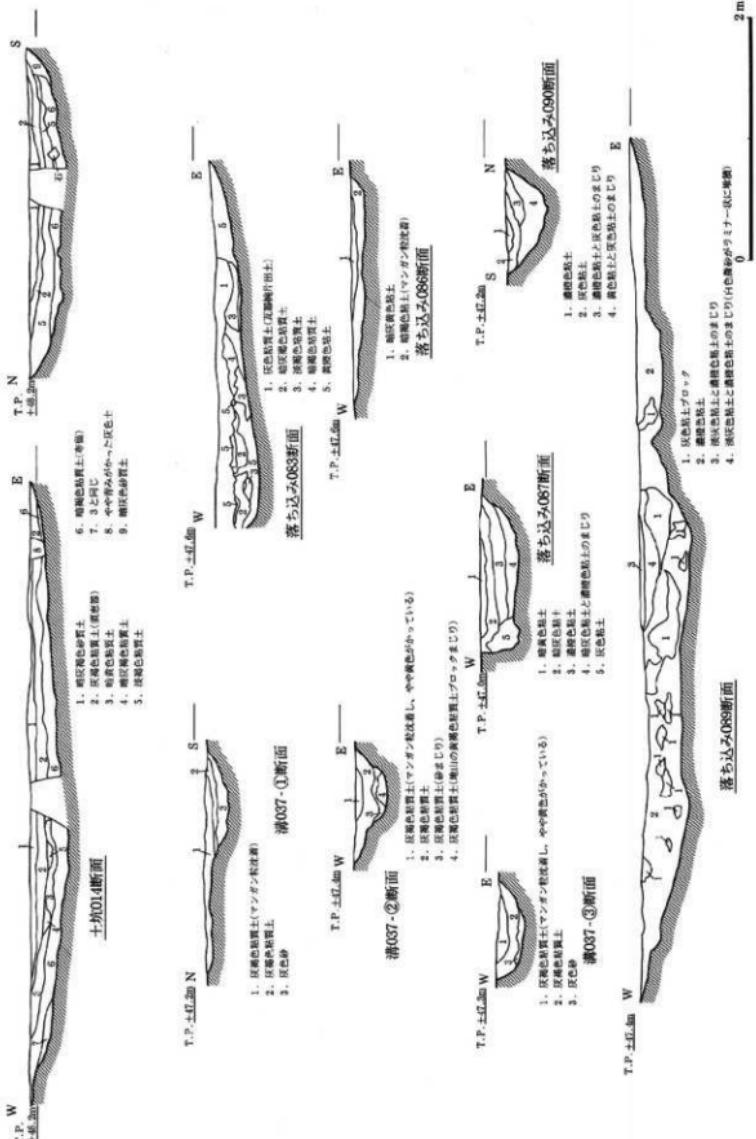
以上の柱列の時期については、遺物が出土しなかったことや、他の遺構との重複関係もみられず不明といわざるをえないが、埋土が中世包含層に似ているので、ここでは大まかに中世としておきたい。柱列の用途についても、周辺に建物を構成するようなピットその他の遺構がみられないので、積極的に柵列とする根拠もない。収穫物や藁を掛ける農業用の干し架と考えられないこともない。

不定形落ち込み群（第8・9図・図版2）C区北東部で不定形な大小の落ち込み群が密集して検出された（083、086、087、089、090他）。大きさは一定していない。埋土は灰色粘土と黄色粘土の混在する形を基本とし、通常みられるレンズ状堆積を示すものは少ない。時間を置かずに埋められた感じがする。この個所にみられたピットも掘立柱のそれとは明らかに違う比較的浅い掘り鉢状をなす。落ち込みには埋土中から瓦器片が出土したものもある（083、089）。この個所にこのような落ち込みが密集する原因のひとつとして、A区北端部からC区北端部にかけて北へ若干傾斜する位置を占めることが挙げられる。その低くなったところに耕地確保のために削平した南側からの土を埋めた可能性がある。

C区中世包含層出土遺物（第8図） 土師器皿（10）、土師器耳皿（11）、瓦器碗（13）、白磁碗（14）が出土した。（13）は、内外面ともにミガキが施されていたようであるが、摩滅が著しく図化することができなかった。



第8図 C区、落ち込み・包含層出土遺物



第9図 A～C区、土坑・溝・不定形落ち込み・落ち込み断面図

## 第2項 D区（付図1）

検出されたのはこの調査区のほぼ全域を占める池跡その堤、溝などである。池跡については平成11年度調査区にも繋がる遺構であるので第5章第2節第3項にまとめて報告する。また、出土遺物についても同様である。

### 中世以前

溝281（第10図・図版3） 調査区中央の旧流路の東側岸で北東～南西方向に掘込まれた溝である。幅2.2m、深さ0.75mを測り、北東にやや浅くなる。埋土は13層に分層された。9層以下には砂の堆積が顕著であり、それ以上は粘土・粘質土が堆積する。流水のあった時期と埋没、沈滞する時期が反映しているとみられる。溝底に溜まった砂層（第13層）から土師器、須恵器の破片が出土している。堆積土全体には中世遺物はまったく混入しない。これは後述する中世の池の堆積層（つまり、流路の一連の堆積層内の数層）に含まれる中世遺物の出土状況とは明らかに区別される。旧流路の堆積層内、中世遺物の混入がみられ始める第15層灰色粘土（北側横断面）以前の段階に流れ込んでいた溝と考えられる。溝の北東は調査区外に及んでいるが、東側のE区では検出されなかった。おそらくD区とE区の間を通ると想定される。

### 流路（図版3・4） 調査区のほぼ全域で南西

～北東方向に検出された。流路幅は13m、深さは1.6mまで掘り下げた。堆積土は4つの横断面で10～15層を区分できたが、大きくは上層の粘土・粘質土（北壁断面第9、10層、北側断面第1層～15層）と下層の粘土・砂（北壁断面第11層以下、北側断面第16層以下）に分けられる。上層が中世遺物を混入する池跡としてとらえられる。下層は河川堆積で、北半部の最下層より流木が出土した以外、ほかに遺物はなかった。



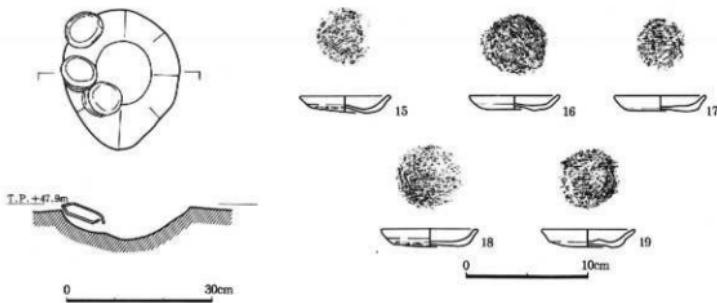
第10図 D区、溝281断面図  
(点トーンは遺物出土層を示す)

### 中世

小土坑252（第11図・図版4） 調査区南西端で検出された径0.5～0.6m、深さ0.15mの小土坑である。この土坑で土師器小皿計5点が南西から北東に流れ込む形で土坑肩部で検出された。うち4点は身と蓋用に2枚1対となって出土している。おそらく3対分計6点が本来一括埋納されたのかもしれない。皿の中には炭が残っていた。検出面は木縁と同じ流路最終堆積後の平坦面である。皿はすべて、口径約7.6cm、器高約0.9cm、やや外反する口縁内外を横ナデし、底部外面は指オサエ、内面は不定方向にハケ目を施して調整している（15～19）。

## 中世以後

杭列（図版4） 池の周辺に打ち込まれた杭で、東辺、南辺にみられる。南辺の杭は径10~20cmの材で、東西方向の3列が認められるが、もっとも北側の杭列は30~40cmの間隔をとって、T.P. 平均47.2mまで打ち込まれている。長さは0.6~1.0mが残っていた。杭列の方向は座標に合致している。杭の設置時期は正確には分からぬが、近世～近代ではないかと思われる。

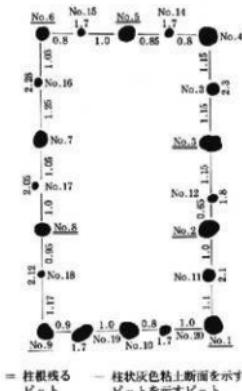


第11図 D区、小土坑252遺物出土状況・出土遺物

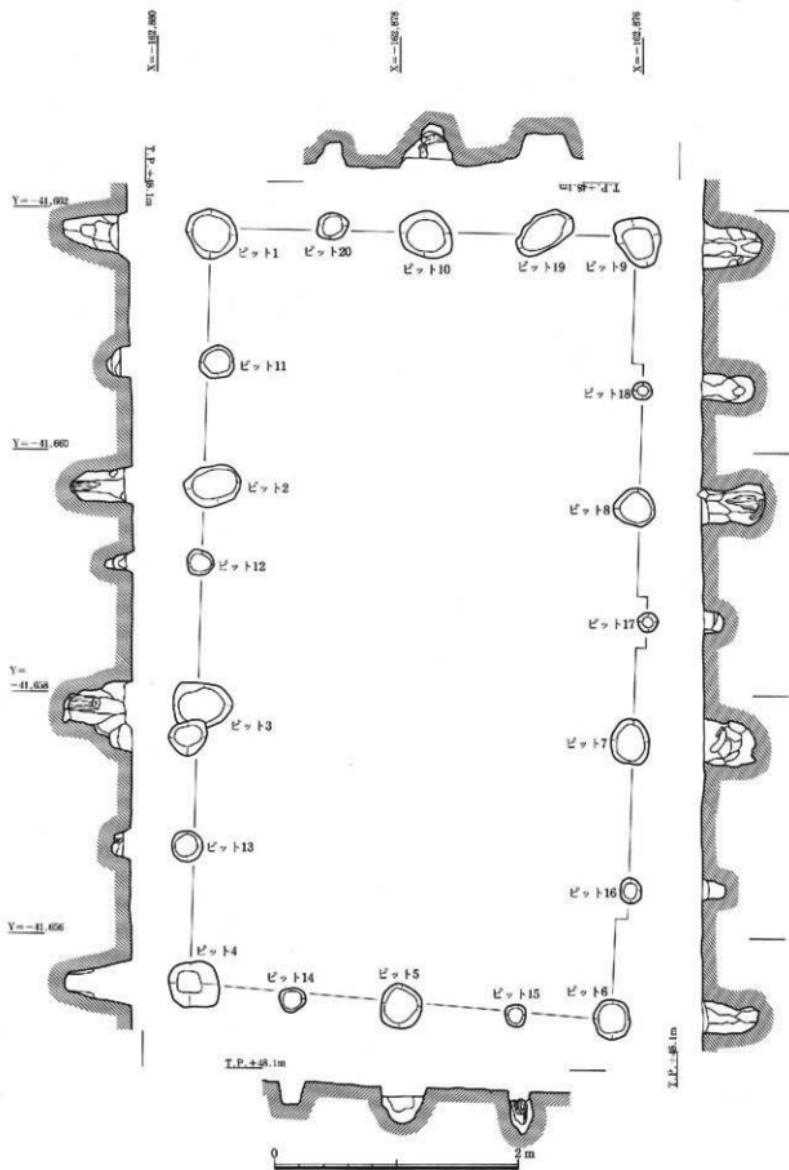
## 第3項 E区（付図1・図版5）

調査区中央と南半を中心として検出された建物、その他付属施設の痕跡と思われるピット群、溝、井戸、建物の廃絶に関係する土坑群などがある。建物、溝の方向は現在の地割りと大差ない。土坑は建物周辺にみられるものは大きく、離れたところにあるものは単独で小規模なものと、不定形で大きいものがある。

建物101（第12~15図・図版6）調査区中央で検出した。南北2間（3.4m）×東西3間（6.0m）で、主軸方向はN-1°-Eである。東西列のピット2とピット3の間隔が他に比べて狭いが、その他は2.05m~2.3mで、平均2.17mとなる。南北列ともに間柱がある。面積は21.9m<sup>2</sup>。柱穴掘り方は0.26~0.46m、深さ0.50~0.55m、間柱は径0.18~0.46m、深さ0.16~0.43m。ピット2、3、5、8、13の柱根は残りがよく、根石をともなっている。ピット8では柱根下に2枚重ねで平瓦（21~23）が敷かれており、瓦器小皿（20）が出土した。また柱根は腐っていても柱状に変色した土層を観察できたピットもある



第12図 E区、建物101柱間計測図

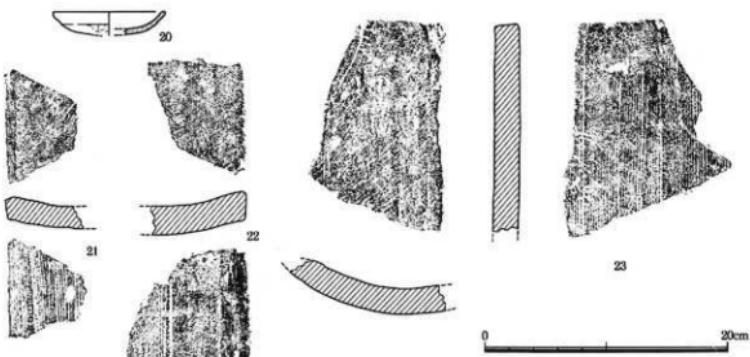


第13図 E区、建物101平面・断面図

(ピット1、4、6、9)。その他のピットは瓦礫を投棄するなどして柱を抜き取った後の埋め戻し状態がみられた。

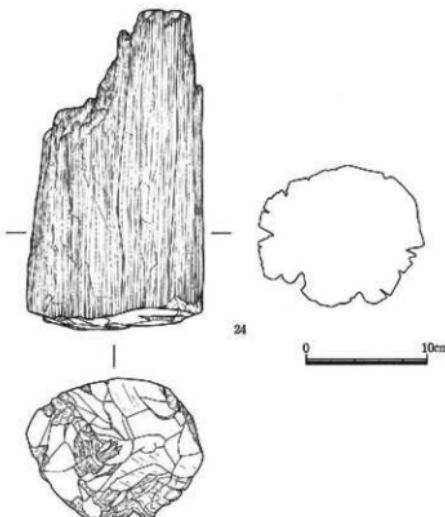
ピット3では柱根が正立状態で残っていた(24)。柱の材質はスギで、側面に6面以上の面取りをつけて縦に削られている。底面にも同様な削り痕が認められる。

建物102(第16~18図・図版7) 建物101の南に3.5m隔てて平行する形で検出された。南北2

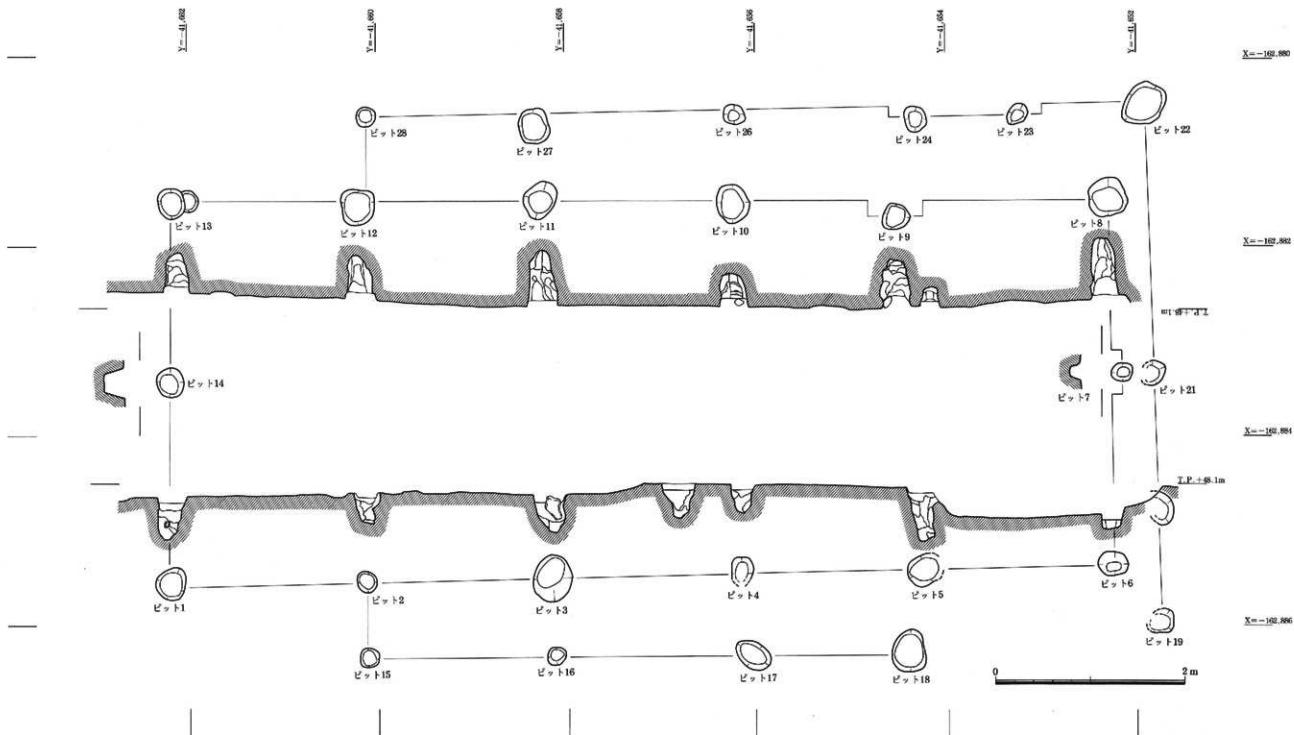


第14図 E区、建物101出土遺物(1)

間(3.9m)×東西5間(10m)で、面積39m<sup>2</sup>。柱穴掘り方は径0.20~0.40m、深さ0.3~0.57mである。主軸方向は座標北に沿う。東西列の南辺と北辺に東5間分と南北列東辺に4箇所庇または塀の柱列が取りつくが、柱間は建物本体の柱間と対応せず、ややすれて配置される点が特徴的である。一部のピットを除き、柱根抜き取り後の埋め戻しがなされており、柱根の残るものはないが、柱状の灰色粘土が観察された。この柱列のうちピット18と19、ピット22と21の間のピットは土坑229を、またピット3、16は土坑155の坑底面で検出した。ピット1(27)、5(25)、27(26)、17(30)、192(29)から瓦器碗が、ピット11(28)から瓦器小皿が



第15図 E区、建物101出土遺物(2)

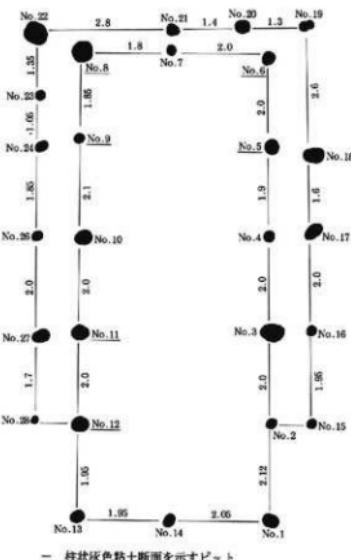


第16図 E区、建物102平面・断面図

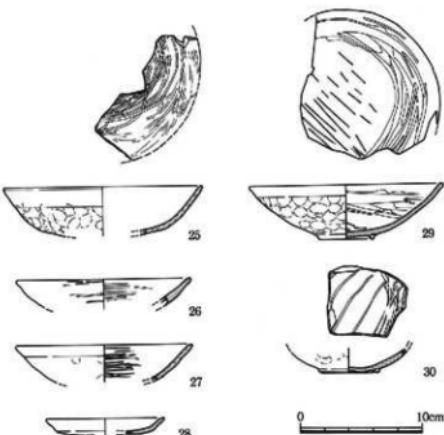
出土した。瓦器椀の編年ではIII—2・3に相当すると思われる。

井戸228（第19～22図・図版8） 建物101の東側で検出された。土坑113と重複し、この土坑の埋没後に掘込まれている。長径1.85m、短径1.65mのほぼ円形である。深さは検出面から2.46mの砾層まで掘削している。上半1mまではラッパ状に、それ以下はやや胴張り状に掘り下げ、底面は平坦である。埋積土は7層に分層できた。出土遺物は第3、6層でまとまった比較的完形に近い土器類の出土状態が観察できた。第1、2層は遺構検出面全体に被る中世遺物包含層の土質に近い。第3層の粘土層では瓦器、須恵器、瓦の破片が20～40cm大の石に混在して出土した。石の中には被火による黒変が認められるものもあり、粘土中に炭を混入することと相俟って、本層堆積の過程がそれより上位の層とは異なっていた状況がうかがわれる。黒変、煤痕ある石は西側建物101の柱穴埋土中からも出土していることや、これらの瓦砾の投棄が西側から行なわれたことは注意される。本層以下

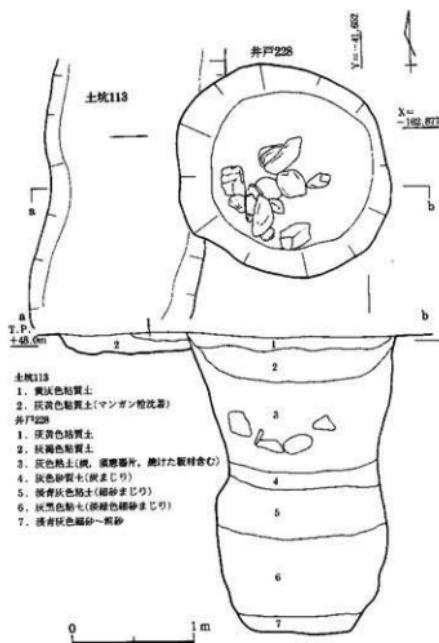
0.5～0.6mの砂質土または砂を混入する粘土の堆積を経て、層厚0.65mのきわめて軟質な灰黑色粘土に達する。この粘土層ではT.P.45.7～46.2mにかけて椀、皿を中心とする瓦器類、杓子他の木製品や木片が出土した。井戸底に溜まった層厚0.1～0.15mの砂は地盤の砂砾層から井戸の使用期間中に徐々に遊離して堆積したようである。したがってその上に堆積する粘土層の上記の廃棄物が井戸の廃絶し始める時期を示すと考えられる。出土遺物は井戸の堆積



第17図 E区、建物102柱間計測図



第18図 E区、建物102出土遺物



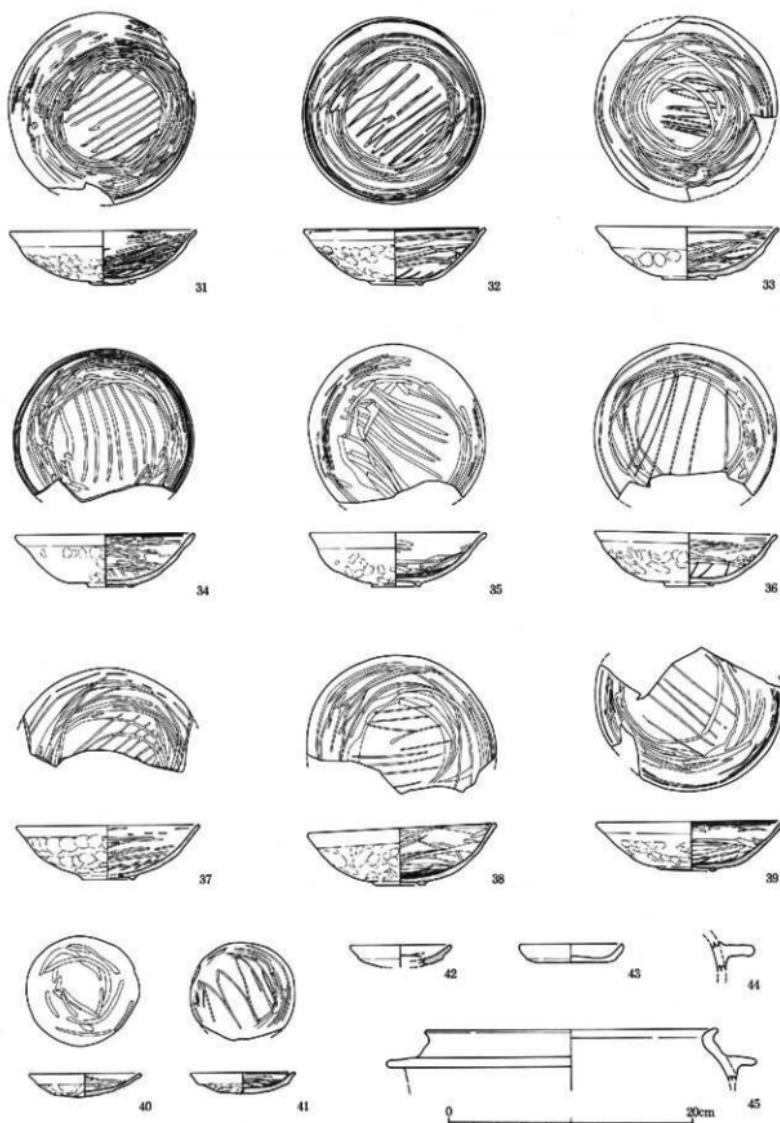
第19図 E区、井戸228遺物出土状況・断面図

木製品では杉材の杓子が第6層のT.P.46.214mで出土した。曲げ板の接合は桜樹皮を用いている。この接合部の側板中央に穿たれた孔から反対側の槽部下に柄が挿入される。接合部の内側にあたる部分の柄には縦位に目釘孔がつけられている(46)。これとは別に同様の杓子の底板が出土している(47)。同層中、T.P.45.742mでは樋材と思われる叩き棒が出土している(48)。全体的に荒削りで仕上げ、柄と敲打部との境は段をついている。柄の断面は面取りした円形となるが、敲打部は扁平な橢円形となる。半製品の状態かとも思われるが、ここでは便宜的に叩き棒とした。なお、敲打部の先端は欠失しているようである。以上の遺物は瓦器椀の編年ではII—3～IIIに相当すると思われ、他の土器類も含めて13世紀前半と考えられる。

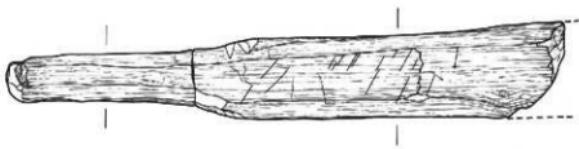
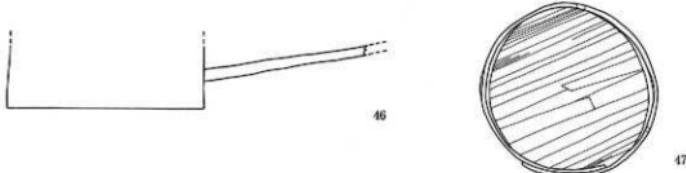
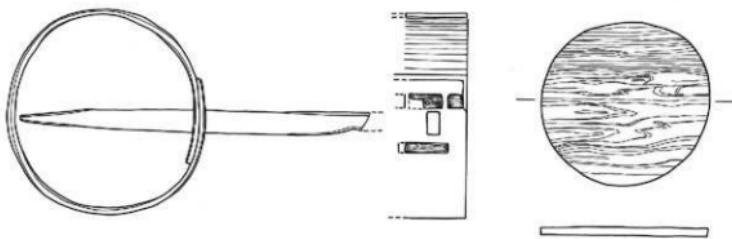
溝230（第23・25図・図版9） 調査区南部で検出された東西溝で、幅0.6～0.9m、深さ0.15～0.20mを測る。埋積土は第1層灰褐色土、第2層黄灰褐色土の2層である。第1層より瓦器椀(52)、甕(53)が出土した。小破片として白磁鉢、土師質鍋などがみられる。

溝234（第24図・図版9） 溝230に平行する東西溝で、西端は土坑231に断ち切られている。幅0.4～0.7m、深さは0.2～0.25mを測る。埋積土は5層識別された。そのうち第1、2層には5～25cm大の礫が多数投棄され、瓦器小皿(55～58)、土師器小皿(59)、羽釜(61)、須恵器の片

土中、第6層の灰黒色粘土より出土した土器類は今回検出した遺構中でも最も残存状態のよい完形に近いものが多い。特に第6層ではこれらの遺物を出土レベル毎に4回にわたり取り上げた。T.P.46.864mでは(31、32、40～44)、T.P.46.214mでは(33)、T.P.46.024mでは(36～38)、T.P.45.742mでは(34、35)が出土した。木製品では杓子、叩き棒などがある。また上層からも平瓦片(49、50)、瓦器、土師器、砥石(51)等が出土している。その他瓦器椀(33、39)、土師質羽釜(45)が出土した。瓦器椀は内底面に平行暗文、内面周囲に粗いミガキをかける。皿にも内底面に平行暗文のあるもの(41)がみられる。土師器小皿は体部一段ナデでやや内側に立ち上がるもの(43)である。

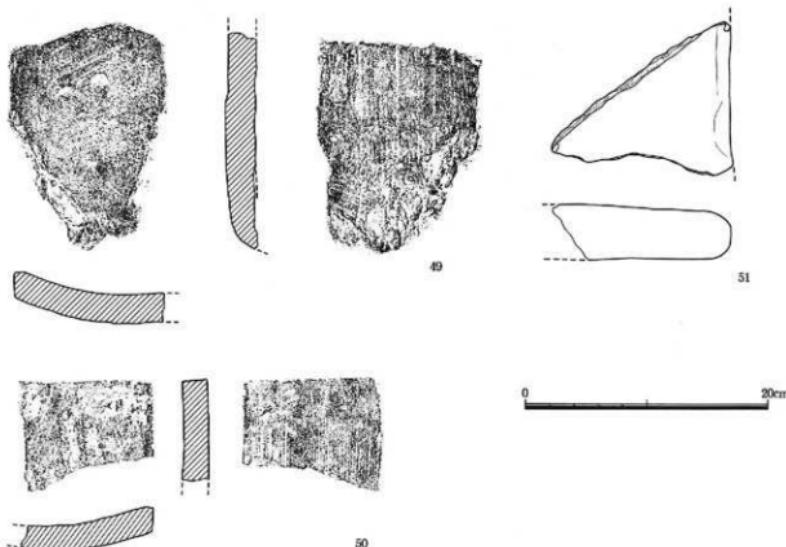


第20図 E区、井戸228出土遺物（1）



0                          20cm

第21図 E区、井戸228出土遺物（2）



第22図 E区、井戸228出土遺物（3）

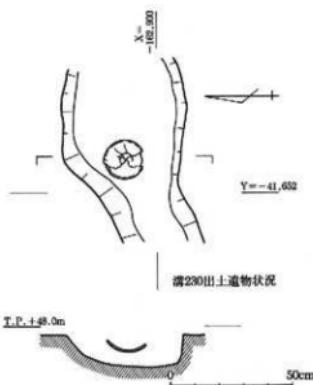
口鉢（60）、白磁碗（62、63）が出土した。碟を投棄した状況は西の土坑231や233と似ている。

溝237 溝234の南側に平行して掘込まれた、幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.23mの東西溝である。埋積土は灰色粘土である。西端が土坑233に断ち切られている。出土遺物としては須恵器甕の破片がある。

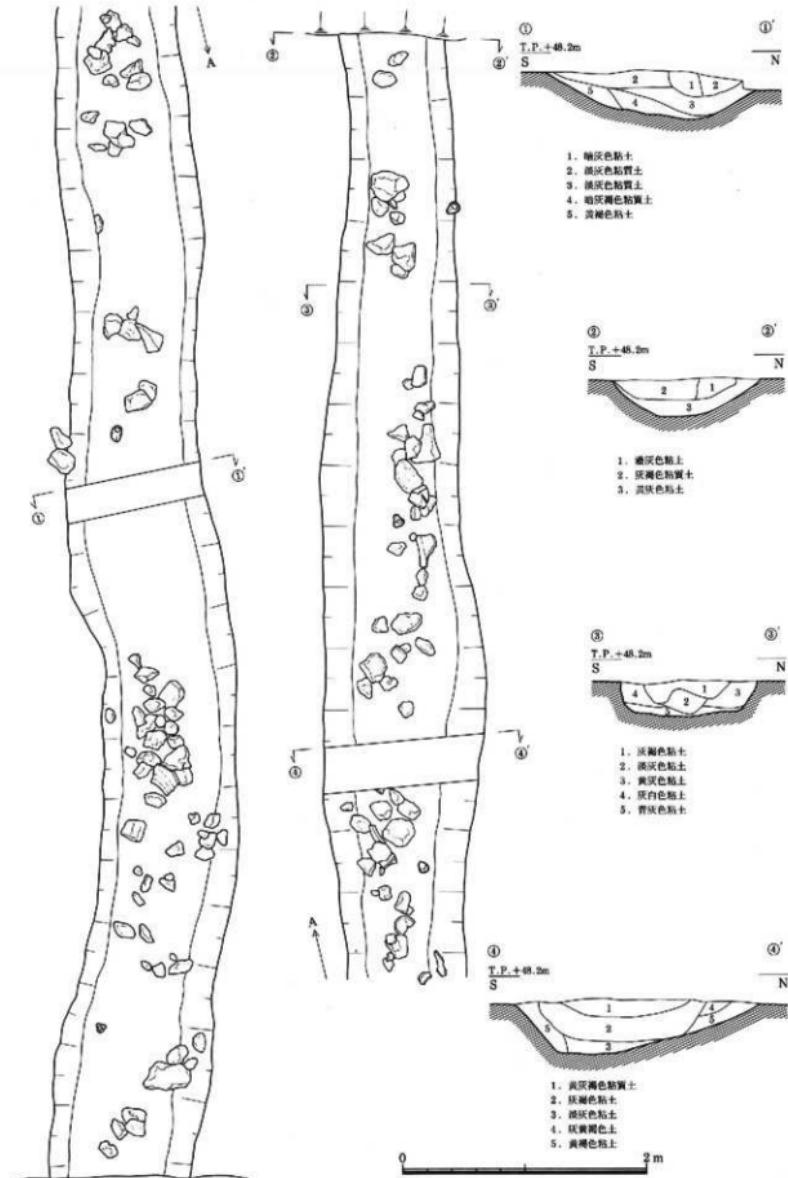
溝262（第25図）溝144に平行する南北方向の溝状遺構で長さ約5m、幅約0.8mを測る。瓦器甕（54）が出土した。

土坑110（第27図） 調査区北東部で検出された不定形な土坑である。長軸2.01m、短軸1.43m、深さ0.1mを測り、淡灰色粘質土が埋積土である。瓦器甕、土師器小皿（79）などの細片が出土している。瓦器甕は内底面に平行ミガキや格子ミガキがみられる破片がある。その他土師質羽釜片も出土している。

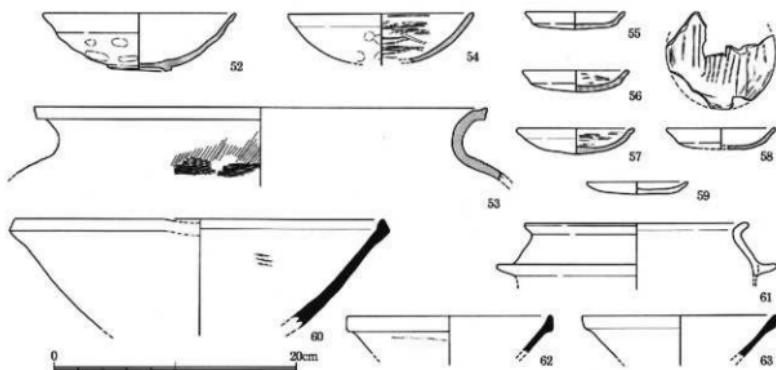
土坑113（第27図） 建物101の東、井戸228の西で検出されたほぼ長方形の土坑である。長軸4.1m、短軸1.34m、深さ0.18mを測る。埋積土は2層で、第1層は黄灰色粘質土、第2層は灰黄色



第23図 E区、溝230遺物出土状況



第24図 E区、溝234平面・断面図



第25図 E区、遺構出土遺物 (1) 溝230 (52、53)、溝234 (55~63)、溝262 (54)

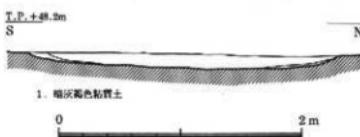
のマンガン粒が沈着する粘質土である。第1層は地山粘質土であり、掘り終えてそれほど時間を置かずして埋め戻したようである。井戸228以前に掘込まれている。出土遺物磨耗した瓦器碗 (70)、土師器小皿 (78)、土師質羽釜の破片等がある。これらの遺物は瓦器碗の編年からⅢ期に相当すると思われ、13世紀中葉～14世紀と考えられる。

**土坑132 (第27・28図・図版9)** 建物101と102との間に掘込まれた長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.07～0.09mの不定形な溜り状の土坑である。埋積土は4層識別され、出土遺物は北側に10～20cm大の砾が投棄され、南側では土器類の出土がみられた。出土土器類は瓦器小皿 (74)、土師質羽釜 (80、81)、土師器小皿の破片、青磁碗 (83)がある。

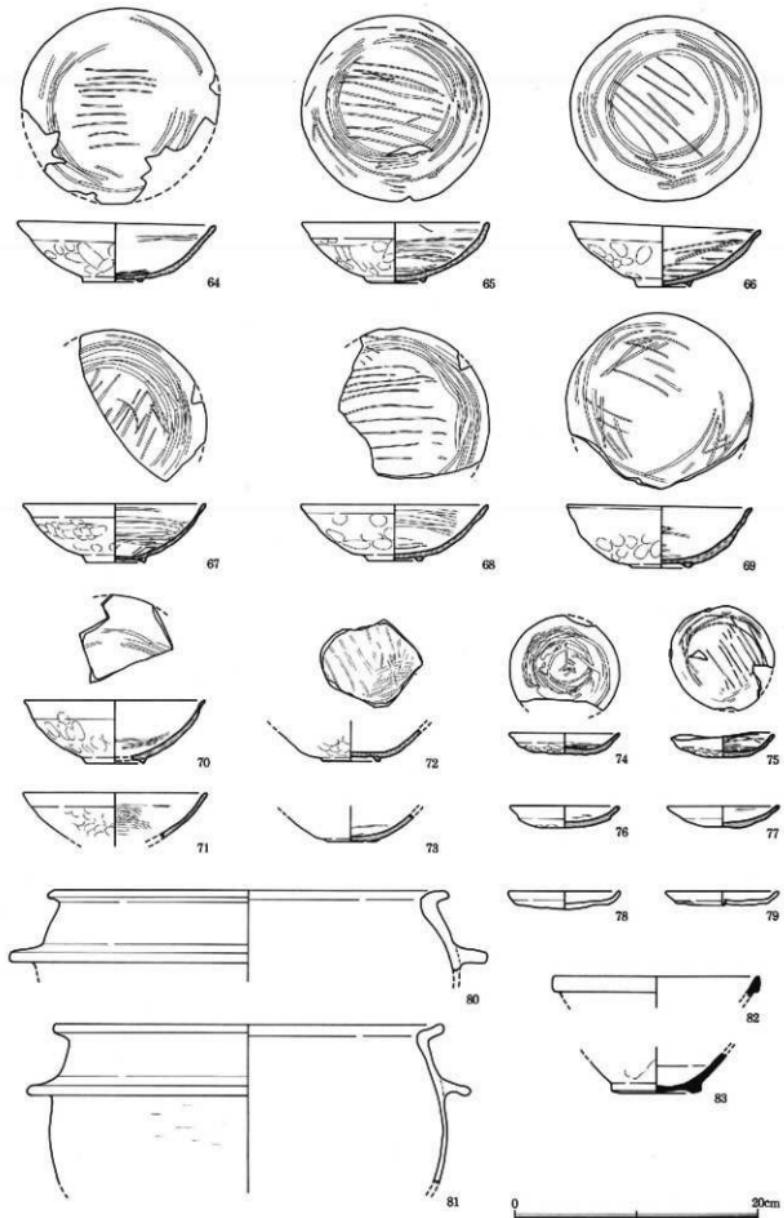
**土坑140** 建物101の南側、土坑132の西側に掘込まれた不定形土坑で、長軸2.88m、短軸1.78m、深さ0.085mを測る。埋積土は淡灰褐色粘質土である。瓦器碗、羽釜の破片が出土している。

**土坑155 (第9・26・29図)** 建物102の南辺を切って掘込まれた2.44m×2.35m、深さ0.11mの不定形土坑である。埋積土は淡灰褐色粘質土である。坑底面で建物102を構成するピット3が検出された。出土遺物には内底面に平行暗文を施す器 (84～86)、瓦器小皿 (87、88)、土師質羽釜 (89)、白磁碗 (90) が見られる。その他、白磁鉢、丸瓦等の破片がある。瓦器碗編年ではⅢ期に相当すると考えられる。

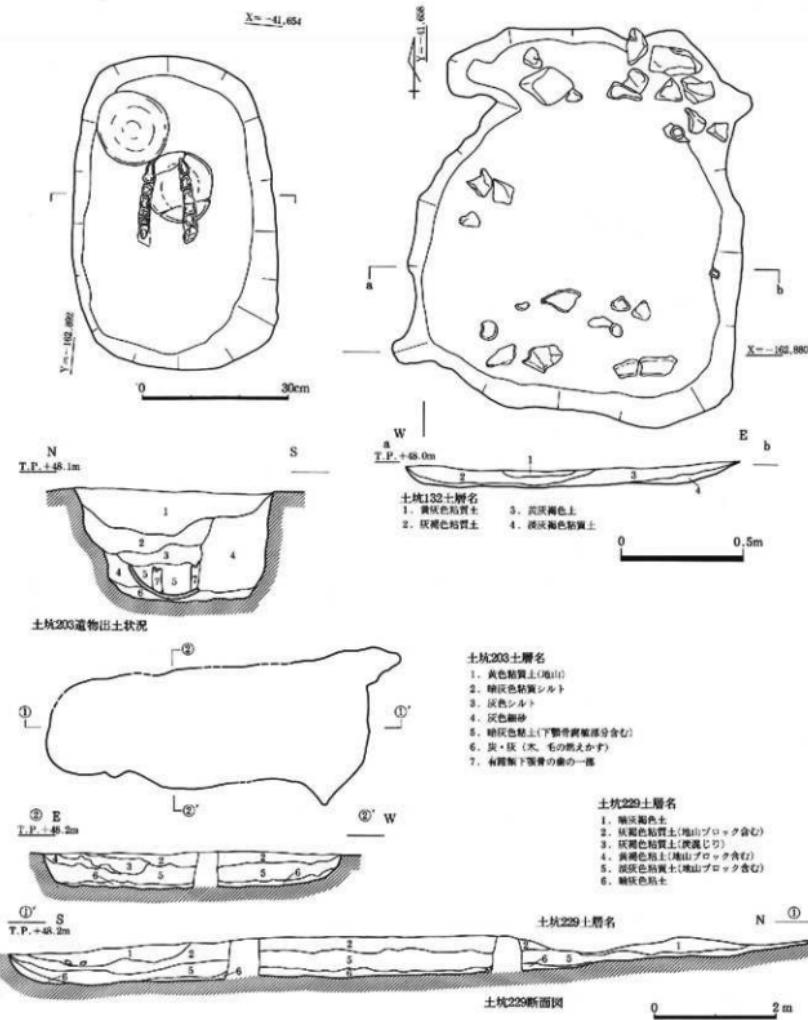
**土坑203 (第27・28図・図版10)** 調査区南半の比較的の遺構の希薄な東側に掘込まれた、ほぼ長方形の小土坑である。長軸1.3m、短軸0.85m、深さ0.46mを測る。第1、2層を除いた段階で、土坑ほぼ中央でウシまたはウマの下顎骨の遺残が検出され、さらに掘り下げる下で瓦器碗が出土した。つまり、瓦器碗の上に下顎を載せた状態で坑



第26図 E区、土坑155断面図

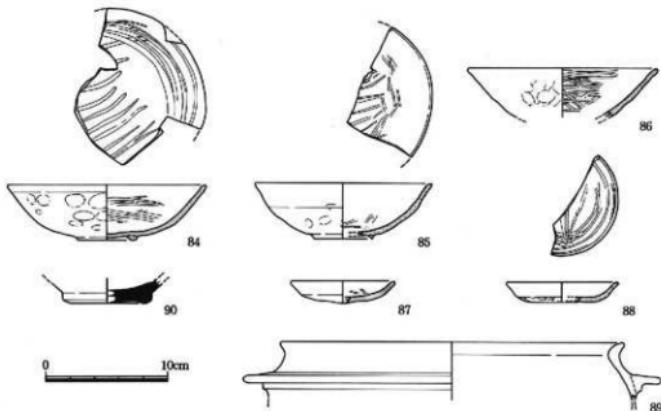


第27図 E区、遺構出土遺物（2）



第28図 E区、土坑203・132・229遺物出土状況・土層断面図

底に置いたと考えられる。この瓦器椀と同じレベルで土坑の北東隅に別の瓦器椀が置かれていた。これらの遺物を取り巻く層は第1～3層の粘質土または粘質シルトとは違って、砂である。そし



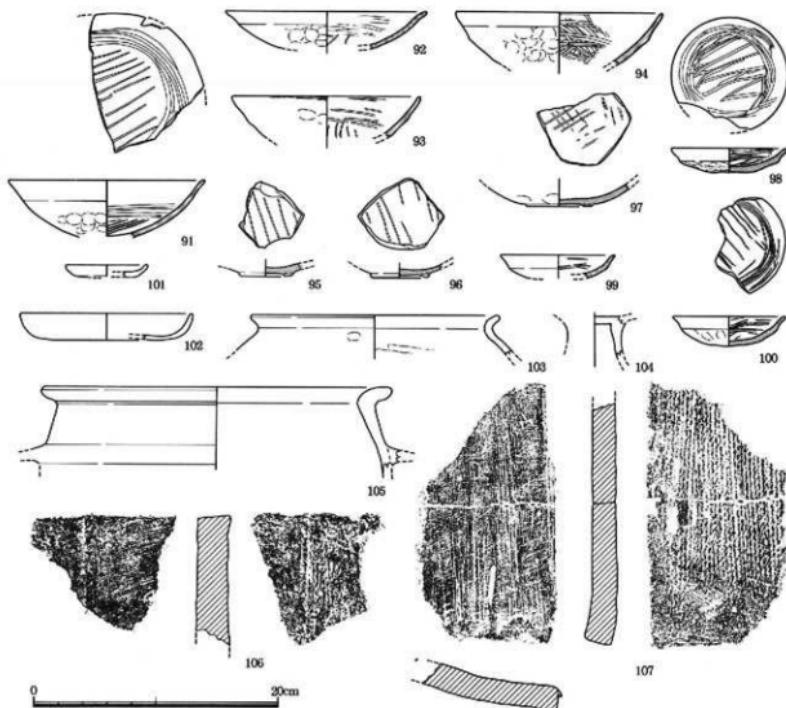
第29図 E区、土坑155出土遺物

て下顎骨や瓦器碗の内側に残る土は粘土であった。坑底面全体に炭、灰が溜り、木や獸毛の燃えた形跡が認められた。

牛馬の頭部が井戸や建物に関連する祭祀に犠牲として捧げる事例は知られているが、この場合も儀礼的行為としては同じような目的が考えられる。ただ、この土坑が北側の建物や井戸とも、また水場の池とも若干離れて、単独で掘り込まれている点が注意され出土遺物は下顎骨を除けば、瓦器碗が2点(65、66)である。内底面に平行暗文を施し、周囲を粗くヘラミガキする。瓦器碗の編年ではⅢ期に相当すると思われ、13世紀中葉と考えたい。

**土坑229(第28・30図)** 調査区東辺中央に南北に長く掘込まれた不整な長方形土坑である。長軸6.64m、短軸2.44m、深さは最も深いところで0.35mを測る。埋積土は5層に分層された。第1、3、4層には地山の黄灰色粘質土ブロックを含んでおり、土坑掘削後の埋め戻しを反映すると思われる。坑底面にはほぼ全体に3~5cmの厚さで粘土の堆積がみられた。坑底面では建物102の西辺ピット6、7が検出された。出土遺物は全層にわたってみられたが、第1層を除去した段階で、土坑南隅を中心、瓦器碗(91~97)・小皿(98~100)、土師質羽釜(105)・皿(102)・小皿(101)・甕(103)・高杯(104)須恵器杯・瓦(106、107)等が疊に混在する形で比較的まとまって出土した。瓦器碗は内底面に平行暗文が施されるもの(91~96)、格子文が施されるもの(97)がある。瓦器小皿は内底面に平行暗文のあるもの(98、100)である。瓦器碗編年ではⅢ・Ⅳ期に相当し、13世紀中葉~14世紀と考えられる。

**土坑231、232、233、235(第27図)** 調査区南西隅に集中して掘込まれた土坑である。深さ0.5mの土坑232を除き、他は深さ0.2~0.3mと浅い。堆積土はいずれも灰色~黄色粘土、盛土として用いられた明黄色の山土が混在する。土坑231、233、235ではこの土に礫が混じる。出土遺物は土坑231から瓦器碗(73)等、他の遺構からは瓦器碗、土師質羽釜等、須恵質甕等瓦の小片が



第30図 E区、土坑229出土遺物

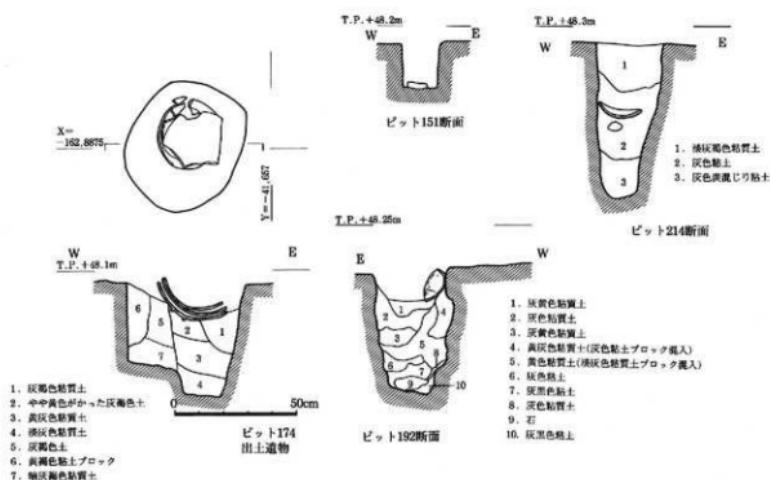
出土しているが、遺物の摩滅が著しい。溝234、237を断ち切っている。

**ピット（第27・31・32図）** 建物に伴うピットか、またはその他の施設のピットかどうか、検討を要するピット群があるが、その中には柱抜き取り穴を埋め戻す際、瓦器椀を投じた例がある（ピット174、214）。埋め戻しのときに意識的に入れたものであろうか。ピット174では3点の椀が重ねられていた（67～69）。ピット214からは瓦器椀（64）等が出土した。瓦器椀はいずれも内底面に粗い平行暗文が施され、やや深みのある椀である。瓦器椀は編年ではⅢ・Ⅳ期に相当すると思われ、13世紀中葉～14世紀と考えられる。ピット151は柱の根石として平瓦を据えていた（110）。その他に遺物の出土したピットとしては、ピット189からは瓦器椀（72）が、ピット119からは瓦器椀（71）、瓦器小皿（75、77）、ピット117からは瓦器小皿（76）、ピット209からは白磁の碗（82）が出土した。（75、76）は内底面に平行暗文が施される。

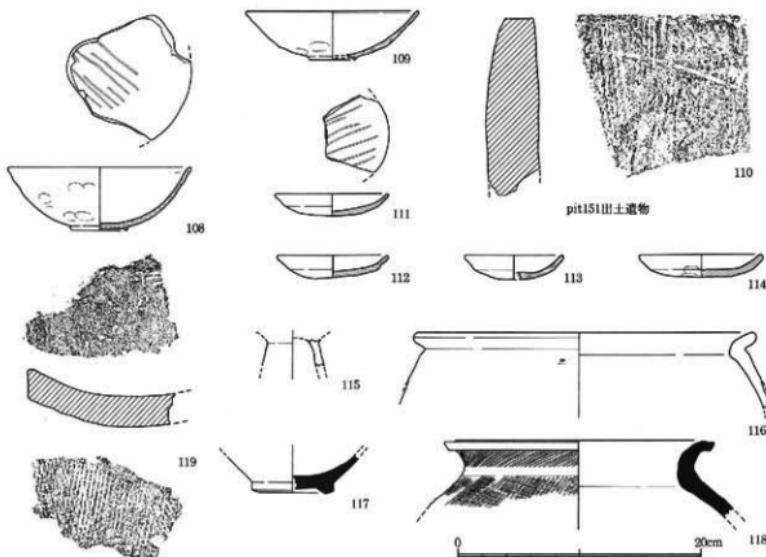
#### 包含層出土遺（第32図）

瓦器椀（108、109）、瓦器小皿（111～114）、土師質高坏（115）、壺（116）、白磁碗（117）、東播

系の壺(118)、平瓦(119)等が出土した。瓦器焼成年ではⅢ・Ⅳ期に相当すると思われ、13世紀中葉～14世紀と考えられる。



第31図 E区、ピット174遺物出土状況・断面図、ピット151・192・214断面図



第32図 E区、ピット151、包含層出土遺物

## 第5章 平成10年度調査成果

### 第1節 基本層序（第35図）

平成10年度の調査区はかつて西除川の支流であった旧河川を挟んで南と北で堆積土の質にやや違いが認められる。基本的には、前年度と同じ堆積土が調査区内において観察されるが、包含層下の基盤土のうち第IV章第1節で述べた砂礫土の隆起がH区南半で特に顕著である。それがさらに南してE区、G区あたりまで続くが、H区南半にみられるほどの隆起は認められない。この砂礫土の堆積する南北100mほどの区間が後述する建物群の占める位置とほぼ等しいことから、調査区全体の中でおそらくこの範囲が最も安定した地盤を提供していたようである。

この地山上に堆積する遺物包含層となる土壤は、前年度の調査区では特にE区で確認した堆積状況とほとんど変わりない。わずかに一部に中世以前の暗い褐色の粘質土の包含層が溜まる状況も同様である。つまり、中世の耕作土とその下の黄色帯の床土という組み合わせ、その繰り返しが重層して観察される。これは既に指摘している耕地確保のための旧地形の改変が中世に活発に行われた結果と考えられる。また今回もその連続が認められた旧河川の滯水過程もこのような中世耕作土の累積過程に連動して、徐々に埋没し終えていった状況が観察される。

主に中世の耕作作業によって堆積していった包含層からは瓦器、陶磁器、瓦など中世遺物の出土が中心であるが、須恵器、土師器、埴輪、サヌカイト片などわずかながらも細片が混入し、当地点の中世以前の土地の未熟な開発の痕跡も推測される。

このように基本層序の堆積状況にも、後述する遺構出土の中世遺物から推し量られる13世紀という時期が、この地点の土地利用の変遷の中で最も画期的である事実をうかがうことができる。

### 第2節 遺構と遺物

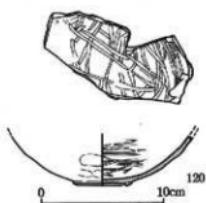
#### 第1項 F区（付図1・図版12）

調査対象区域の南端に位置する調査区で、東西方向の長方形となり、発掘面積は301.2m<sup>2</sup>を測る。中世遺物包含層を除いて、耕作溝、轍の跡が検出されている。主な遺構の特徴は以下の通りである。

溝333・334 調査区の中央よりで検出された南北方向の溝である。いずれも幅0.63～0.75m、深さ0.03～0.08mを測る。方向はN-5°-W（溝333）、N-3°-W（溝334）。埋土は黄色（5Y7/6）粘質土で、出土遺物としては溝333より瓦器碗片、土師質羽釜体部片、土師器片、サヌカイト片が出土している。瓦器碗には粗く太いミガキが認められる。

溝339（第33図） 調査区の中央よりで検出された南北方向の溝で、幅0.15～0.2mを測る。方位はN-3°-Wで、瓦器碗（120）が出土した。（120）は、内底面に密にヘラミガキを施し、外

面には指揮さえを施す。高台は、断面三角形である。



第33図 F区、溝339出土遺物

溝355 調査区西半で検出された南東～北西方向の溝で、座標北との触れはN-38°-Wであり、他の溝の方向とは違っている。幅0.23～0.45m、深さ0.04～0.08mを測る。埋土は浅黄色(7.5Y7/3)粘質土である。出土遺物としては古式土師器甕と思われる摩滅した破片がある。いずれの遺物も摩滅が著しく固化することはできなかった。

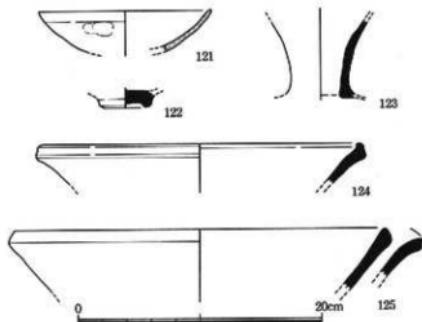
溝360・361 調査区の西端で検出された南北方向に平行する溝である。幅0.06～0.14m、深さ0.06～0.14mを測る。方向はN-2°-W。埋土は浅黄色(7.5Y7/3)砂質土である。両溝の間隔は1.9mと一定している。これらの溝の続きは北側のG区南端で検出されている。遺物の出土はなかった。

轍跡 調査区全体にわたって検出された幅0.05～0.08m(検出時)、深さ0.05～0.08m、埋土が明灰色微砂の2条一対の細溝状の痕跡である。他の溝とは方向や規模、埋土の質に違いがある。それぞれの轍の座標北に対する偏角、間隔は以下のようになる。遺物の出土は、なかった。

轍跡300・301	N-18°-E	1.1m
轍跡311・315	N-36°-E	1.0～1.1m
轍跡319・321	N-3°-E	1.4m
轍跡347・348	N-38°-E	1.4m
轍跡349・356	N-45°-E	1.4～1.5m

間隔からみれば1.0～1.1mと1.4～1.5mの広狭がある。前回の調査ではA・B区で方向、規模、埋土が近い轍跡が検出されているが、全て幅広のものであった。

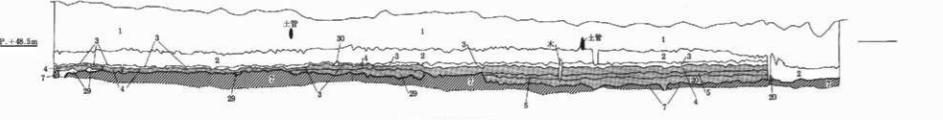
包含層出土遺物(第34図) 瓦器椀(121)、青磁碗(122)、須恵器の平瓶(123)、鉢(124,125)が出土した。(123)は混入品である。



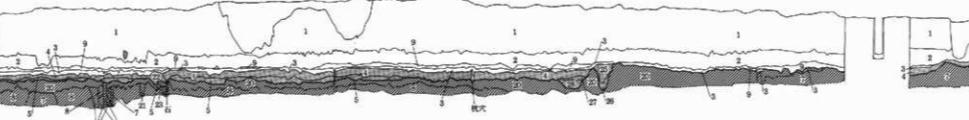
第34図 F区、包含層出土遺物



## F区北壁土層断面図



### 上層断面図



### G区南壁土层断面图

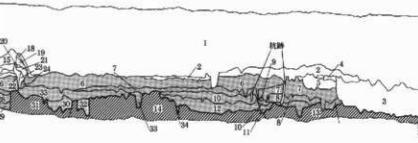


F区北壁斷面土層名

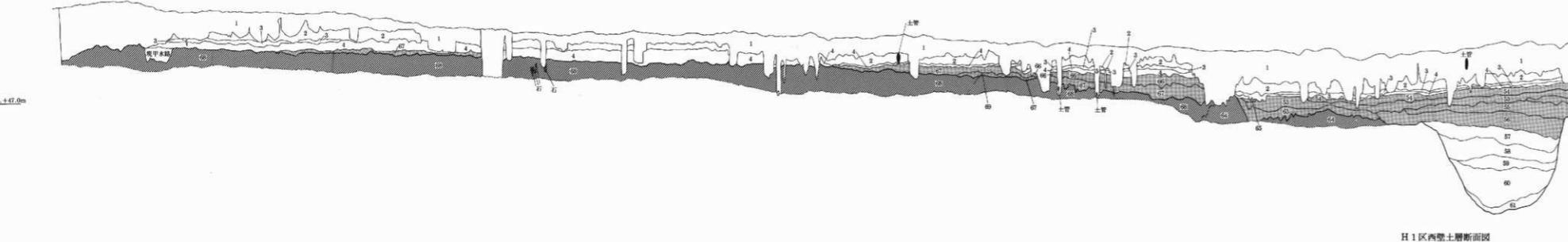
- ① 山土層
- ② 深 7.5Y 6/1 (耕土)
- ③ 厚 7.5Y 6/8 (耕土)
- ④ 黃 SY 7/6 細土質
- ⑤ 帶鐵 2.5Y 7/8 細土質
- ⑥ 泥炭 2.5Y 7/8 細土質
- ⑦ 深黃 SY 7/3 細砂土質
- ⑧ 砂質土
- ⑨ 深黃 SY 7/3 細土質
- ⑩ 深黃 SY 7/3 細土質
- ⑪ 白 SY 7/1 黃沙土質
- ⑫ 鳄卵石 2.5Y 7/8 細砂土質
- ⑬ 灰褐色 2.5Y 7/8 細砂土質
- ⑭ 灰褐色 2.5Y 7/8 細砂土質
- ⑮ 白 SY 8/1 灰土質上壤土
- ⑯ 帶鐵 2.5Y 6/8 細土質
- ⑰ 黃 SY 7/3 黃土質上壤土
- ⑲ 明帶鐵 2.5Y 6/8 細土質
- ⑳ 黃 2.5Y 6/8 細土質
- ㉑ 深黃 7.5Y 7/3 細砂土質
- ㉒ 白 SY 10/1 黃土質上壤土

#### 地質面土層名

上層名



H1区北部西壁土层断面图



H1区西壁上

第35図 土層断面図 (F~H区)

## 第2項 G区（付図1・図版12）

F区北側に接して設けられた南北34m、東西50mの調査区で、面積は564m<sup>2</sup>を測る。東西部分は現用水路で分断されている。この水路を越えて東11mのところでは中世包含層下で比高0.15mの段差を測る東側一帯の削平が認められ、また南壁から3.5m～4.0mより北側も同様に削平されていた。これら削平による段下の区域は段上に比べて出水が多く、特に東端ではそれが激しかった。しかしそのような立地の違いにもかかわらず南北部分と東西部分で建物跡が1棟ずつ検出されている。その他溝、土坑などの遺構も認められた。

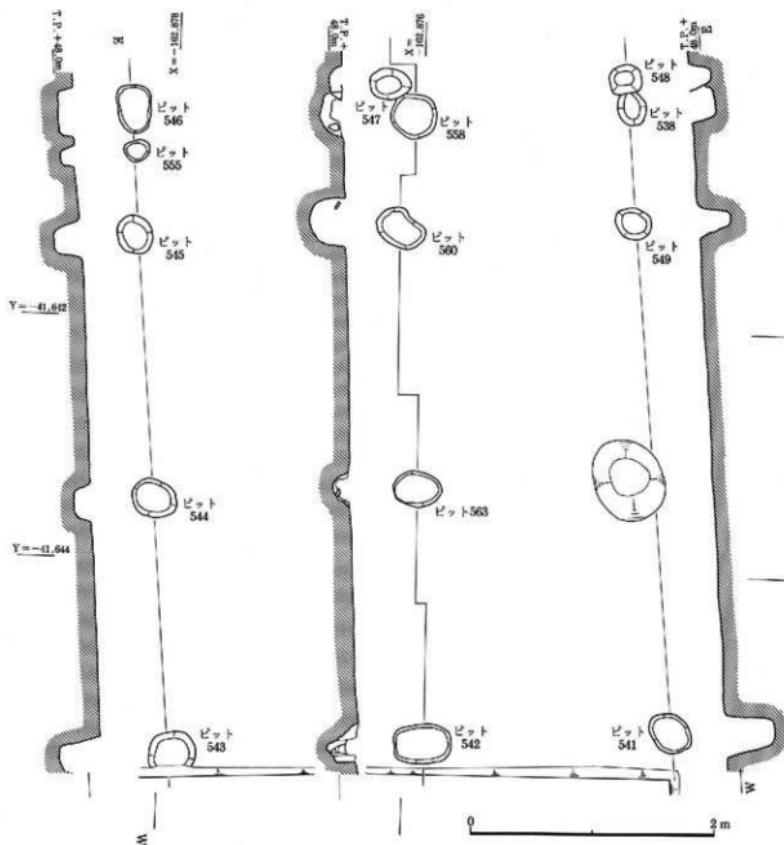
建物103（第36・37図） 調査区南北部分の北半で検出された。南北2間（4.1m）、東西2間（4.3m）以上を測る東西方向の建物で、西側に半間分（1.1m）ほどが取り付く。面積は22.4m<sup>2</sup>以上になる。この半間部分に当たるピット538と548には重複がみられるので、据え直しがあったと考えられる。建物の主軸方向はN-80°-Eである。柱穴間は東西で2.15m、南北で1.9～2.15mを測る。軒出し部分ではピット538、555、558で画される古い時期の柱間寸法は東西0.7～0.95m、新しい時期のものは1.0～1.2mを測り、若干長く出している。柱穴掘り方は径0.2m～0.4mのはば円形であり、深さは0.09m～0.42mを測る。柱根の残るものはみられなかったが、ピット541、542では柱痕の部分に炭、焼土の混入が認められ、後者では根石が残っていた。他のピットは全て抜き取り後の埋土が観察された。

柱穴のうちピット541、543では土師質羽釜体部片、545、560では瓦器碗片が、558ではこれに青磁碗片、また542、545では硬化した炉壁片が出土している。ここでは比較的大きい破片のピット560出土の椀（126）について図示した。内底面に太く粗いラセン暗文を施し、外面にはミガキがなく、指オサエのままである。口径13.7cm、器高4.3cm。

建物104（第38～40図） 東西部分の東端の溝412・423に断ち切られる形で検出された。南北2間（3.4m）、東西3間（5.4m）以上を測る東西方向の建物で、主軸方向はN-85°-Eである。柱穴間は1.7m～1.9m測り、平均1.82mとなる。面積は19.25m<sup>2</sup>以上になる。柱穴掘り方は径0.29m～0.37mのはば円形であるが、ピット410だけが広く0.56mとなるのは、設置時点での位置合わせによるためか、あるいは後のやり替えによるものではないか。柱穴の深さは0.41m～0.6m。ピット407（127）、411（129）、424（130）、427（128）にはスギの柱根が残り、ピット409では柱根下に瓦器碗の破片が4枚重ねの状態で検出されている。ピット411、424では柱の固定を補強するためこれに接して置かれたと思われる10cm大の石が認められた。また柱の抜き取りが観察されたピット409、410の埋め戻し土には石が投棄されていた。

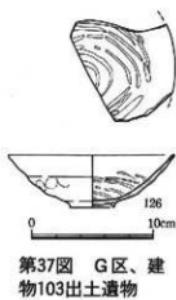
柱穴ではピット407、409、411で瓦器碗片が出土している。瓦器は太く粗いミガキを施している。また407、410では壁土片が出土している。

建物104を構成するピットではないが、ピット408から瓦器碗（131）が出土した。（131）外面に指押さえを施し、高台は断面三角形である。

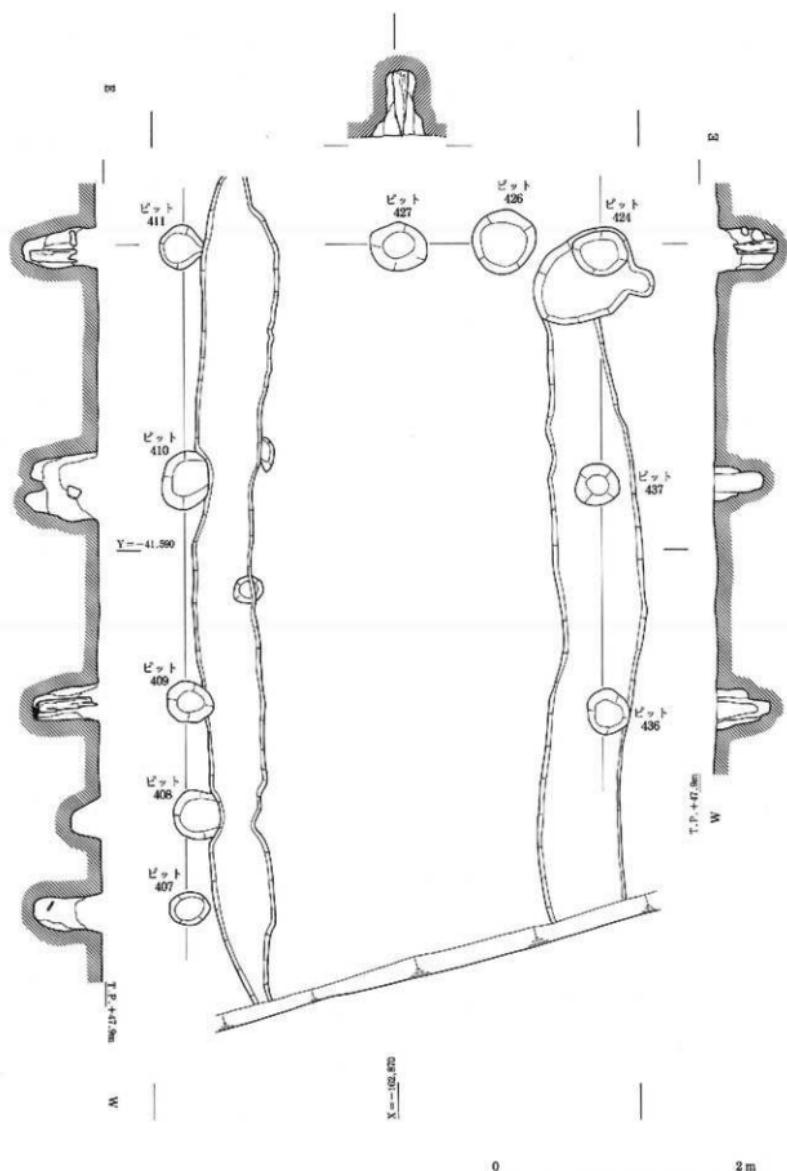


第36図 G区、建物103平面・断面図

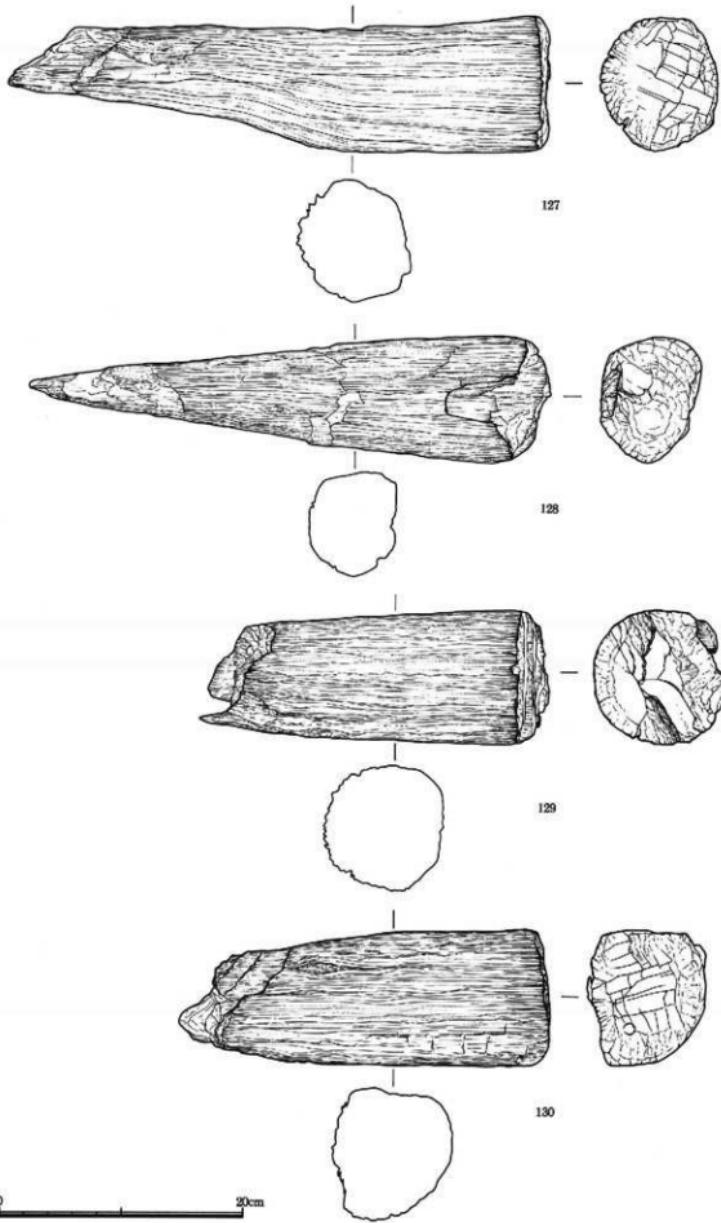
溝412・423 調査区東端で検出された東西に平行する溝である。両溝の間隔は2.0~2.4m。溝412は幅0.14~0.64m、深さ0.03~0.07m、溝423は幅0.44~0.72m、深さ0.03~0.07mを測り、埋土は412が灰褐色(10YR6/2)粘質土、423が浅黄色(2.5Y7/3)粘質土である。方向はN-85°-E。出土遺物では、溝412から瓦器底片、土師器羽釜体部片、溝423では瓦器、土師器の細片が出土している。これらの溝は建物104と重複していて、建物の埋没後の掘り込みである。溝432は423のわずかな痕跡であろう。



第37図 G区、建物103出土遺物



第38図 G区、建物104平面・断面図



第39图 G区、建物104出土柱痕

溝438 溝439の東側に平行する南北溝である。北半でやや東に緩やかに向きを変え、N-8°-Eの振れがある。幅0.32~0.76m、深さ0.07~0.12mを測り、埋土は第1層が灰白色(5Y7/1)砂質土、第2層が灰白色(5Y7/2)砂質土である。

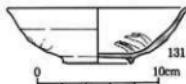
溝439(第41図・図版13) 溝443の東側に平行する南北溝である。

南半ではこの溝の西肩だけを残し、東肩は東側一帯の地下げにより削平されている。

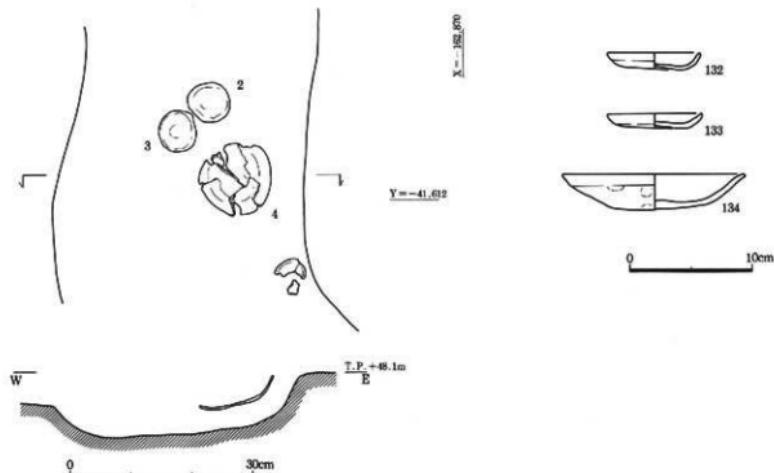
また北半も地下げにより削平されているので、大半が溝の底面だけが残る形となった。その北半の底面部分では幅0.14m、深さ0.02mを測り、埋土は南壁断面での観察によると、第1層が浅黄色(5Y7/3)粘質土、第2層が灰色(5Y6/1)粘質土である。方向はN-3°-W。南半で残った西肩から溝内に流れ込む灰の堆積がみられ、その中から土師器皿、小皿3点がまとまって出土した。土師器小皿(132、133)は口径7.5cm、器高1.1~1.3cmを測る淡橙色軟質の器で、口縁部外面が面をなす。中皿(134)は口径15.0cm、器高3.0cmで、口縁部がやや外反気味にのびる淡橙色軟質で、砂粒の混入が多い。

溝441・443 一連の南北溝である。北半は地下げによって削平されている。幅0.32~0.54m、深さ0.05~0.06m、座標北を指し、埋土は鉄分の沈着する灰黄色(2.5Y7/2)粘質土である。

溝451 現用水路に平行してその西約6mのところに掘り込まれた幅0.80~1.14m、深さ0.07~0.12mの南北溝である。方向は座標北に一致する。北半は地下げにより削平され底面だけが残る。埋土は灰色(5Y6/1)粘質土である。



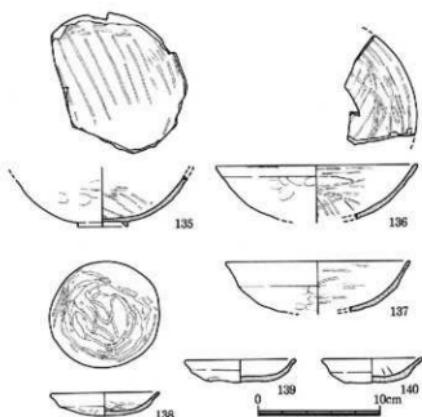
第40図 G区、建  
物104出土遺物



第41図 G区、溝439遺物出土状況・断面図、出土遺物

溝530・531 この平行する溝はF区西端で検出した南北溝（360・361）に連続する。幅0.12～

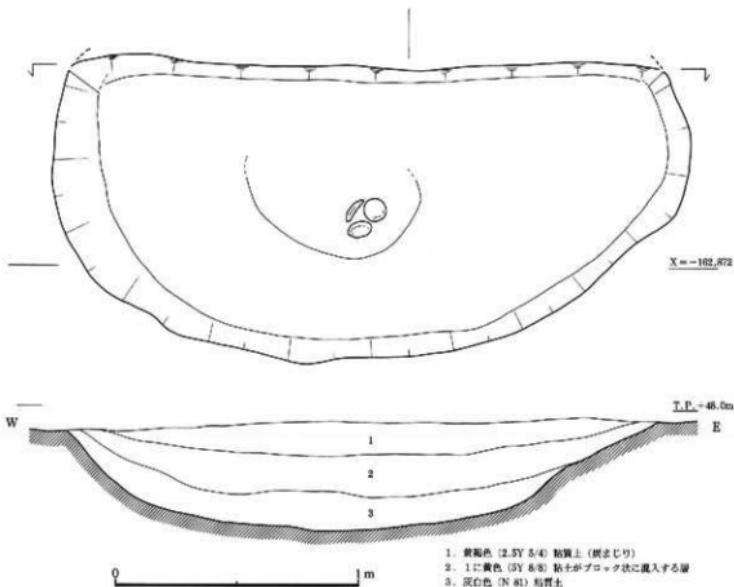
0.20m、深さ0.03～0.04mを測る。方向はN-3°-W。埋土や両溝の間隔も同じである。しかし北に向かって浅くなり、後世の削平により断ち消えている。瓦器碗の編年ではⅢ期に相当すると考えられる。



第42図 G区、土坑435出土遺物

土坑435（第42・43図・図版13） 建物104の西南側に掘り込まれている。径2.6mのほぼ円形と思われるが、南半は調査区外に及んでいる。深さは0.07mで、埋土は3層に分層された。第2層より瓦器小皿がまとめて出土した。口縁端部が外反気味に上方にのびる形態である。

(138)は口径8.4cm、器高2.0cm、(139)

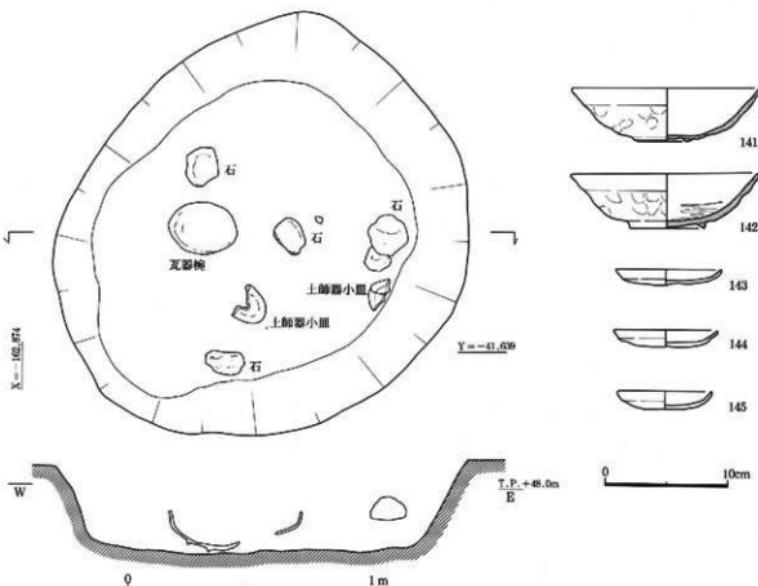


第43図 G区、土坑435遺物出土状況・断面図

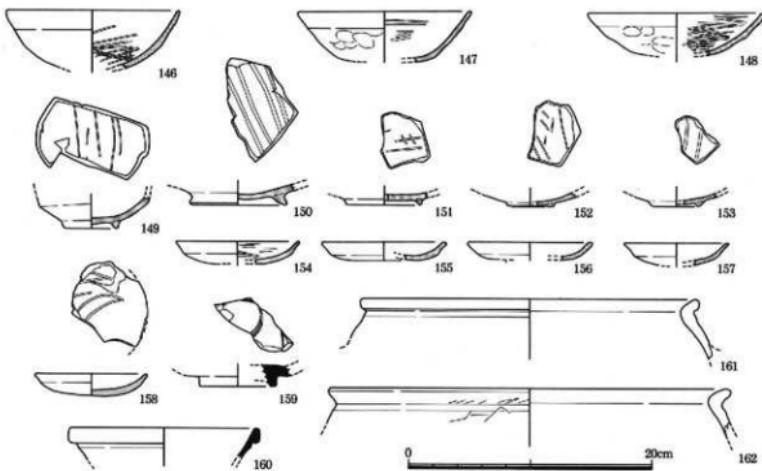
は口径8.1~9.0cm、器高1.9~2.0cmで内底面に粗く太い暗文を施し、周囲にも粗いミガキをかけるもの、(140)は口径9.2cm、器高1.9cmを測る。他には瓦器碗(135~137)、土師器細片等がある。

**土坑478 (第44図・図版13)** 建物103の西北隅に接して掘り込まれたほぼ円形の土坑である。径0.8m~0.85m、深さ0.1mを測る。埋土は上下2層に分かれ、上層では焼土、灰のレンズ状堆積が観察された。また下層の灰褐色土を除去する過程で瓦器、土師器皿の破片が出土し、底面では瓦器碗1個体と比較的大きい破片の土師器小皿、瓦器皿、土師器羽釜部～底部片、須恵器鉢片が10cm大の石とともに出土している。瓦器碗、土師器小皿を図示した。(141)は口径15.6cm、器高4.5cm、(142)は口径15.7cm、器高4.4cmを測る。(141)の内底面には粗く太い平行暗文が認められる。外面はいずれも指オサエのままでミガキ調整はみられない。小皿(143~145)は口径8.1~8.4cm、器高1.3cmの淡橙色で、口縁端部は内傾気味に終わる。瓦器碗の編年ではIII-3期に相当すると考えられる。

**包含層出土遺物 (第45図)** 瓦器碗(146~153)、瓦器小皿(154~158)、青磁碗(159)、白磁碗(160)、土師質羽釜(161、162)が出土した。(146、150、153)は内面底面に平行暗文を施し、(148)は粗雑な暗文を施す。



第44図 G区、土坑478遺物出土状況・断面図、出土遺物



第45図 G区、包含層出土遺物

### 第3項 H区（付図1・図版14～16）

G区と平成10年度の調査区E区の北側に広がる、南北延長170mにわたる面積5570m<sup>2</sup>の調査区である。調査区北半では平成10年度調査区のD区で南北方向に検出された河川跡が連続し、中世ではこの河川跡を挟んで、南半は建物、井戸、道路の側溝、土坑墓など地割りにしたがったまとまりある生活域であり、北半は不定形な落ち込みや、自然地形を利用した溝群など生産域、つまり耕作地となっている。また中世以前の遺構は河川も含め、全て自然地形に左右された溝である。

中世以前と以後については明確な時期を把握できる遺構・遺物はほとんどない。したがって以前をかりに古代、以後を単に中世以降と便宜的に分けている。また遺物の出土をみなくとも、重複関係、層序関係、土質、掘り込み状態などからそのいざれかに帰属させたものもある。

### 古代

溝629（第46・47図・図版21）・1087（図版21） 河川の蛇行部の西岸を斜めに横断する形に掘り込まれた幅0.83～1.78m、深さ0.23～0.56mの溝である。方向はN-23°-Eに振れる。北端は河岸の傾斜面に切り込むように流れ込んでいる。断面観察（第76図）に示したように、溝底面には粗い流砂の堆積があり、その後粘土質の堆積へと変化する。底面に近い粗砂からは摩滅した布留式土器の甕口縁部片、須恵器坏身片、基辺が三角形状を呈するサヌカイト製石鎌などが、それより上位の粘土質の土層では東側から投棄された状態の須恵器甕が溝肩近くで出土した。この溝は南端で中世溝1085に断ち切られている。出土遺物のうち溝の埋没時期を示すと思われる土器を

図示した。土師器の布留式甕  
(163)、須恵器の杯蓋(164  
~166)、甕(167)である。

(163)の口縁部はやや内湾  
して立ち上がっている。

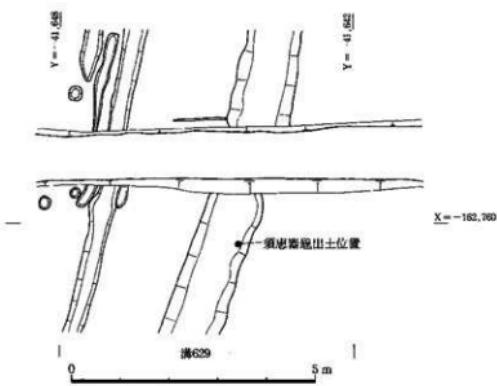
(165、166)は外面天井部か  
ら約1/3を回転ヘラ削りで仕  
上げている。(167)は口縁  
部を欠失する。頸部にはやや  
崩れた波状文が巡るだけで他  
に文様帶はない。体部最大径  
は球形のはば中央にあり、肩  
の張りはなくなだらかに下る。

体部には外方から内方に向かって円孔が穿  
たれている。体部下半は不整方向にナデて  
いる。陶邑編年II-2、3段階に相当し、  
6世紀中頃と考えられる。

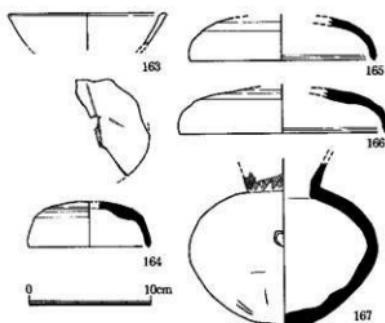
溝641 上記の溝の西に沿う形で掘り込ま  
れた幅0.32~0.54m、深さ0.10~0.17mを  
測る溝である。埋土は褐色粘土である。方  
向はN-9°-E、次いで北半はN-23°  
-Wと変化する。出土遺物はなかったが、  
上記溝と平行することや、埋土の土質から  
みて中世とは考えられない。溝1014もこの  
溝の連続と思われる。

溝924 調査区北部の河川流跡の右岸に流れ込む溝である。幅0.40~1.62m、深さ0.11~0.27mを測る。自然地形の起伏にしたがって東から西へと流れた流跡で、N-75°-Wの振れがある。  
出土遺物はない。しかし暗褐色粘土の埋土の特徴から見て少なくとも中世の溝ではないので、古  
代の遺構として挙げておきたい。

溝1236 旧河川の左岸から西北~南北方向に、N-30°-Wの振れで流れ込む幅1.15m、深さ  
0.26mの溝である。埋土は5層に区分した。出土遺物はなかったが、土質や土色からみて、やは  
りこの時期に含めた。



第46図 H区、溝629遺物出土状況・断面図

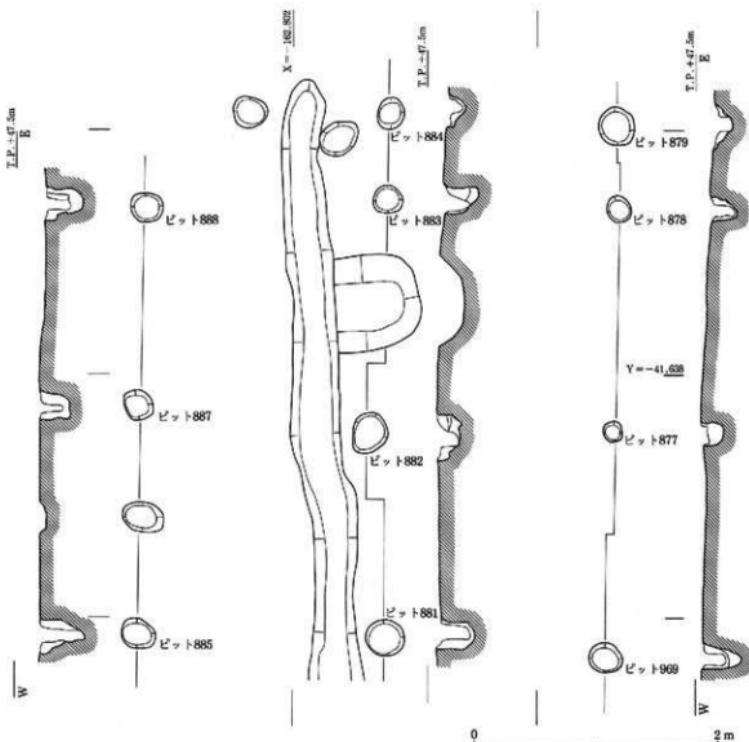


第47図 H区、溝629出土遺物

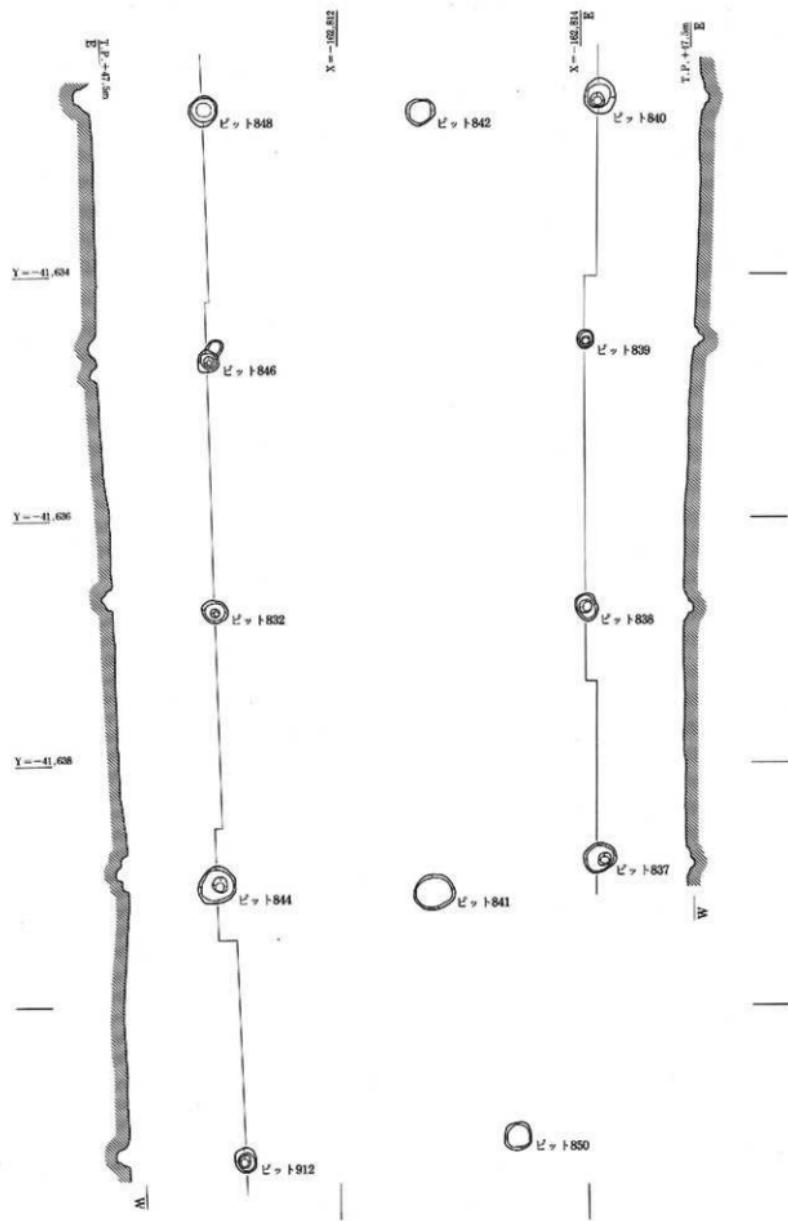
## 中世

**建物105（第48図）** 本調査区の居住域と想定される河川以南の区域でもっとも北に位置する建物である。建物107の北に4m隔てて位置する2間（3.6m）×2間（4.0m）の総柱建物である。東側に若干の突出部が付く。面積は14.4m<sup>2</sup>。柱穴掘り方は径0.2~0.28m、深さ0.16~0.36mで、柱間は1.65~2.0mを測る。軸方向は座標北に一致する。埋土は灰色粘土が主体であるが、ピット882では炭の混入が認められた。ピット877では瓦器細片、878では瓦器椀底部片が出土した。

**建物106（第49図）** 2間（3.2m）×4間（6.5m）の東西方向を主軸とする建物である。西側に1間（2.2m）×1間（2.3m）が取り付く。面積は22.75m<sup>2</sup>。柱穴掘り方は径0.14m~0.33m、深



第48図 H区、建物105平面・断面図



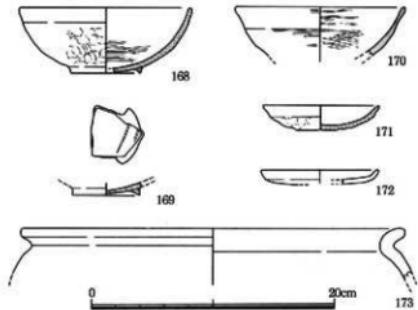
第49図 H区、建物106平面・断面図

さは0.08m～0.14mを測る。柱間寸法は桁行が2.0m～2.26m、梁行が1.5m～1.8mであるが、西側突出部は開きが大きく2.25mを測る。主軸はN-88°-E。ピット846からは瓦器碗片、840からは瓦器碗と土師器の破片が出土している。

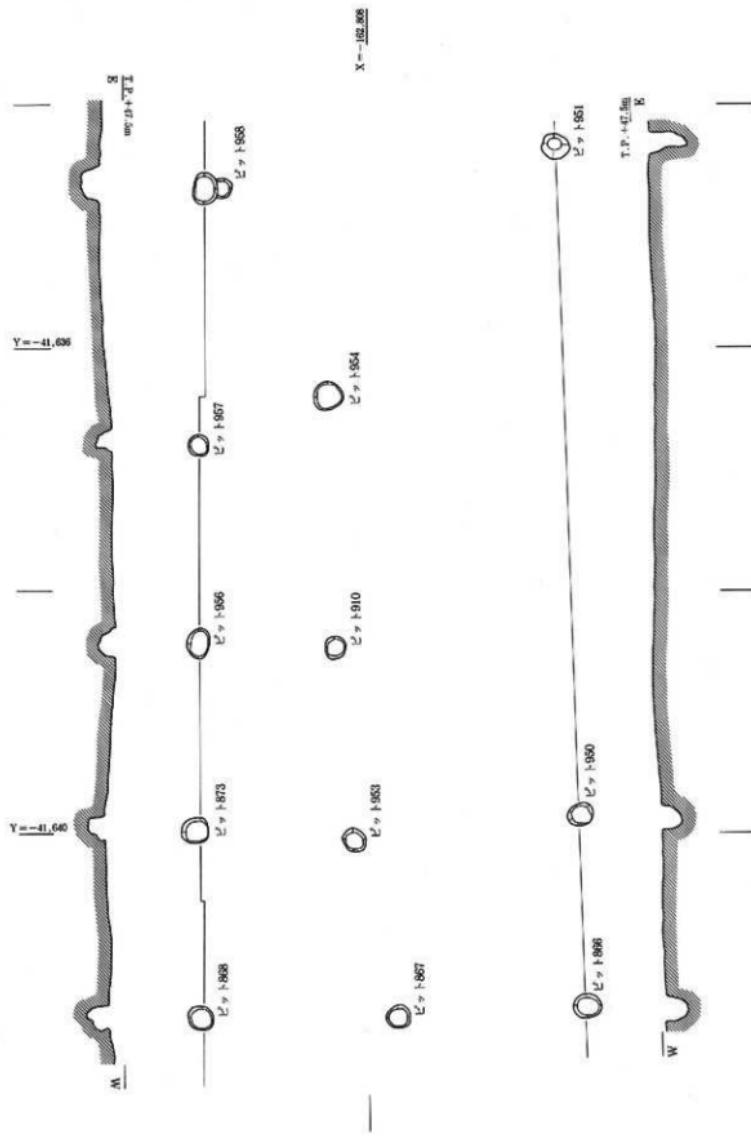
建物107（第51図） 2間（3.2m）×5間（7.0m）の東西方向を主軸とする建物である。しかし南辺のピット2ヶ所と東辺の1ヶ所については検出し得なかった。面積は22.4m<sup>2</sup>。柱穴掘り方は径0.16m～0.26m、深さ0.08m～0.33mである。主軸はN-92°-E。柱間寸法は桁行、梁行ともに1.5m～1.65mで、桁行の東の1間分だけが2.15mと広い。南隣の建物106との間隔は1.3～1.4mである。ピット866より瓦器碗体部片が出土している。

建物108（第52図） 旧河川の流跡が南北方向から東に大きく蛇行する右岸で、落ち込み1191の底面で検出された。1間（1.05m～1.65m）×3間（4.5m～4.7m）の東西建物で、主軸はN-85°-Eである。面積は6m<sup>2</sup>を測る。柱掘り方の径は0.06m～0.2m、深さは0.04m～0.2mを測る。本調査区の他の建物の立地とは違い、河岸のやや低いところに掘り込まれている。規模、立地、周辺の遺構との位置関係などからみて住まいとは考えがたい。河岸の段状の傾斜面の余地に合わせて建てられた仮小屋程度の施設と思われる。

建物109（第50・53図） 建物107から西に16m、また建物108から南へは11m隔て設けられた建物である。水路、ガス管などに断ち切られた状態で検出された。2間（3.8m～4.0m）×4間（7.8m～8.0m）の南北建物で、主軸はN-1°-E。柱穴掘り方は径0.23m～0.38m、深さ0.2m～0.47mを測る。柱間寸法は1.8m～2.05m。ピット1149を加えて総柱になる可能性もある。これまで検出された建物群の中で唯一南北方向に主軸をもつ建物である。柱穴掘り方より土師器、須恵器、瓦器などの細片が出土している。ピット1148では土師器羽釜鉢片と瓦器片、1149からは、内面底面に平行暗文を施す瓦器碗（168）、1139では瓦器小皿片、土師器細片、1131では瓦器小皿、碗口縁部、土師器羽釜鉢片、1132では内底面に平行暗文をとどめる瓦器碗底部片、赤褐色の土師器小皿（172）、1215では上師器、須恵器細片、1214では器高1cm程度の白色砂粒を多く含む赤褐色の土師器小皿、1212、1213（169）では瓦器の細片が出土した。碗（170）は内底面に整った斜格子暗文を施し、周囲に太いミガキをかけ、外面は指オサエのままにしているものと、内底面に平行暗文、外面の口縁部付近に粗いミガキをかけるものがある。皿（171）も同様に斜格子暗文で、高台付きの例品である。土師器小皿（172）は淡灰色軟質の器で、ヨコナデにより底部から口縁部の立ち上がりに段が生じている。



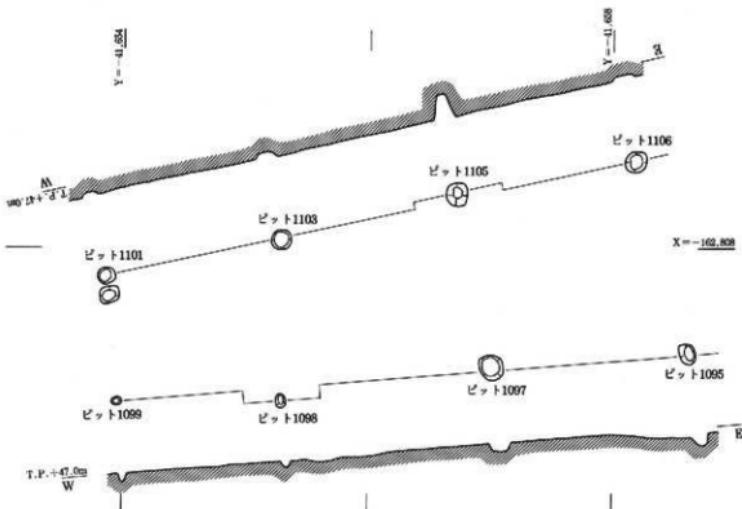
第50図 H区、建物109出土遺物



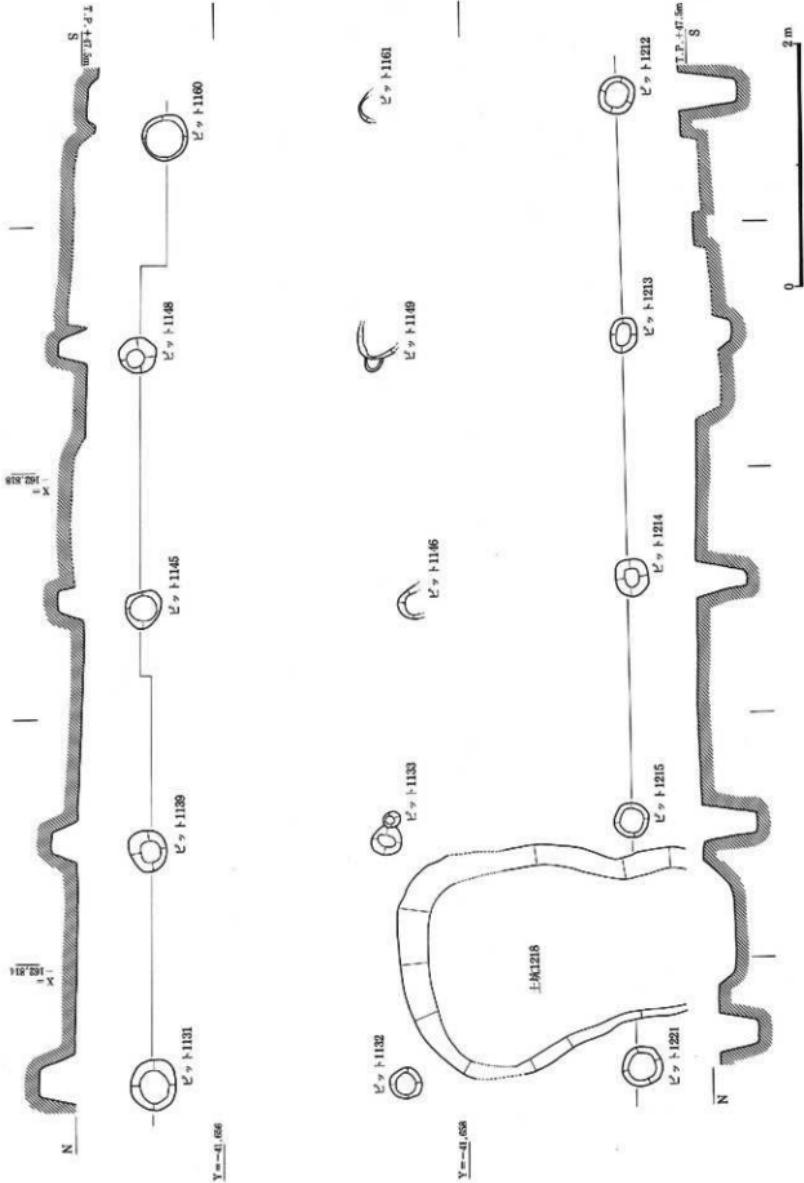
第51図 H区、建物107平面・断面図

その他、明確に建物を構成するピットとは捉えられなかったが、1140からは瓦器鉢（170）、瓦器小皿（171）、1151からは土師質の羽釜（173）が出土した。なお、1140については79頁に詳述。

**井戸721（第54～56図・図版19）** 建物106から南6mのところに掘り込まれている。溝722と重複し、掘り込み時期はそれに先行する。径2.40～2.65mの円形であり、深さは検出面から2.8mまで掘り下げている。検出面から0.8mまで掘り鉢状に掘り下げた後、さらに0.6mほど垂直に掘り、以下は胸張り状に掘り下げて平坦な底面としている。埋土は7層に分層できた。第1層上面で北宋錢元豐通寶（初鑄1078年、篆書体）1点が出土した（194）。第1、2層では内底面に平行暗文を施す瓦器鉢底部、小皿、底部から丸く短く立ち上がる口縁部の土師器小皿、外面タタキ目、内面を横方向のナデを施す須恵器甕、外面繩目タタキに斜め板ナデ、内面に細い布目痕のある平瓦が出土している。第3層では10～20cm大の石が投棄され、これに瓦器鉢片と、2層と同様の平瓦、陶器甕の破片が混在する。第4層では出土遺物は見られなかったが、それ以下では20cm×30cm大の石と瓦器鉢が出土した。第5層では瓦器鉢、小皿、茶釜形羽釜口縁部、「く」の字形に屈曲する土師質羽釜（190）などの破片が出土した。第5層から6層にかけて外面タタキ目調整の東播系須恵器甕（195）が横倒しの状態で出土した。また断面が層状の淡赤褐色～暗赤紫色を呈する発泡状に硬化した熔壁片も出土した。第7層では斜格子や平行暗文の瓦器鉢底部、須恵器鉢、外面横方向ナデ、内面細い布目痕をとどめる丸瓦片が出土した。なお、第5～7層では竹、木片などの植物遺体が混在していた。出土遺物は第4層を中心に出した瓦器鉢（174～180）、小皿（181～188）、瓦質羽釜（189）、須恵器甕（191）、鉢（192、193）、平瓦（196、197）、丸瓦（198）、

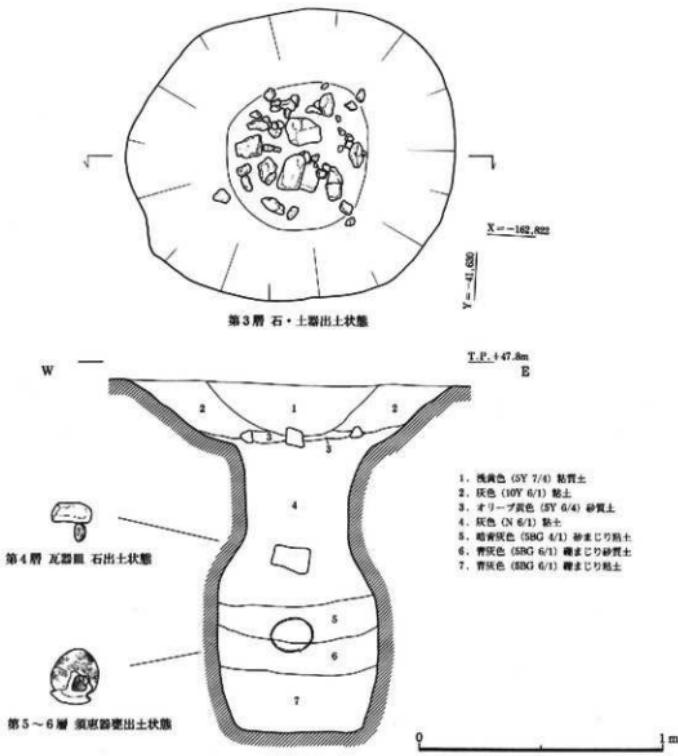


第52図 H区、建物108平面・断面図

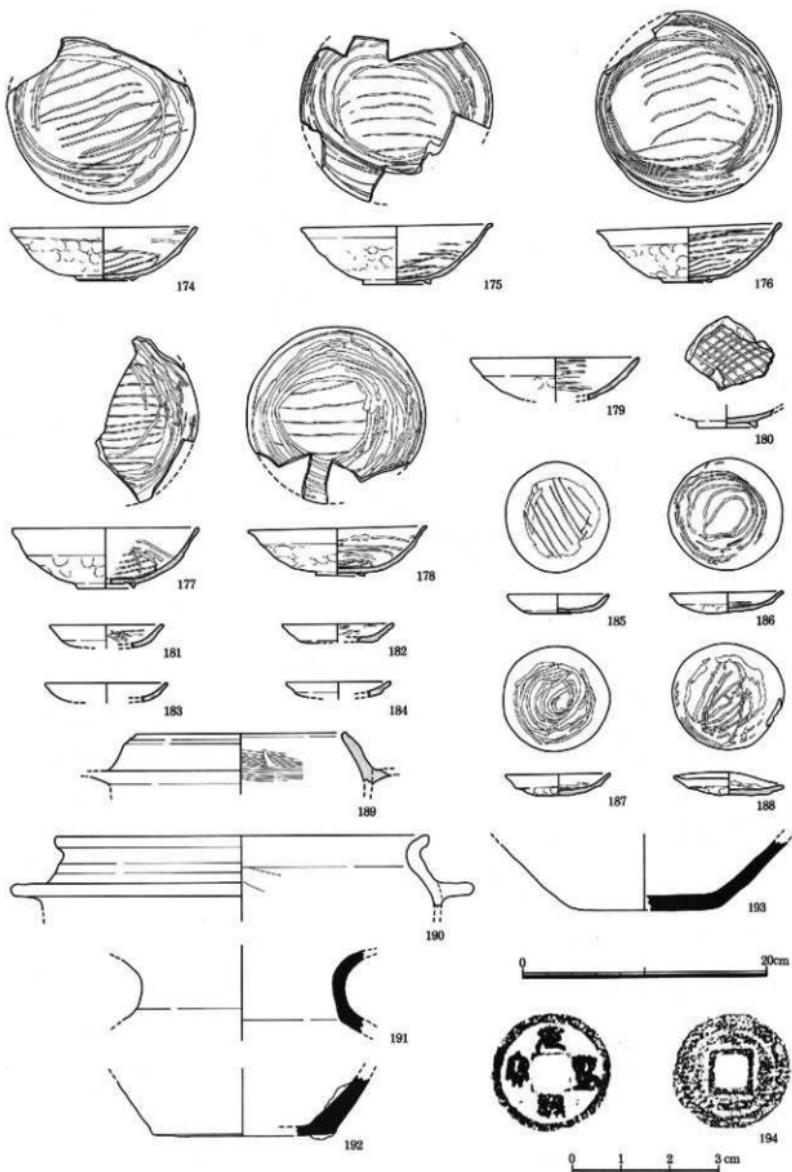


第53図 H区、建物109平面・断面図

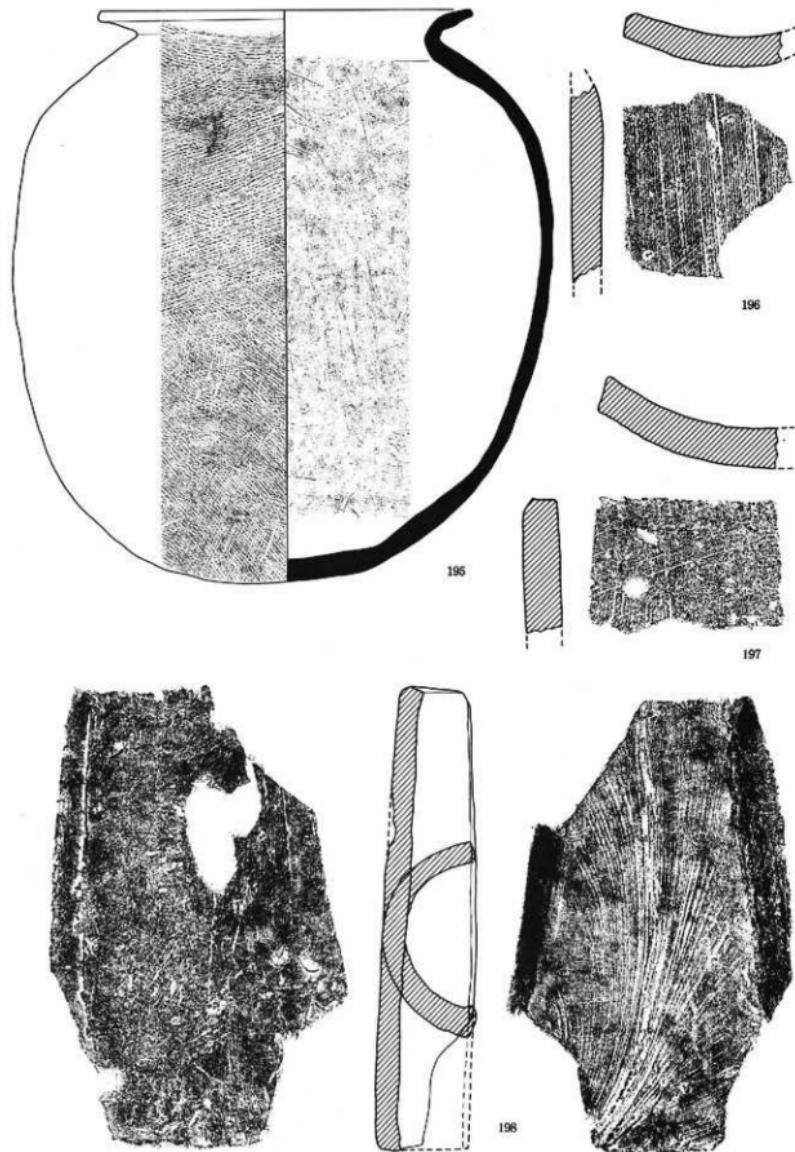
それに第1層出土の銭貨を図示した。瓦器碗は高台が低く、内底面に粗い平行暗文(174~178)、格子文(180)を施すものがあり、周囲に太いミガキを粗雑に施し、外面は指オサエのままである。法量的には口径15cm前後から16cm、器高4cm前後から5cmを測る。しかしいずれにせよこれらの器が共に第7層から出土しているので、実際の使用上に時間的な差はないようである。瓦器碗の編年ではIII-3期に相当すると考えられる。元豊通寶の法量は外径(縦)24.84mm、外径(横)24.98mm、内径(縦)20.98mm、内径(横)20.43mm、方孔の縦6.42~6.45mm、横6.24~6.45mm、厚さ1.29~1.37mm、重量3.4gを測る。



第54図 H区、井戸721遺物出土状況・断面図

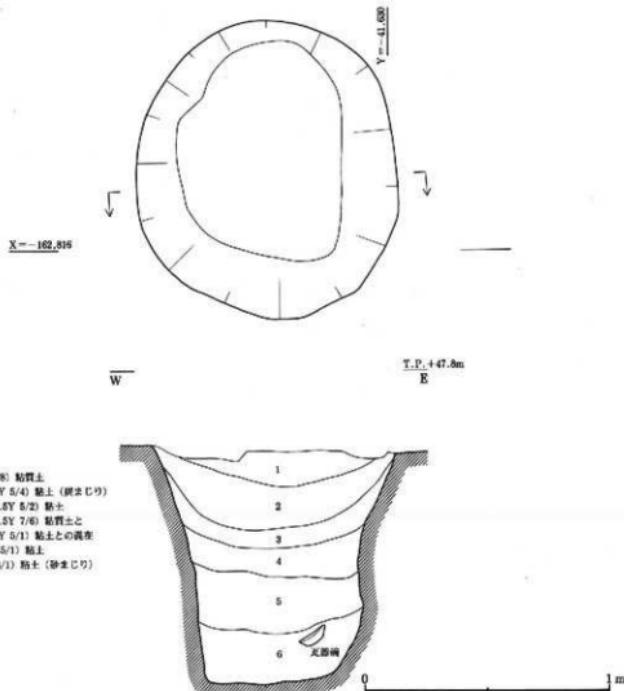


第55図 H区、井戸721出土遺物（1）

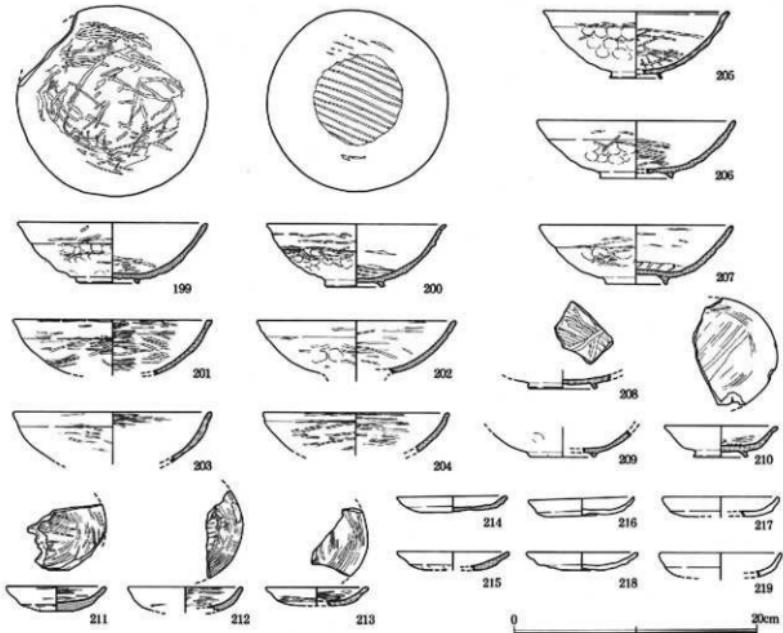


第56図 H区、井戸721出土遺物（2）

井戸805（第57・58・図版17） 井戸721と建物106の中間、やや東に位置する。溝833と重複し、それより以前に掘り込まれている。径1.06~1.23mの円形で、検出面より0.9mまで掘削されている。埋土は6層に分層され、各層に土器片の混入が認められ、4層では凸面に粗い板ナデ、凹面に細い布目をとどめる平瓦片が出土した。出土遺物のうち瓦器椀（199~209）、小型碗（210）、小皿（211~215）、土師器小皿（216~219）を図示する。瓦器椀は内底面に平行暗文を施し、周囲に密にミガキを重ねるもの（200、206）や、粗いミガキを施すもの（205、207）、さらに不整方向に短い暗文を施すもの（199）がある。いずれも外面は指オサエの後、上半部に粗いミガキを重ねている。口縁部の形態からみて大和型と思われるもの（199、207）もある。編年ではIII-2期に相当すると考えられる。小形椀（210）はしっかりとふんばる高台の付く形態で、内底面には繊細な平行暗文、周囲は数区に分けて密にミガキをかけている。体部外面は調整不明。土師器小皿は口径9cm前後、器高1.2~1.5cmの淡橙色（216、218）、淡白灰色（217、219）の器で、前者には赤色物質を多量に含んでいる。

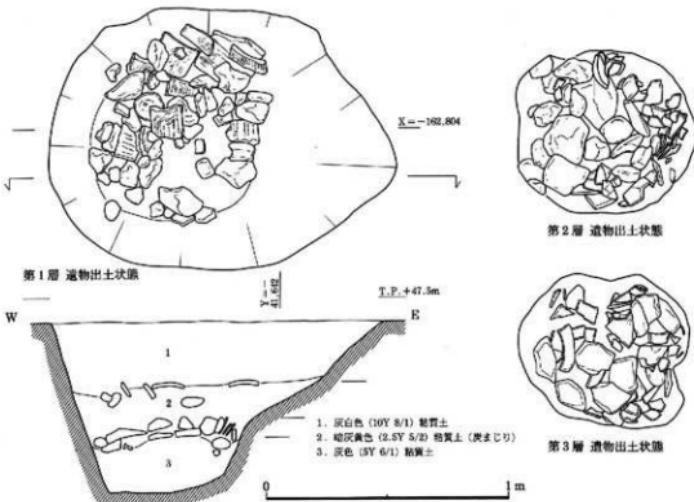


第57図 H区、井戸805平面・断面図



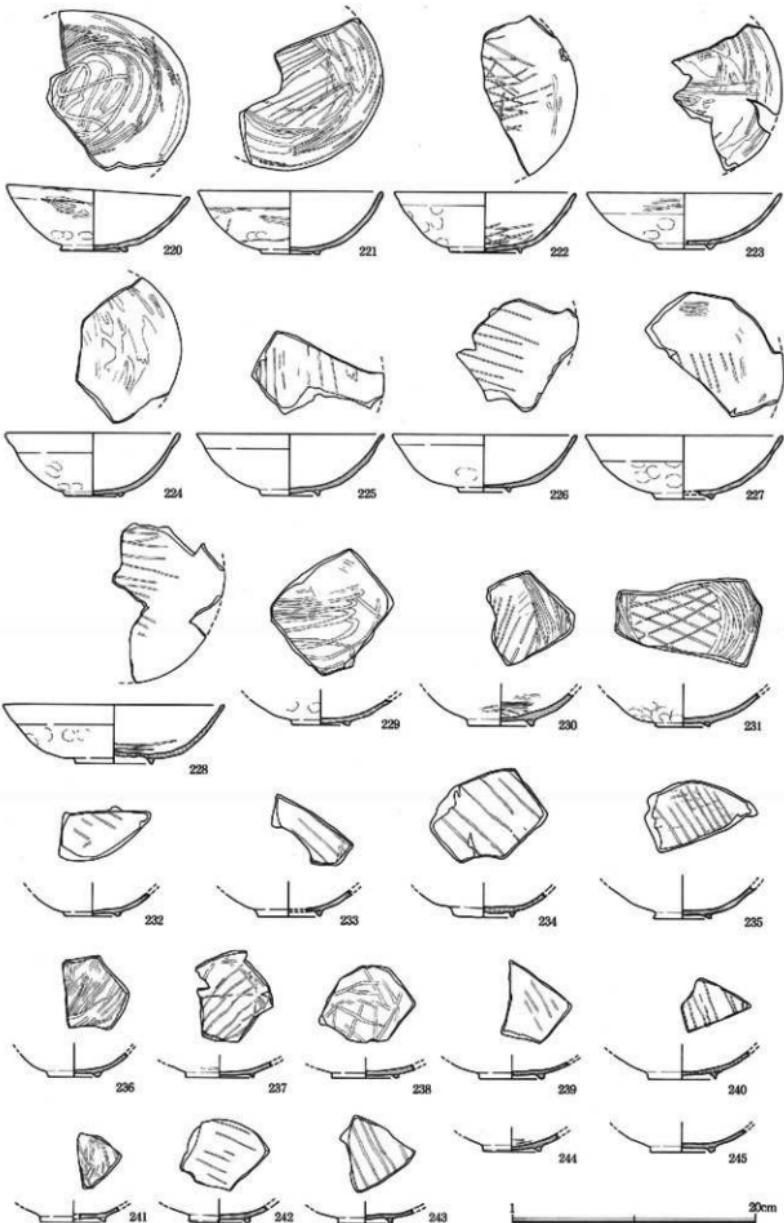
第58図 H区、井戸805出土遺物

井戸871（第59～67・図版18） 建物107の北西角に2.0m隔てて掘り込まれている。溝872と重複し、掘り込みはそれに先行する。径1.10～1.44mのはば円形で、検出面より-0.65mの砂礫層に掘り込まれている。炭灰の混入する第2層の暗褐色粘質土から瓦器、土師器、瓦等の破片が5～20cm大の疊とともに出土した。この層では検出面より0.5m下と0.8～0.9m付近でこれらの遺物の集中的な投棄状態を観察した。しかし上下の土器片には相互に接合できる例があるので、投棄はほぼ同時であろう。出土遺物としては瓦器碗（220～289）、瓦器小皿（290～295）、瓦質鉢（296、297）、土師器皿（299）、小皿（298）、鉢（300）、羽釜（301～318）、軒平瓦（319）、丸瓦（320）、平瓦（321～347）の破片等がある。瓦器碗では内底面に平行、斜格子の暗文、外面上半部ミガキ、土師器皿では赤褐色、淡橙色の中小皿、羽釜では内傾する口縁部が「く」の字形に屈曲する形態が特徴である。軒平瓦は内区の周縁を圓線で囲み珠文を配置する文様を呈し、平瓦は凸面板ナデ、網目タタキ、さらに網目タタキの後、板ナデを施すものがある。瓦器碗の大半は粗い平行暗文であるが、斜格子暗文のもの（222、231、238、282）もある。口径15～16cm、器高4.4～5.3cmを測るが、（296）は破片の復原では18.1cmを得る。瓦器鉢（298）は片口の器と思われる。内底面には斜格子暗文を施している。瓦器碗の編年ではⅢ—Ⅱ～Ⅳ期に相当すると思われる。

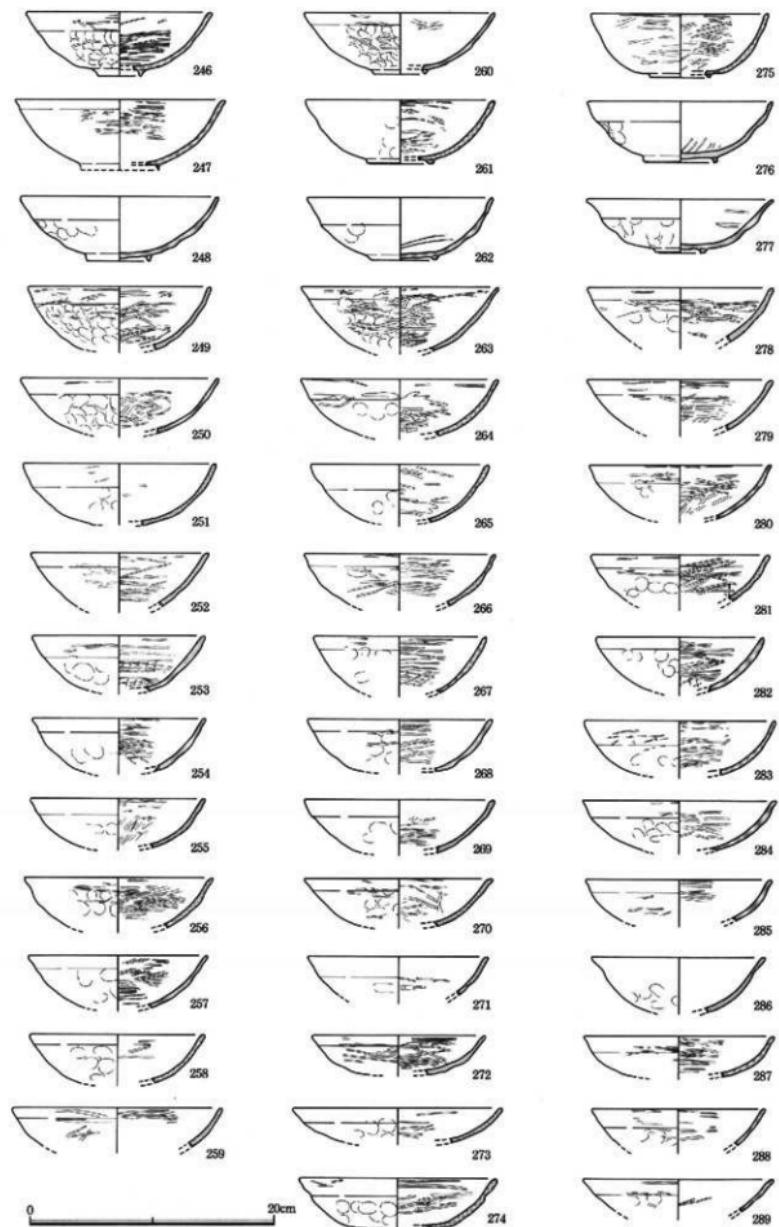


第59図 H区、井戸871遺物出土状況・断面図

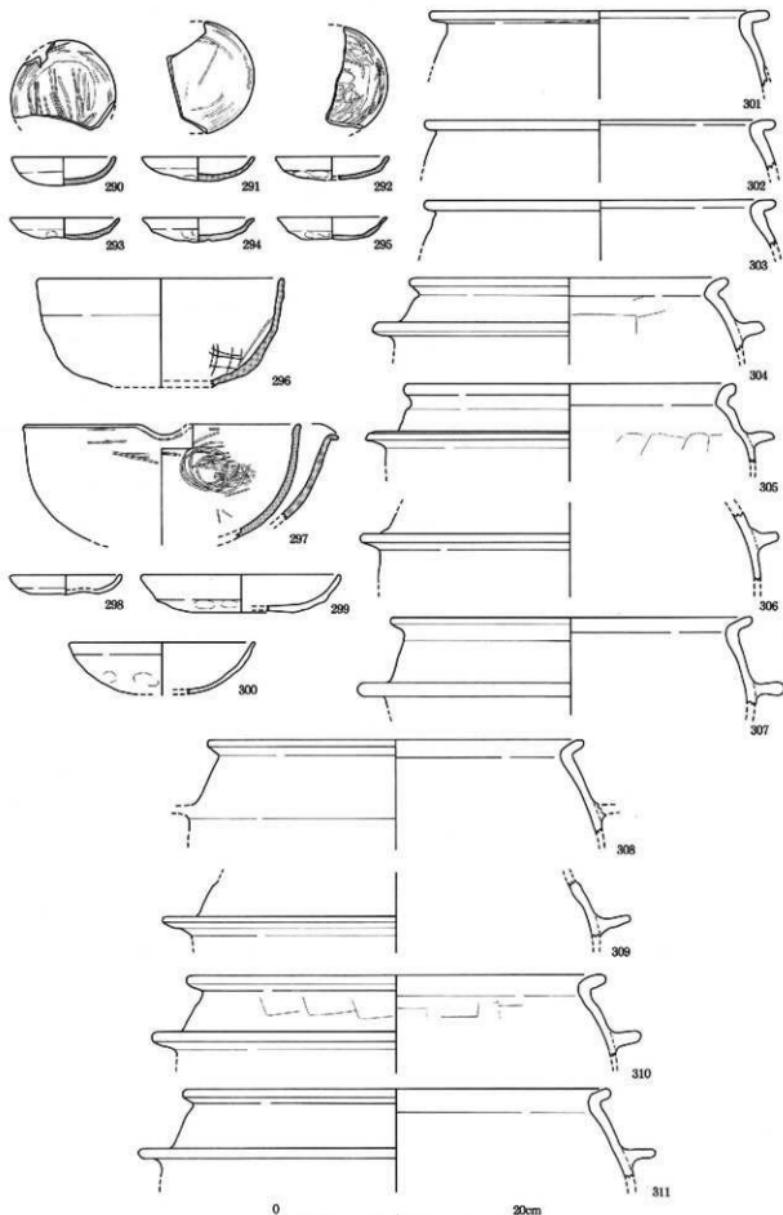
井戸1237（第68・69図） H調査区の河川跡右岸の肩に掘り込まれ、建物109の西約6mで検出された。径0.9mのはば円形掘り方で、検出面より深さ1.2mまで垂直に掘り下げ、深さ1.7mまでなだらかにやや南側に突出する胴張り状に広げた後、今度は徐々に坑径を減じつつ、径0.5mの平坦な底面に達している。地山は検出面より-0.65mまで粘質土であるが、以下は硬い疊層である。埋土は11層に分れる。第1～3層では黄色系の砂質土、粘質土、第5層以下は灰色系の粘性の強い粘土となり、6層以下ではこれに粗砂、第9層ではさらに5～10cm大の礫が混在する。枝、葉など植物遺体も混入している。第1～7層までは瓦器、土師器などの摩滅した細片が出土する程度であるが、第8層以下では瓦器椀、皿を主体とした比較的残りのよい大きい破片が各層で出土する。これらの瓦器椀には上下の層から出土した破片間で接合できる例があるので、埋土の堆積過程には時間の隔たりはないようである。第10～11層では曲げ物底板、側板の破片も出土している。出土遺物としては、第8～11層で出土した土器類のほとんどが瓦器椀（348～361）、次いで皿（362～366・368～372・374）であり、土師器羽釜そして平瓦、瓦質甕の破片が少量ある。瓦器椀の内底面の暗文は平行が圧倒的であり、斜格子は少ない。平行暗文は細線と太線がみられる。外面のミガキは上半部を中心とした太いミガキと、口縁部のみに数条のミガキをかけるものがある。口縁端部形態に大和型とみられるものがある。高台は三角形から台形、さらにそれが歪んだものまであり、一定していない。焼成は十分に炭素を吸着させた硬質なものばかりである。皿も椀の特徴に相応する破片がある。小椀（367）は歪みがあり、口径8.0cm、器高2.7cmに



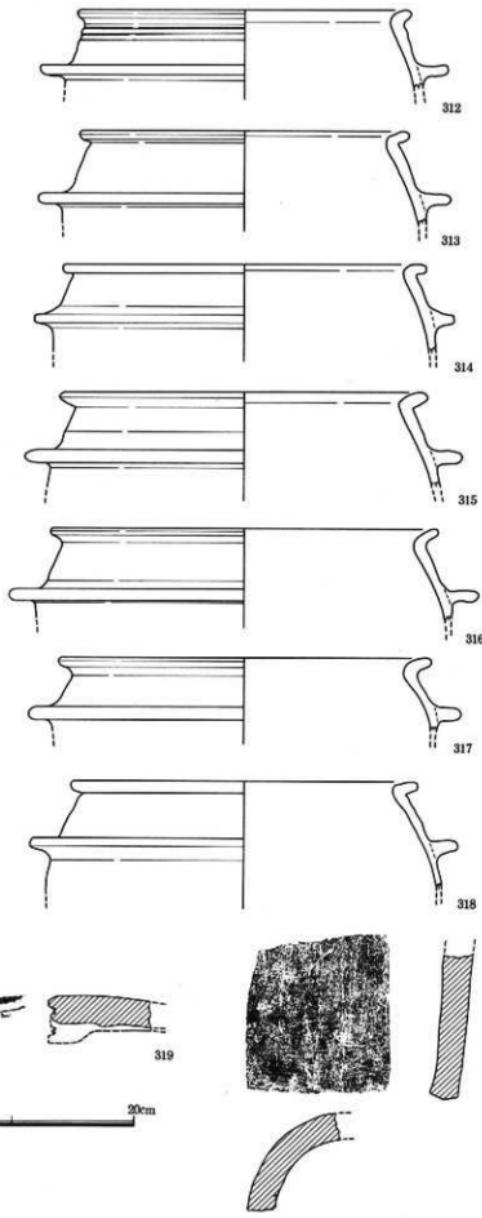
第60図 H区、井戸871出土遺物（1）



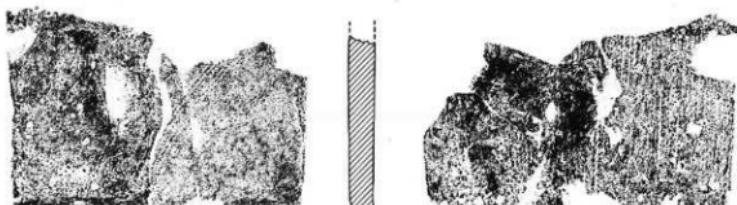
第61図 H区、井戸871出土遺物（2）



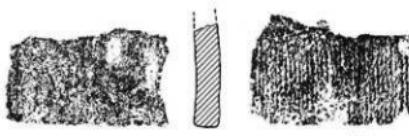
第62図 H区、井戸871出土遺物 (3)



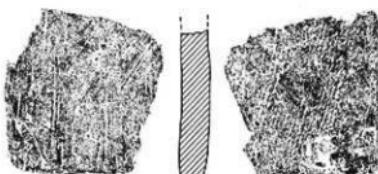
第63図 H区、井戸871出土遺物(4)



322



323



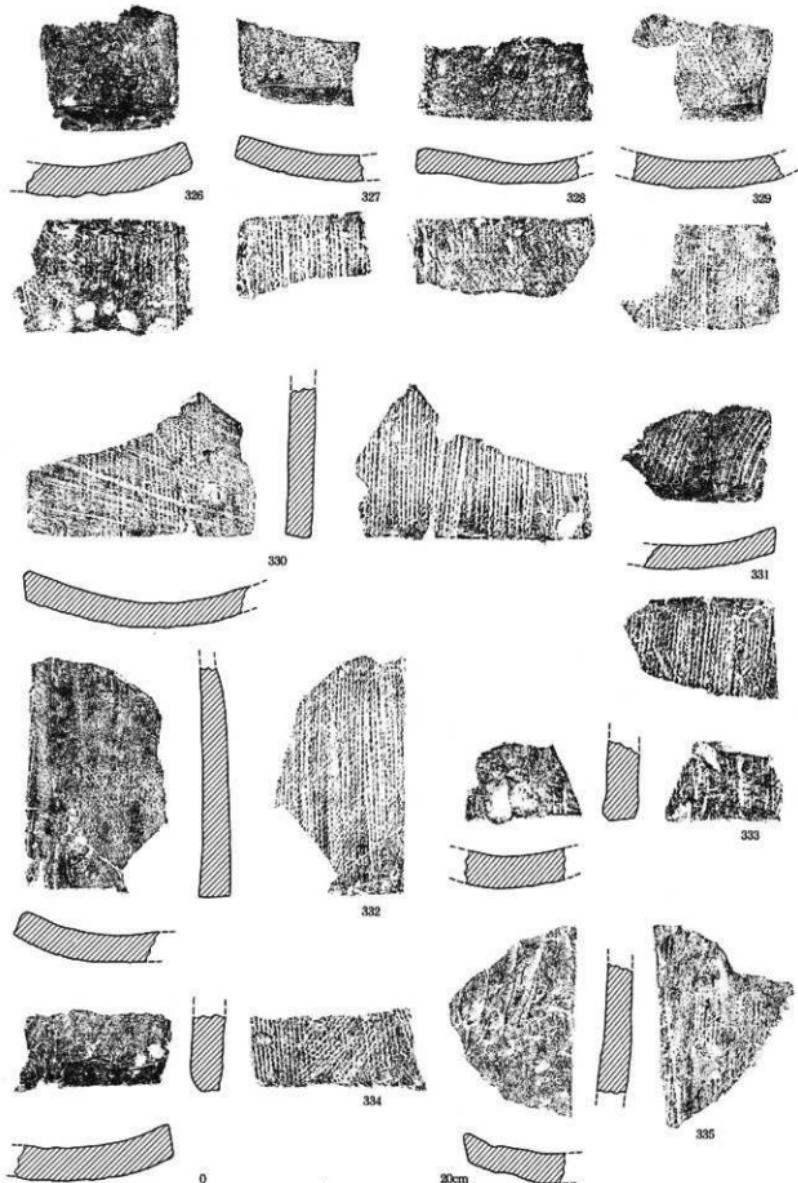
324



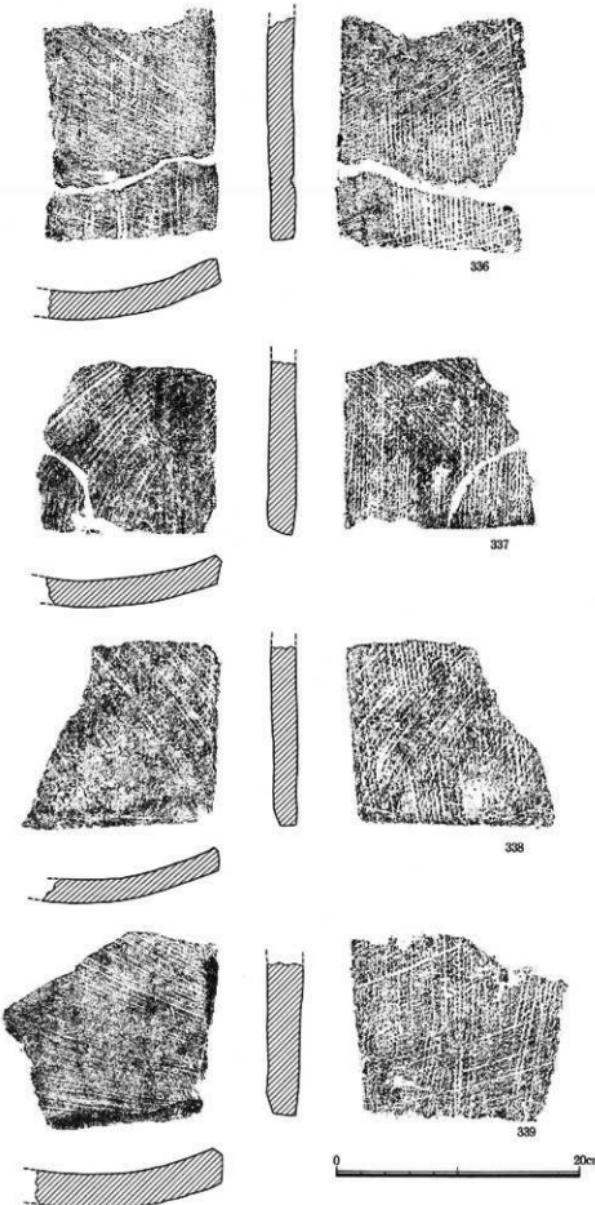
325



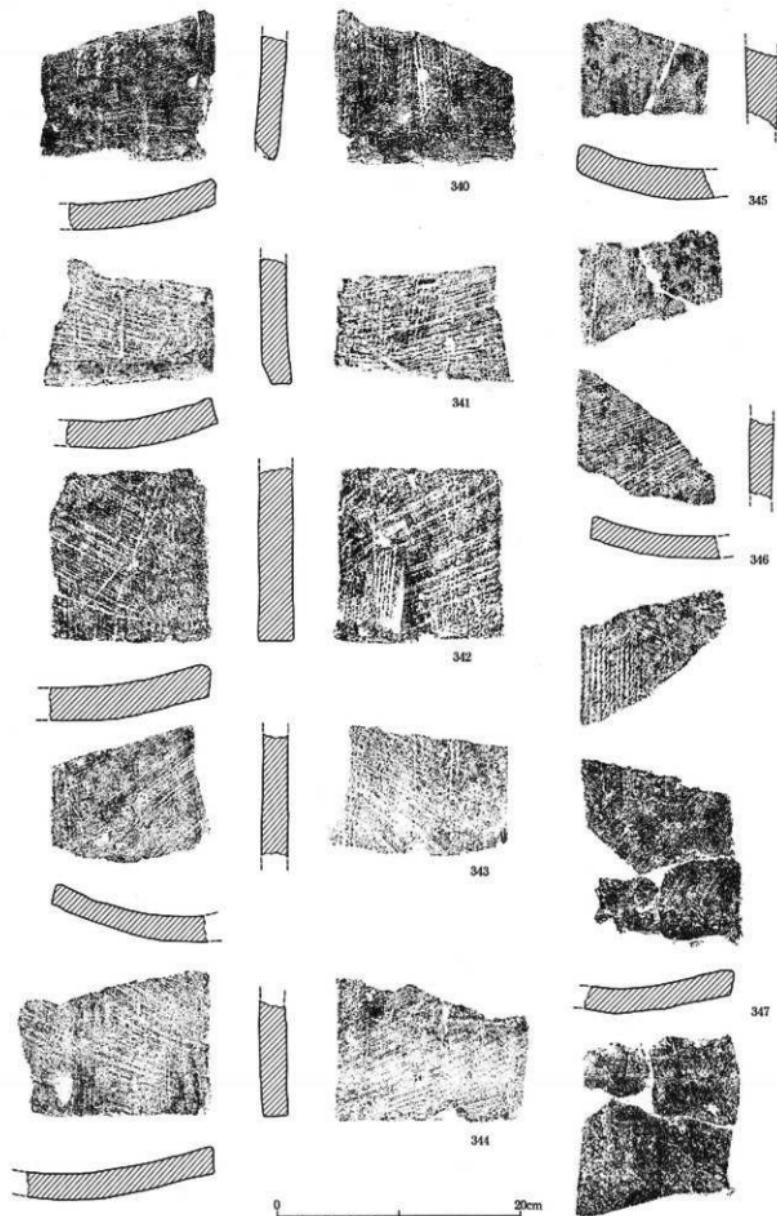
第64図 H区、井戸871出土遺物 (5)



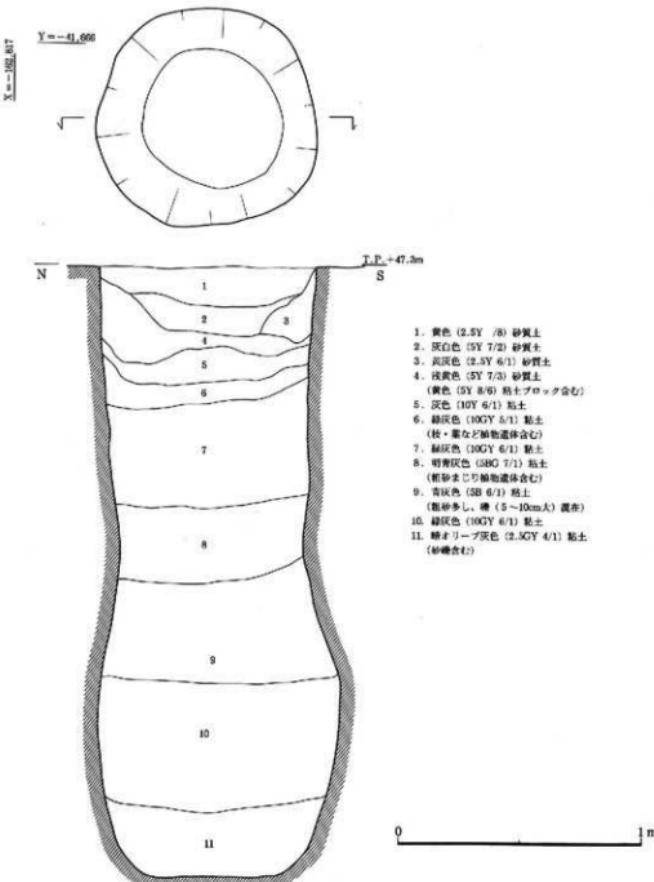
第65図 H区、井戸871出土遺物（6）



第66図 H区、井戸871出土遺物（7）



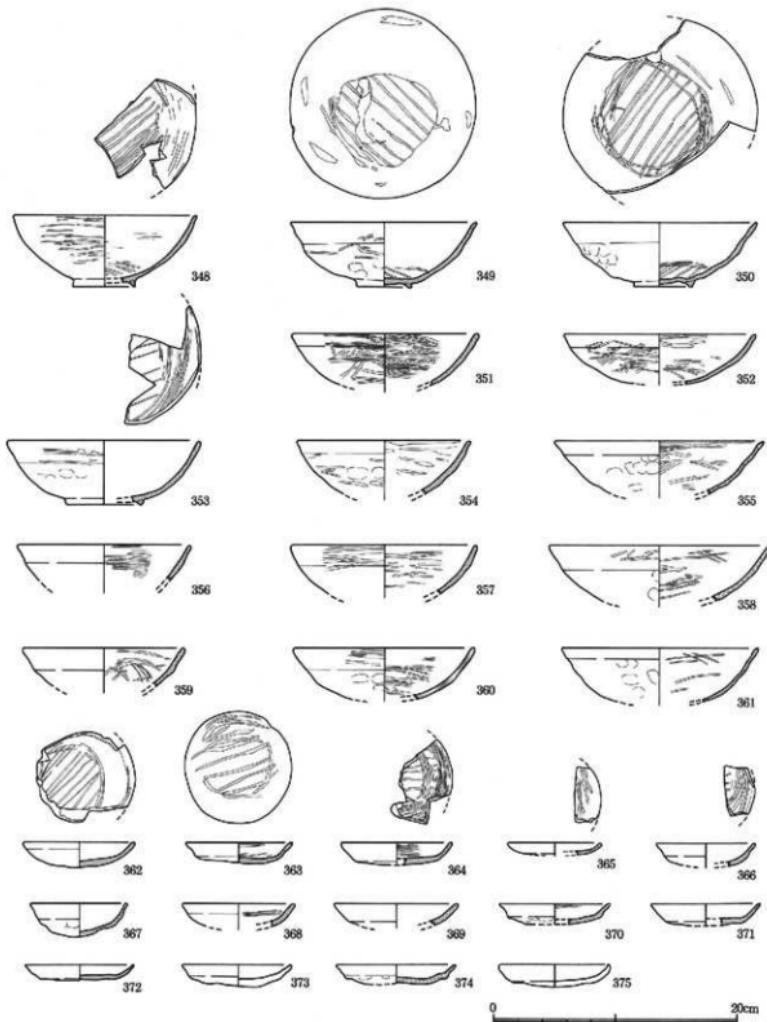
第67図 H区、井戸871出土遺物 (8)



第68図 H区、井戸1237平面・断面図

復原した。内底面には粗い暗文、外面は指オサエのままでミガキはみられない。瓦質甕は外面に細かなタタキ目調整のある破片が第11層で1点出土している。第9層出土の土師器羽釜は口縁部が「く」の字形に外反する形態である。土師器皿の破片は第8、10層で数点出土している。前者は口縁部が底部からなだらかに移行する淡灰色の器(375)で、後者は強い横ナデで底部と口縁部に明瞭な境をもつ淡橙色の器(373)である。ここでは瓦器椀、皿、土師器皿について図示した。椀の編年ではIII-2~3期とみられるが、既にIV期に入る椀(367)のような例もある。

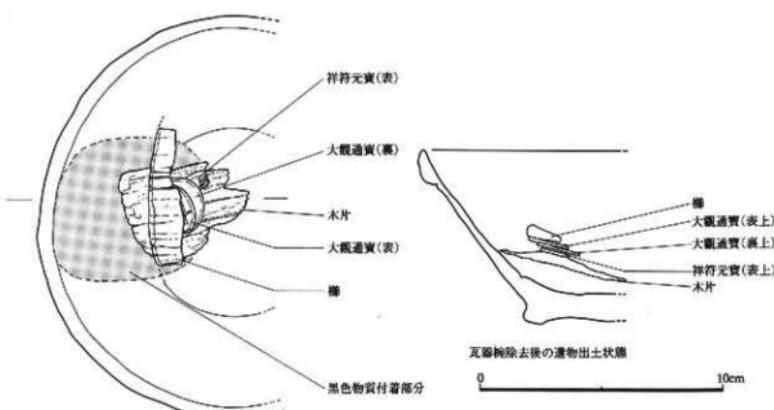
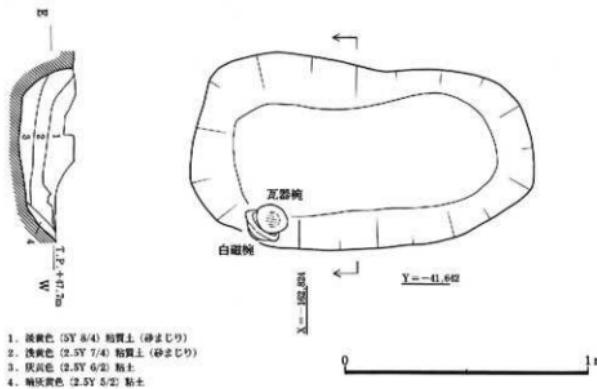
土坑墓687(第70・71図・図版20) 調査区南半の建物106から南約8m離れたところに掘り込ま



第69図 H区、井戸1237出土遺物

れた土坑墓である。溝689に西半が断ち切られている。規模は短軸0.8m、長軸1.4mの楕円形。埋土は3層に分層できる。土坑の北西肩から底面にかけて瓦器椀1個体、白磁碗1個体を前者を上にして重なって出土した。白磁碗の中には櫛、その下に北宋錢3枚が納められていた。錢貨は

紐を方孔に通して結んでいたようだ、祥符元寶と大觀通寶の1枚に紐の痕跡が認められた。出土遺物としては、瓦器椀(377、378)、白磁碗(376)、平瓦片(379)、櫛(380)、錢貨等がある。瓦器椀(378)は内底面に粗い平行暗文、内面周囲に粗いミガキをかける器で、口径15.7cm、器高4.6cmを測る。瓦器椀編年ではIII-3期に相当すると考えられる。白磁碗(377)はやや厚味の



第70図 H区、土壤墓687平面・断面図

ある器体に乳白色の釉薬を施している。口縁部外面ではこの釉薬の溜まりが垂下し、体部下半は素地のままとなっている。高台盤付けは磨いて、成形時の粗い素地を消している。このような特徴から13世紀第2四半期の器と考えられる。錢貨は腐蝕が進んで残りが悪いが、祥符元寶1点、大觀通寶2点と識別できた。櫛は現存長5.7cm、幅0.8~1.5cmを残し、かろうじて29本の櫛歯の付け根部分が残る状態である。以上のはかに小さい木片が櫛や錢貨とともにあったが、用途は不明である。錢貨を載せてあった薄板の可能性も考えられる。

#### 溝群（第72~76図・図版21・22）

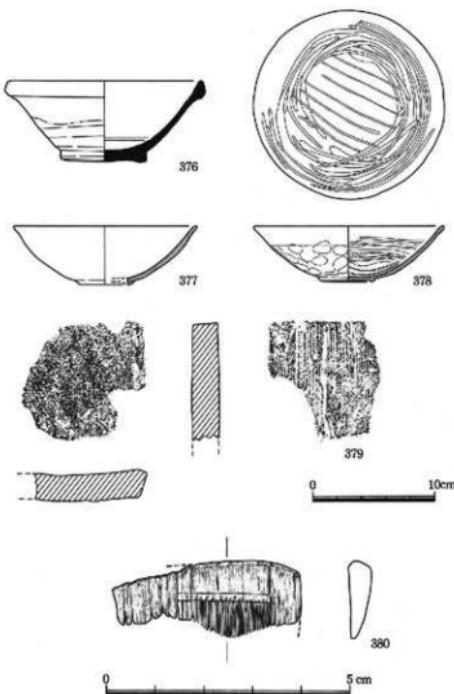
本調査区で検出されたこの時期の溝には、地割りに沿う溝と旧河川の流跡など自然地形に規制された溝がある。前者は調査区全体に多く認められ、その軸方向は座標軸にはば合致し、後者は北半部に限られ、自然地形を巧みに利用している。いずれにしてもこれらの溝の大半が耕作に伴うものと考えられる。

#### 地割りに即した溝群

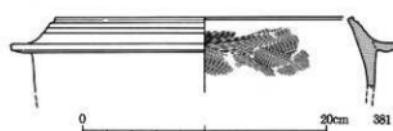
##### 南北方向溝群

溝600（第72図） 調査区最北西端で東肩の一部が検出された溝である。深さ0.9~0.1m、埋土は浅黄色（2.5Y7/3）粘土である。埋土中より口縁部外面に段をもつ瓦器羽釜口縁部～鰐部片（381）が出土している。

溝602 調査区北西端で検出した。幅0.28~0.47m、深さ0.06~0.08mを測り、埋土は浅黄色（2.5Y7/3）粘土である。軸はやや東に触れ、N-3°-WEを測る。南半部にみられる整然とした地割りに沿う溝とは若干趣が



第71図 H区、土壤墓687出土遺物



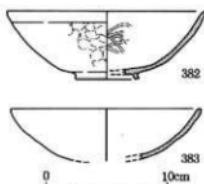
第72図 H区、溝600出土遺物

異なる。河川蛇行部に影響されたこの附近の自然地形によるためであろうか。

溝664・685・862・863・864

溝669・671・672・675・683・689・872

この2列に平行する南北溝群はF区の溝360・361、G区の溝530・531に連続すると考えられる。数カ所で重複関係を確認でき、おしなべて東西方向の溝を切って掘り込まれている。すなわち、本調査区の南から溝670、691、715、897などを、南半部中央では土坑墓687そして井戸871を切っている。方向はN-2°~3°-E。両溝の間隔は0.8~1.0m、深さは0.03~0.10mを測る。埋土は南半の664・669・671・672ではにぶい黄色(2.5Y6/4)粘土、北半の682~685・689・872では灰色(5Y6/1)粘土を観察した。溝897からは瓦器碗(382、383)が出土した。他の出土遺物としては溝669より瓦器碗底部、675より土師器羽釜鉢部、872より瓦器碗、土師器片、685より土師器片が出土しているが、いずれも摩滅した破片である。



第73図 H区、  
溝897出土遺物

南北の地割り中軸線に沿って連続し、間隔を一定に保っている点で他の溝との違いが明らかであり、里道の側溝と考えることもできよう。またこの溝の連続線上に、たとえばH区の建物105や上記の土坑墓682や井戸871など直接生活に関わる遺構が存在するので、この遺構の出現した頃には建物のいくつか、あるいはすべてが既に廃絶し、耕作地となっていた可能性がある。

溝738・740・761 調査区南半部東側に南北に連続する溝である。

前記の東側溝とは約18m隔たっている。幅0.11~0.27m、部分的に幅0.55mを測るところもある(溝761)。深さ0.03~0.14mを測り、埋土は738・740でオリーブ黄色(5Y6/4)粘質土、その北に続く761では灰色(5Y6/1)粘質土となる。方向はN-5°-W。出土遺物には溝761の瓦器碗、土師器片がある。

溝739・743・752・753・766・768・770・787・791

上記の溝の東側に接してやや東に触れる溝である。幅0.11~0.33m、深さ0.02~0.05mを測るが、検出面からは極めて浅く、ために幅も北にいたっては底面を残してほとんど断ち消える状態である。方向はN-5°-W。埋土は前記の溝のそれと同じである。

溝1224・1234(図版22) 幅0.1~0.7m、南端では河岸の傾斜面と下位の溝1225との関係で1.55mと広がる。深さ0.05~0.3mを測る南北方向の溝で、北側が浅く、南側に深くなる。埋土は灰黄褐色粘質土で鉄分の沈着が認められる。溝1224・1226を切っている。

溝1228・1229 溝1224、1225、1234の西側に2.5m隔てて平行する南北方向の細溝で、埋土は灰白色(7.5Y7/1)粘質土である。北端は溝1230に断ち切られている。

#### 東西方向溝群

溝608・621 調査区北西端で検出された幅0.31~0.89m、深さ0.03~0.07m、埋土灰白色(5Y7/1)粘土とする溝である。方向はN-80°~87°-E。溝624の埋没後に掘り込まれている。

621より摩滅した瓦器片が出土した。

溝615・616 調査区北部で検出された東西溝の残りである。615では0.6~0.9m、616では0.3~0.7mの溝幅があり、深さは0.03~0.09m、埋土は鉄分の沈着する暗灰黄色（2.5Y6/3）粘質土である。

溝691 調査区南端で検出された幅0.14~0.36m、深さ0.02~0.04mを測る溝である。上記の里道の側溝と考えられる溝（664, 672）に断ち切られている。方向はN-90°-E。埋土は灰白色（7.5Y7/1）粘質土である。

溝715・771・1192（第74図） 調査区の南半は中央で検出された幅0.36~0.93m、深さ0.03~0.08mを測る溝である。方向はN-83°~85°-E。埋土は灰色（5Y6/1）粘質土である。やはり西で上記里道と見られる側溝に、東側では溝771に断ち切られている。この溝を境にしてその北側に建物群や井戸などの生活域を示す遺構が集中する。1192から瓦器小皿（384）が出土した。内定面に平行暗文を施す。



第74図 H区、溝1192出土遺物

溝722・747・803 建物106の南で検出された溝群である。溝722は幅0.22~0.46m、深さ0.04~0.15m、方向はN-90°-E、溝747は幅0.11~0.15m、深さ0.02m、溝803は幅0.85~1.02m、深さ0.02~0.05mを測る。溝722は井戸721の北辺を断ち切っている。埋土は灰色（5Y6/1）粘質土である。上記の溝とは異なり、地形の起伏に左右された部分的な流跡の可能性もある。

溝1052・1054 調査区北半中央で検出された0.3~0.4m、深さ0.15mの溝である。方向はN-88°-E。埋土は灰オリーブ色（7.5Y6/2）粘質土で、土質から見て他の地割りに沿う溝より新しい時期のものと考えられる。1054より土師器、瓦器の細片が出土している。近代井戸1053に断ち切られている。

溝1230 幅0.3~0.5m、深さ0.05~0.10mの東西溝である。埋土は東側水路近くでは灰色粘質土、西側の旧河川近くでは鉄分の沈着が目立つ灰色（5Y6/1）粘質土、西側では鉄分の沈着する灰黄色（2.5Y6/2）砂質土である。

#### 地割り以前の自然地形に左右された溝群

溝612 調査区北部で検出された幅0.56m、深さ0.10~0.18mの溝で、2層に分層された。出土遺物はないが、土質土色からみて中世と考えられる。

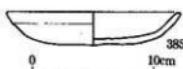
溝623・624・626・914・915・979・1013（図版22） 旧河川の流跡が調査区北部で東に振れ始める部分の左岸に接続する溝である。方向はN-12°~18°-W。東西の連結溝によって三本の溝が一定間隔（3.0~3.5m）をとって、平行して北西方向へ延びている。ただし北側では溝626との間隔は1.1mと狭くなっている。河川流跡がここで東北に向きを変えるので、北西部の水の確保を目的としたかも知れない。溝の幅は溝624・979が幅広で0.94~2.11m、深さ0.16~0.32m、溝

915は狭く幅0.75~0.89m、深さ0.11~0.17mを測る。しかし埋土の底面には粗砂の堆積が認められる点では3本の溝全てに共通している。重複関係としては不定形で方向もまちまちな620、625、913など自然地形に左右された溝、土坑群の埋没後の掘り込みで、東西溝621に断ち切られている。出土遺物としては623で磨滅した瓦器細片があるのみである。

溝918 溝915の東に掘り込まれた幅0.28~0.44m、深さ0.06~0.11mの溝である。方向はやはり

溝914にほぼ沿う形をとるが、埋土中に粗砂の堆積は認められない。

しかしそ他の埋土は同様である。方向はN-25°-W。上記の一連の溝に関係する可能性がある。



第75図 H区、  
溝1085出土遺物

溝1085（第75図・図版21） 調査区中央で河川の流跡の蛇行部に流し込む形で掘り込まれた溝である。溝1087の埋没後に掘り込まれ、流し込み部分は古代の溝1087にみられるほど河岸に深く切り込んでいない。

したがって河川の埋没が相当進んで窪地状となっていた段階に流れ込んでいたと考えられる。軸方向はN-60°-Wに振る。出土遺物には瓦器碗底部片、土師器小皿片、断面層状をなす硬化した熔壁片がある。土師器の皿（385）が出土した。

溝1122・1216・1225・1226（図版22） 調査区中央西半部で、北東から南西へ連なる溝である。H2調査区ではN-30°-E、H3調査区ではN-20°-Eの傾きをとる。ピット1117、落ち込み1113、1142、溝1224、1230に断ち切られている。1122、1216では0.45~0.60m、深さ0.15~0.20mを測り、埋土は黄褐色（2.5Y5/3）粘質土である。出土遺物は1122で内底面に粗い平行暗文を施す瓦器碗底部片が出土している。

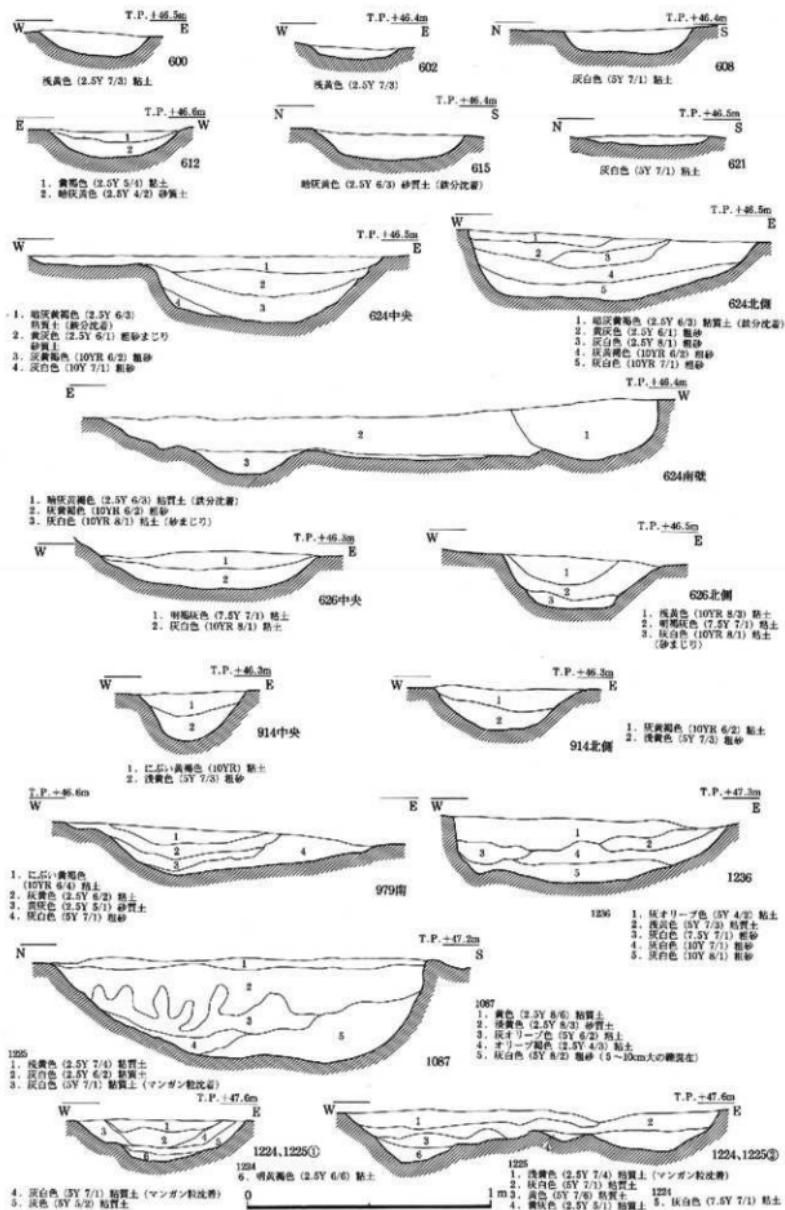
土坑・落ち込み（第77~85図・図版19・23・24） 人為的に掘り込まれた土坑、自然地形の凹凸の結果生じたと思われる落ち込みなど、一定の形をとるものや不定形なものが検出されている。しかし必ずしも遺物が出土していないので、時期の判断が難しいが、土色や上質の点で中世と考えられるものも含め、ここに挙げておきたい

土坑601 調査区北西端、溝600の東隣で検出された1.3m×0.6m、深さ0.13mの土坑で、2層の埋土が観察される。

土坑617 調査区北部で検出され、溝616の埋没後の溜まり状の土坑で、1.2m×0.8m、深さ0.16m、埋土は3層観察される。

土坑618 土坑617の東隣で検出され、連結溝624の西肩を切っている。1.5m×0.9m、深さ0.31m。埋土は黄色と灰色の粘（質）土がブロック状に混在するもので、一時に埋め戻された感がある。

土坑619 土坑617、618の北側で検出された1.4m×0.8m、深さ0.33mの北東~南西方向の土坑で、3層に分けられ、すべてレンズ状の堆積を示す。溝620を切っている。土師器小皿、羽釜底部、須恵器甕体部の破片が出土している。

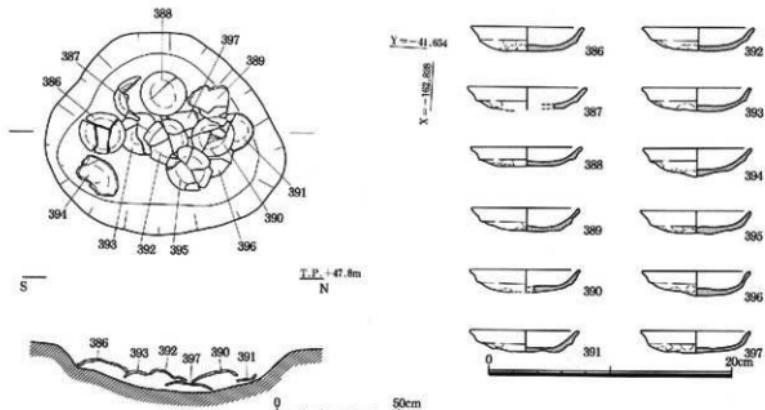


第76図 H区、横断面図

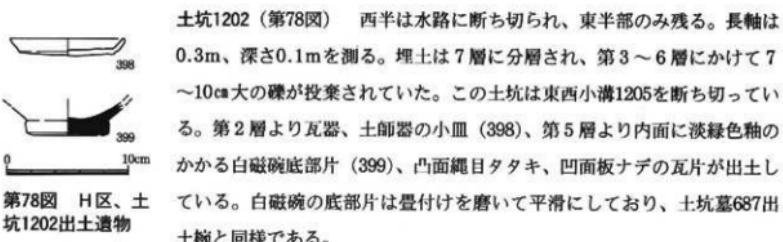
**土坑913** 調査区北部の連結溝624の東肩で検出された $2.9m \times 1.05m$ 、深さ0.2mの土坑である。埋土の下層となる粗砂は連結溝の底面にみられる状況と似ているので、そこから溢水の溜まりであったかも知れない。

**土坑980** 連結溝797の西肩に接して検出された $0.2m \times 1.3m$ 、深さ0.09mの溜まり状の土坑で、2層の粘質土の堆積が観察される。

**土坑1181** (第77図・図版19) 調査区南部の建物109の南7.5mのところに掘り込まれた径0.41~0.50m、深さ0.1mの浅い円形土坑である。埋土は浅黄色(2.5Y7/4)粘質土で、瓦器小皿12点(386~397)が納められていた。皿を身と蓋にした1組(390、391)を除き、他はすべて底部を上にして土坑底面を覆う形で検出された。これらの瓦器小皿は口径8.9~9.8cm、器高1.5~2.0cmが多く、底部の突出によって2.5cmになるものもある。いずれも口縁部のヨコナデにより底部と口縁部の間に屈曲がみられる。灰黒色の軟質の器で、砂粒を多く含む。内面は荒れて調整不明。



第77図 H区、土坑1181遺物出土状況・断面図、出土遺物



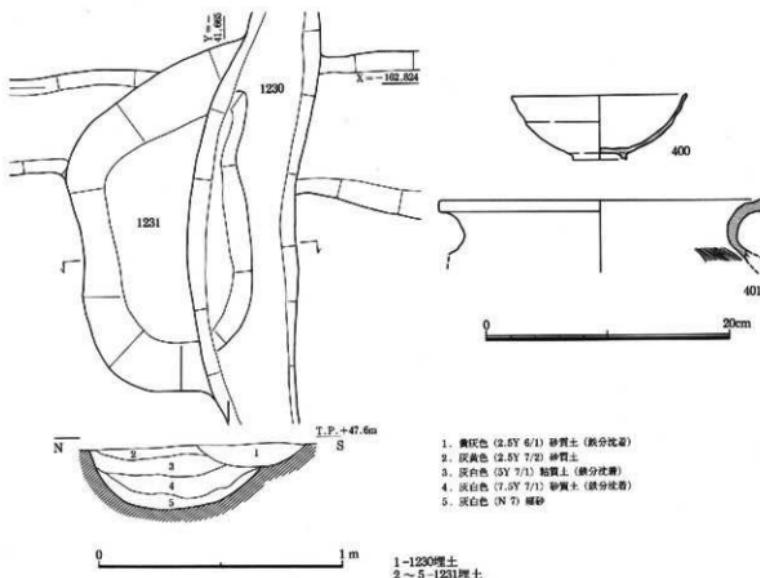
**土坑1218** 調査区南部の建物109北西隅で検出された東西方向の土坑で、西側は水路に断ち切ら

れている。幅は1.67m、深さ0.16mを測り、5層の埋土を観察される。建物の北西の4柱穴に囲まれた範囲におさまる位置関係からみて、建物に関連する可能性もある。平行暗文のある瓦器碗底部、土師器の破片が出土した。

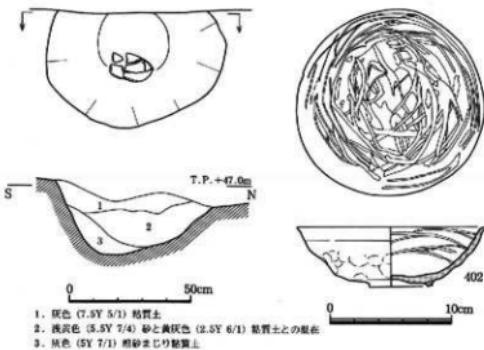
**土坑1231（第79図）** この調査区の南端の河岸近くに掘り込まれた土坑である。溝1224の埋没後に掘り込まれ、また溝1230により南半を断ち切られている。長軸1.4m、検出面での短軸の残存長は0.4m、底面では0.4mを確認した。埋土は4層観察され、第2～3層より摩滅の激しい瓦器碗（400）、内傾する口縁端部が「く」の字形に屈曲する土師器羽釜、瓦質甕口縁部（401）が出土した。

**土坑1244（第80図）** 建物108の西北3mの河岸斜面に掘り込まれた径0.74m、深さ0.28mの円形小土坑である。埋土は3層に分層される。2～3層にかけて東から西に流れ込んだ状態で瓦器碗1個体（402）が出土した。口径15.5cm、器高4.8cmの瓦器碗は内底面に無秩序で粗くて太い暗文を施し、周縁をやはり粗くミガキ調整し、外面にミガキはみられない。瓦器碗編年ではIII-3期に近いと考えられる。

その他の土坑群631～636・644～659 河川蛇行部北側左岸の溝629と641との間の狭長な場の緩傾斜面の黄色粘土面に掘り込まれた土坑群である。地となる黄色粘土が砂礫の混じりのない、きわ



第79図 H区、土坑1231平面・断面図、出土遺物



第80図 H区、土坑1244平面・断面図、出土遺物

として中世と考えている。

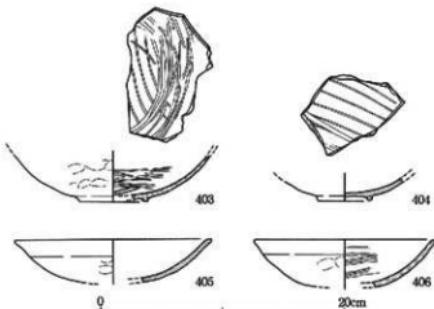
落ち込み978（図版24） 調査区北部で検出された東西方向の落ち込みである。幅4.8m、深さ0.25mの溜まり状となる。2層に分けた埋土はいずれも粘土ブロックが混在する。西端では後述する落ち込み1005と連なる。

落ち込み1005 落ち込み978の北側に、それとほぼ平行する形で検出された溝状の落ち込みである。場所により底面の高低差が大きい。もっとも深いところでは0.4m程度であり、5層の埋土を観察した。摩滅した瓦器碗、須恵器の破片が出土した。

落ち込み1017 東西3.8m、南北0.6~1.0m。南側が急激に深く0.3mを測る。堆積土は砂であり、出土遺物はない。

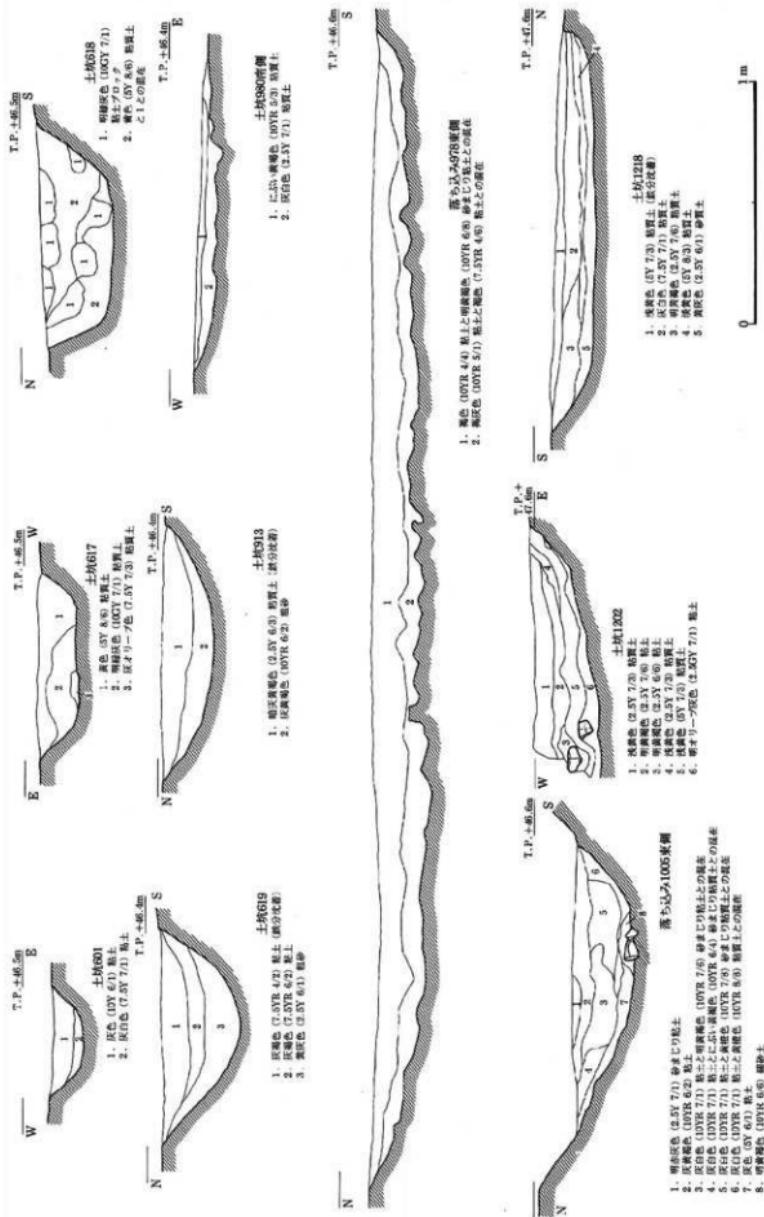
落ち込み1113（第81図） 南北1.8~2.0m、東西は5.7m以上を測る。深さは東側（0.06m）から西側（0.24m）に深くなるが、西側では一段落ち込む。埋土は鉄分の沈着した明黄褐色（2.5Y6/6）粘質土で、出土遺物には、内底面に平行暗文を施す瓦器碗（403、404）、粗いミガキを施す瓦器碗口縁部片（405、406）、土師器片等がある。

めで精良な土質であるところを殊更選んでいるように思われる。径は0.50~1.00m、深さは0.2~0.5mで、埋土は灰色粘土と黄灰色粘土が混在し、上面に鉄分が沈着するという点は共通する。出土遺物はないが、周辺の不整形土坑630、643、また溝状の溜まり647では摩滅した瓦器、土師器の細片が出土している。時期は断定できないが、状況判断



第81図 H区、落ち込み1113出土遺物

落ち込み1191（第83~85図・図版23・24） 建物108の検出された河岸の緩傾斜面の段差部分を落ち

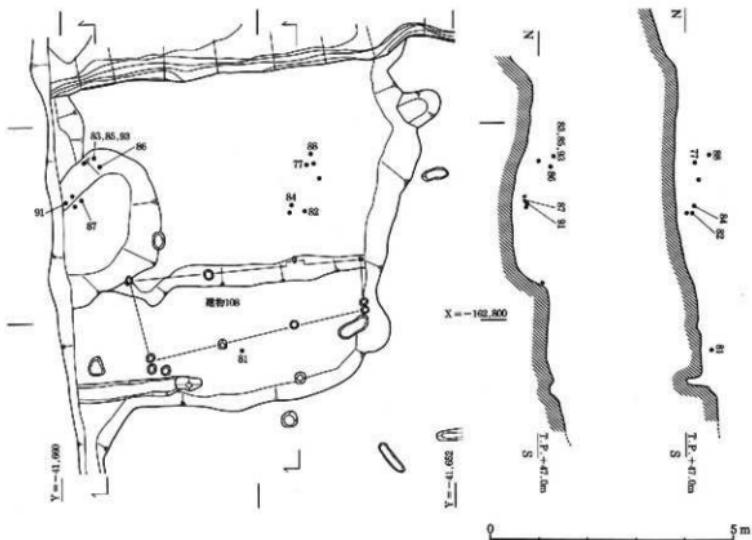


第82図 H区、土坑断面図

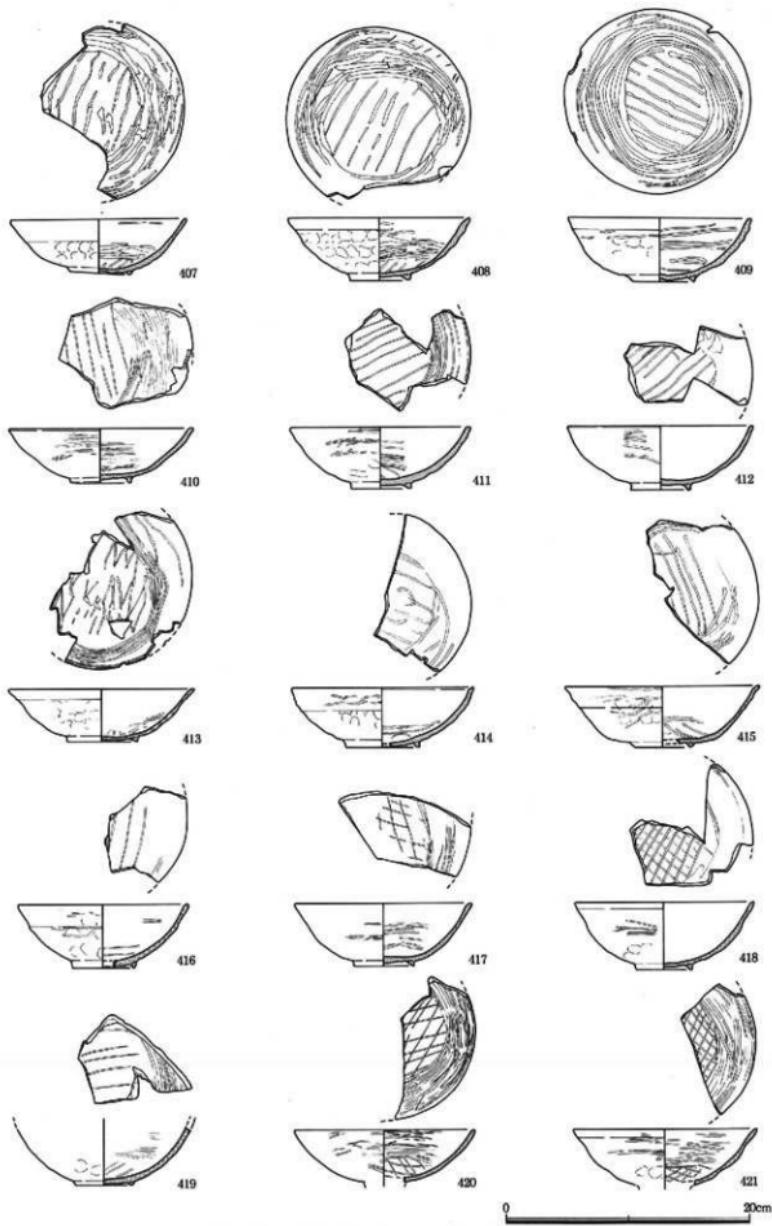
込みとしたものである。建物はこの段差に沿まる灰色（7.5Y6/1）粘質土を除いて検出されたが、この埋土中で東側と西側の2ヶ所に土器片が集中して出土した。出土土器類には瓦器椀（407～437）、小皿（440～441）、鉢（438、439）、土師器皿（442～444）、羽釜（445～450）、須恵器鉢（451～453）丸・平瓦の破片等がある。瓦器椀の口径は14.0～16.0cm、器高は9.2～9.6cmにおさまる。内底面の暗文は平行状で、中に斜格子状、また無秩序なミガキをかさねるものもある。同じことは皿についていえる。外面は体部上半以上を粗くミガキ調整している。大形椀（439）は口径23.2cm、器高8.65cm、高台は外にふんばる形態である。内面には粗い平行暗文を雜に施し、外面は指オサエのままである。皿は口径8.7～9.0cmを測るが、斜格子暗文のある器（440）は他に比べて深みがある。鉢は摩滅した底部片、羽釜は口縁部外面が段状となる形態である。土師器羽釜は内傾する口縁部が「く」の字形に屈曲する形態。土師器皿は底部から内弯気味に立ち上がり、口縁端部が内傾するものと外反するものがある。須恵器鉢は胴部片である。丸・平瓦には凸面に横方向の板ナデと繩目タタキ、凹面に布目と板ナデを施す。瓦器椀の編年にてらせばIII-2、3期に相当するかと思われる。

#### その他の遺構

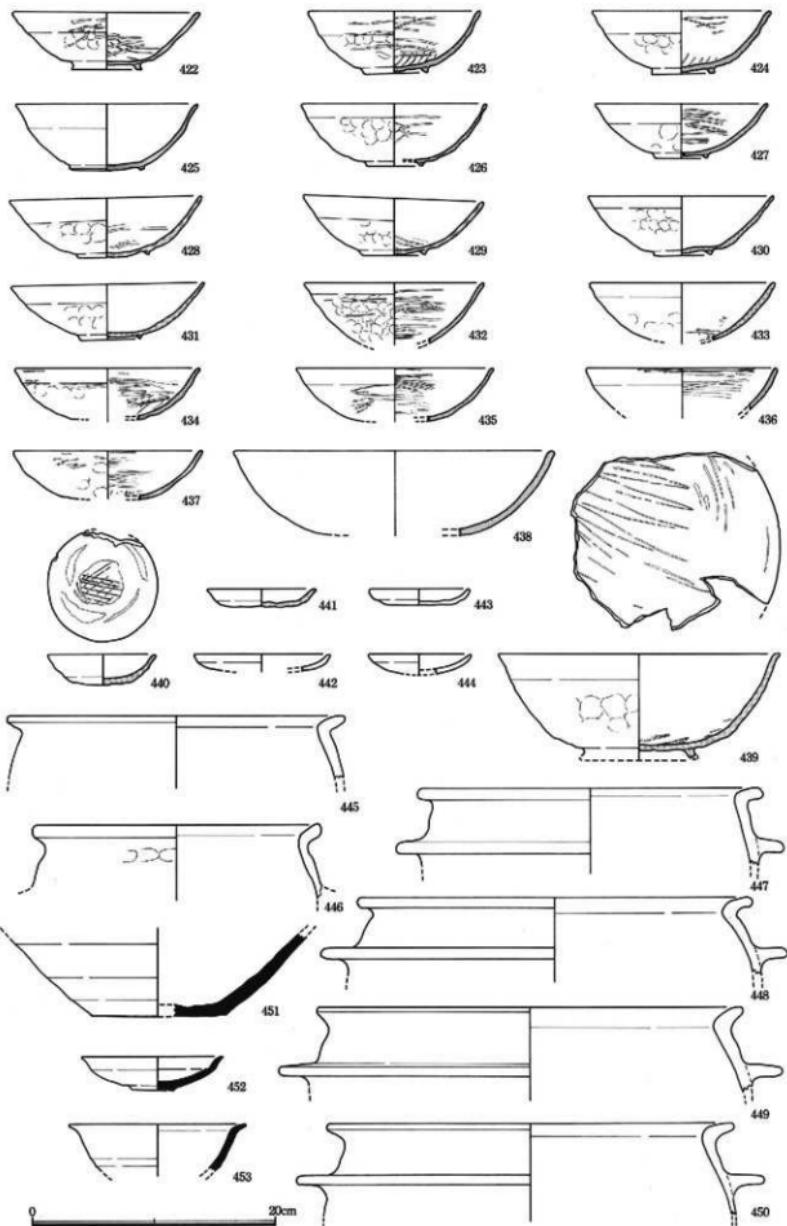
ピット1117（第86図・図版25） 土坑1113の北隣で検出されたピットである。溝1122の東肩を断ち切っている。深さは1122の溝底より深く、0.19mに達し、掘り鉢状に掘り込んでいる。埋土は明黄褐色（2.5Y6/6）粘質土で、10cm大の石と瓦器椀（454、455）、皿（456）、土師器皿（457）



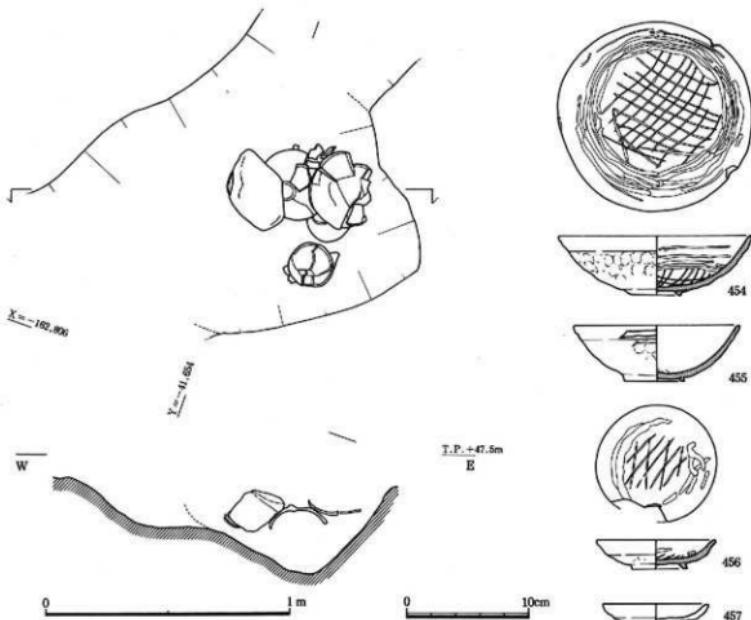
第83図 H区、落ち込み1191遺物出土位置図



第84図 H区、落ち込み1191出土遺物 (1)



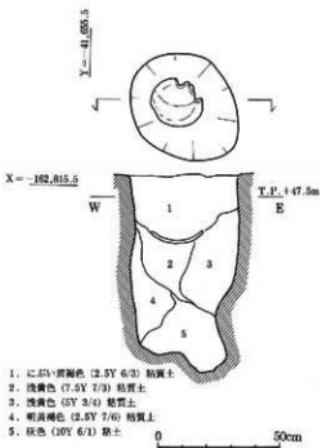
第85図 H区、落ち込み1191出土遺物（2）



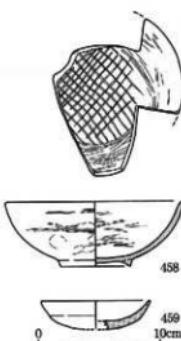
第86図 H区、ピット1117遺物出土状況・断面図、出土遺物

が出土した。椀(454)は内底面に整った斜格子暗文を施し、周囲に太いミガキをかけ、外面は指オサエのままのもの、平行暗文で口縁部付近に粗

いミガキをかける  
ものがある。小皿  
も同様に斜格子状  
の暗文で高台を付  
すものがみられる。  
土師器小皿は淡灰  
色軟質の器で、ヨ  
コナデによる底部  
と口縁部の境が明  
瞭である。瓦器椀  
編年の中期に相当するかと



第87図 H区、ピット1140  
遺物出土状況・断面図



第88図 H区、ピット712出土遺物

思われる。

ピット1140（第87図・図版25） 建物109の東辺  
柱穴1139に南接する径  
0.4～0.5m、深さ0.8m  
の掘り方である。埋土は  
5層に分けられるが、埋  
め戻した状況が観察され  
た。また埋め戻しの最後  
の段階に納められた瓦器  
皿1点（171）が第1層か  
ら出土している。建物  
109を建てる際、あるいは  
廃絶する際の儀礼的行  
為に関係するピットとも  
考えられる。

ピット712（第88図）

溝715の南で検出され、  
径0.2mを測る。掘り方

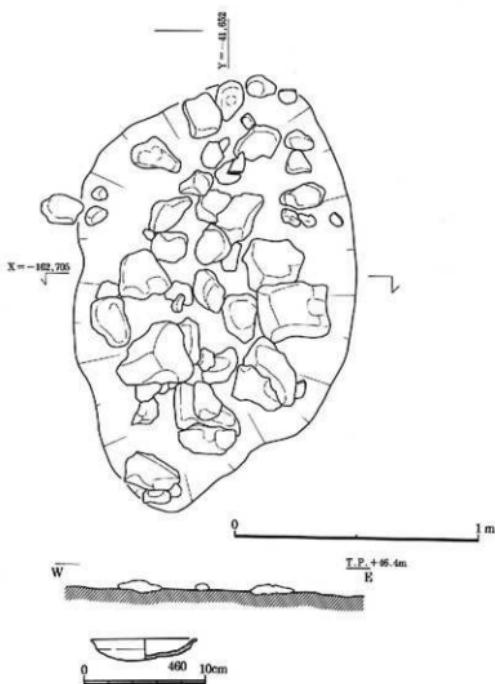
内より内底面に斜格子の

暗文を施す瓦器皿（458）と瓦器小皿（459）が出土した。

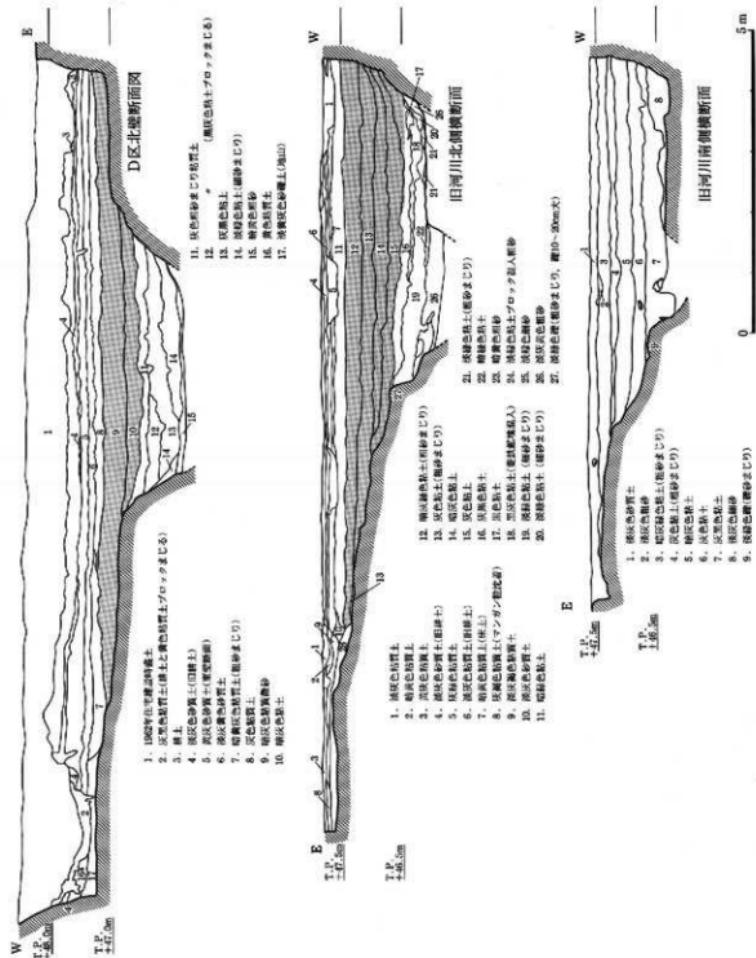
集石627（図版24） H1区の北部の連結溝915の南側で検出された。掘り込みではなく、0.55m×  
0.90mの楕円形の範囲に、主に10～15cmの礫を集めている。これらの石に少量ながら摩滅した瓦  
器片が混在し、中に皿の破片（460）がみられた。

旧河川・池跡（第90・91図） D区で検出した池跡は、中世以前の南北方向の流路の埋没過程を  
利用し、東西方向にこれを仕切って池としたものである。東西方向の仕切りは調査区南端で認め  
られる堤状の盛土、それに沿う後世の杭列、東側の岸に沿って打ち込まれた杭列などで池として  
の形状が推し量られる。池としての利用を物語る遺構として堤の盛土下で検出された木樋暗渠、  
盛土を施す前の儀礼的行為の痕跡（土師器小皿の特徴的な出土状態）を挙げることができる。

池の堆積土は灰色～灰緑色系の粘土で、これが3～4層に分層され、各層には土師器、須恵器、  
瓦器、瓦、陶磁器の細片等が含まれ、特にE区に近い地点で多く検出された。瓦器皿・皿、瓦質  
羽釜・鉢類、土師器小皿、須恵器鉢、青磁・白磁碗・鉢類、瓦など中世遺物が圧倒的であるが、  
中世遺物に比べて摩滅の度合いが著しい須恵器杯蓋、甕など古代の遺物も少量含んでいる。これ  
らの中世遺物の混入経路としては後述するE区検出の中世遺構群との関連がまず考えられる。全



第89図 H区、集石627平面・見通し図、出土遺物

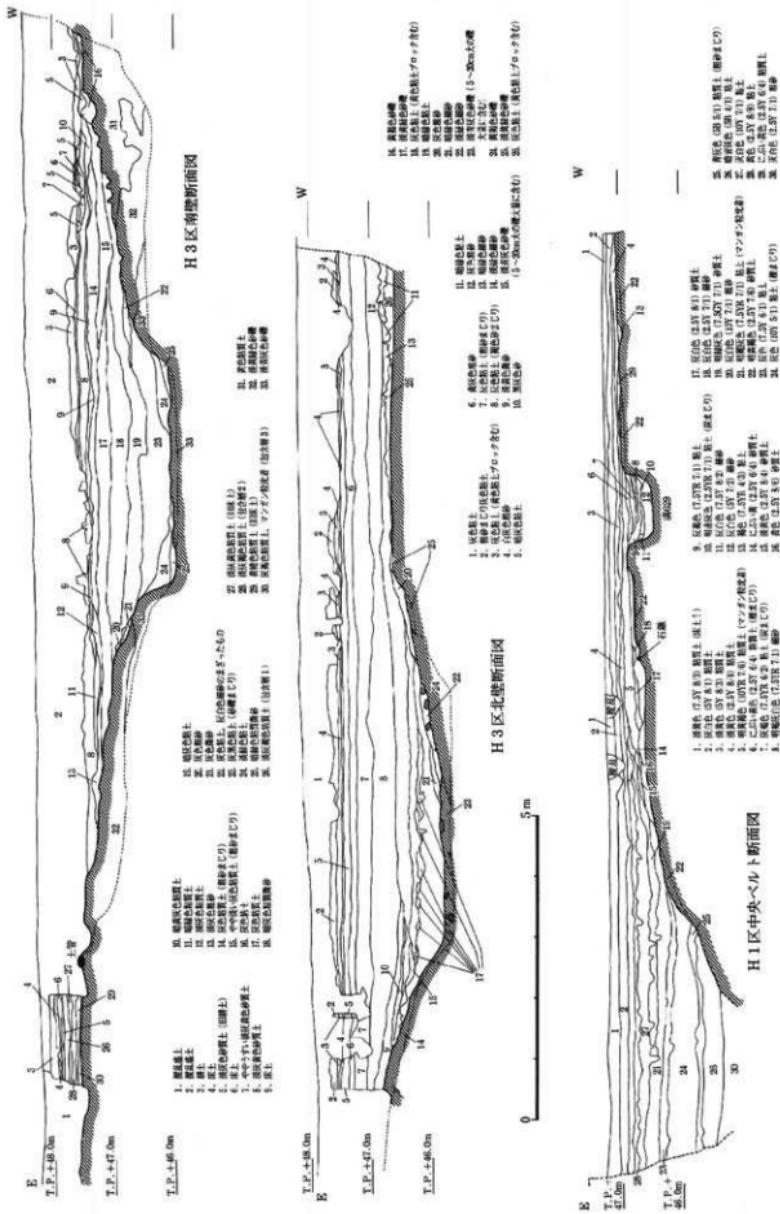


第90図 D区、旧河川断面図

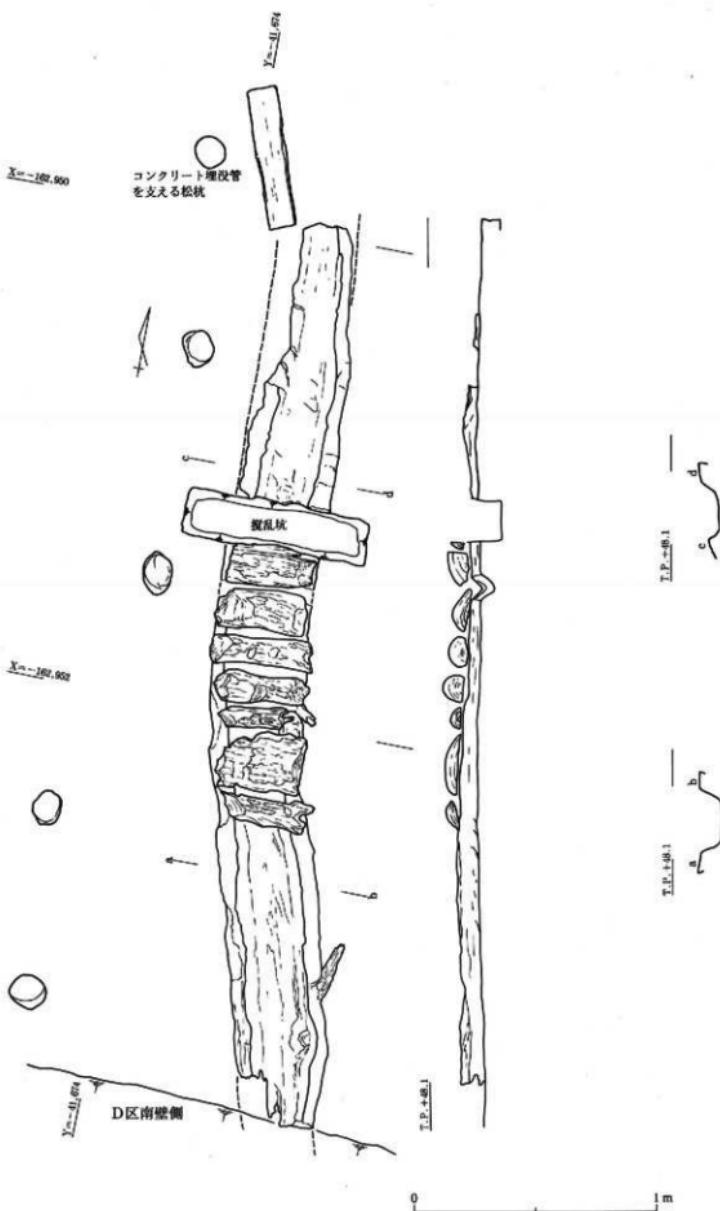
体的にみたこれらの遺物の時期は13~15世紀とみられる。

なお、この池の東西方向の堤の続きが1994年度の大阪府埋蔵文化財協会による調査で確認されている。

**木樋 (第92~95図・図版26)** 調査区南端で南北方向に設置された状態で検出された。検出部分は3.6mで、南側は調査区外に及んでいる。南壁から北2.3mのところで幅0.2m、長さ0.8mのコ



第91図 H区、旧河川断面図



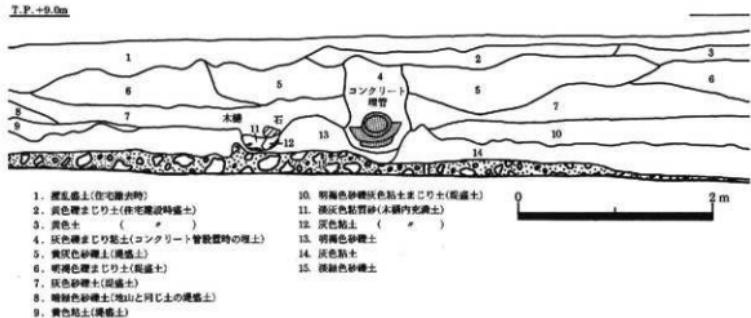
第92図 D区、木桶出土状況図

ンクリート基礎を据える際の掘削で断ち切られている。この基礎は木樋の検出されたほぼ同じ位置で、それより0.2mの上位レベルに埋設されたコンクリート管（径20cm）を支えるために設置されたものである。つまり、近代にも同じ位置に暗渠が設けられたわけである。

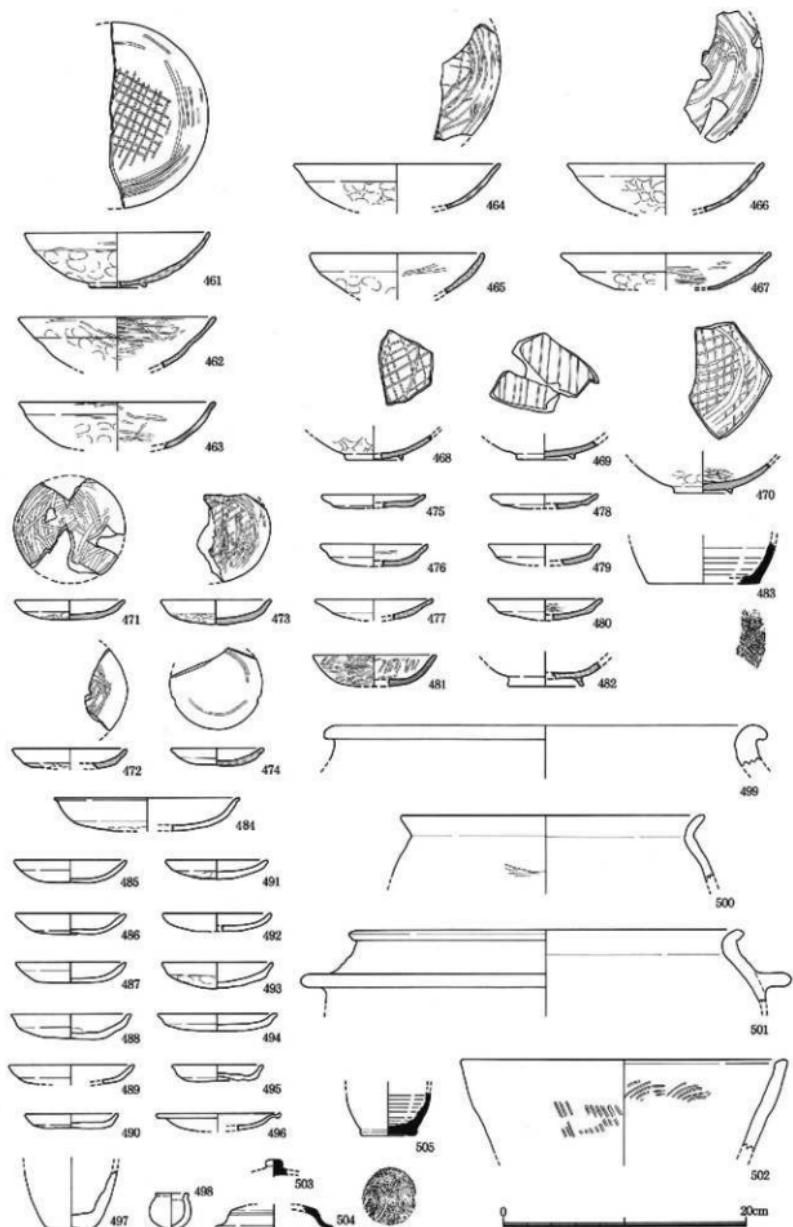
木樋の材質は径40mのマツの樹幹を縦に半割りし、外皮から7~8cmの厚みを残して、芯材を手斧で削り取り、深さ9~10cmの平坦な底面を得て溝の形に整えている。斧の削り痕は内面全体によく留められている。南壁より2.2mのところで樋に幅9cmの断面三角形の切り込みがつけられ、完全に切り離されず外皮で繋がっている。これは樹幹そのものの曲がりが平坦な設置面には不安定なため、地面に合わせて直角に整えたと考えられる。南壁より0.35mのところでは樋の底面に径6cmほどの孔があるが、これは樹幹の節孔部分でこれに疊がっている。樋の北端は厚みがなくなり、側面がなく底面だけであるが、これは上記のコンクリート基礎設置工事の際損なわれたようである。

樋の被覆材は南壁から1.2m分が設置当初のまま残っていた。材は長さ0.32~0.42mで、樋本体の幅に応じてその都度切り取ったのだろう。幅10cmのものは枝または樹幹の末の部分を半割りし、それより幅広のものは樹幹を適当に割り取っている。木樋の設置は池の南辺と思われる杭列より南1.6mで、池の南西部にあたる。樋の設置面より上には盛土がなされていること、前回の調査で堤の一部が確認されていること、それが今回の調査のこの位置に続くこと、ちょうどその位置でこの樋が検出されたこと、などから樋は旧地形図からも判明している南の池（現在新築高層住宅となっている）との間の堤下に埋設されたと考えられる。木樋下の池の堆積土の出土遺物としては瓦器碗（461~470、482）、小皿（471~481）、土師器皿（484）、小皿（485~496）、甕（499、500）、羽釜（501）、鉢（497）、小型壺（498）、須恵器壺底部（483）、須恵器壺蓋（503、504）、平子（505）、鉢（502）、白磁碗（506~510）、青磁碗（511~514）、青磁皿（515）、古瀬戸の折縁深皿（516）、陶器すり鉢（517）、鉄製鍋（518）、軒丸瓦（519）、平瓦（520、521）、石鎚（523）等が出土した。

旧河川流跡628・1601（第96~98図・図版27）'97年度の調査ではほぼ南北方向に延びる河川跡



第93図 D区、南壁木樋部分断面図



第94図 D区、池出土遺物 (1)

が検出されていたが、今回の調査ではH区で大きく東へ向きを変え、右岸が調査区外に及んで東に張り出した後、再び大きく北西へ（N-20°-W）と反転してから、調査区北端では緩やかに北北東へ（N-20°-E）振れている。東に大きく向きを変える部分の地山がそれ以南の粘土や粘質土ではなく、隆起した段丘疊となっている。また建物106~108の柱穴が掘り込まれた部分も同様に段丘疊上面である。流れはこの南北2箇所の段丘疊層の隆起の間隙を下刻し、蛇行部が形づくられたと思われる。

河川堆積の観察結果は前回と変わりなく、中世遺物を含むのは灰色～灰緑色系の粘土層で、それより以下では出土遺物はない。遺物の内容は今回の調査区全体に堆積する中世包含層出土遺物と大差なく、生活域に近い部分に比較的の遺物の出土が多い点もD区の調査結果と似ている。したがってこの調査区でも河川堆積層の内、中世遺物が混入する第18層は少なくともまだ完全に埋没しきれない状態であったことを反映しているといえよう。その段階で取水あるいは排水利用に供する溝（溝1085、914、626に連なる一連の連結溝など）が掘り込まれた。またそれ以前の段階でも既に古墳時代中期に取水利用の溝（溝629・1087）の掘削がみられる。

流跡幅は11~12mを測るが、北側では右岸が調査区外に及んでおり、その一部の傾斜変換点を確認できたにすぎない。横断面の観察はH3調査区南壁とその北側に設けた東西ベルト、H1調査区西壁、同調査区北側東西ベルトにより行った。うち、南壁断面では花粉分析に供する土壤サンプルを採取した。H3調査区は旧住棟の建設や解体時の攪乱を相当受けているため、良好な河岸のラインを追うのは困難だったが、岸辺に打設された杭の一部が残っており、これを結ぶことによって左岸ラインをほぼ想定できる。河川がこの調査区の北部で大きく東に蛇行するのは、北側の左岸に高まる段丘疊層を迂回しつつ北流した結果であると考えられる。出土遺物としては、瓦器椀（524~560、575、576、577）、小皿（561~574）、瓦質鉢（578~580、584）、甕（581、619）、羽釜（582、583）、土師器小皿（585~597）、皿（598、599）、片口鉢（604、605）、羽釜（600~603）、不明土製品（606）、須恵器片口鉢（607）、鉢（608~613）、坏身（614）、甕（615）、壺（616）、白磁碗（617~623、627、629）、青磁碗（624、626、628）、青磁皿（625）、青磁合子（630）、陶器碗（631）、平瓦（632、635）、石礎（633）、スクレイバー（634）、銭貨（636~638）等が出土した。瓦器椀は比較的しっかりとした高台をもち内外面にヘラミガキを施すもの（524）、法量の縮小化の進んだ（532）まで瓦器椀編年Ⅲ、Ⅳ期に相当すると考えられるものまである。（614、617）など古墳時代後期の遺物が若干出土しているが下層からの混入品と考えられる。平瓦は凸面に格子タタキを施すもの（632）とすり消しているもの（635）が見られる。銭貨は3点出土し、（636）は唐錢で「開元通寶」（初鑄621年）、（637、638）は北宋錢で「紹聖元寶」（初鑄1094年）「聖宋元寶」（初鑄1101年）と確認できた。

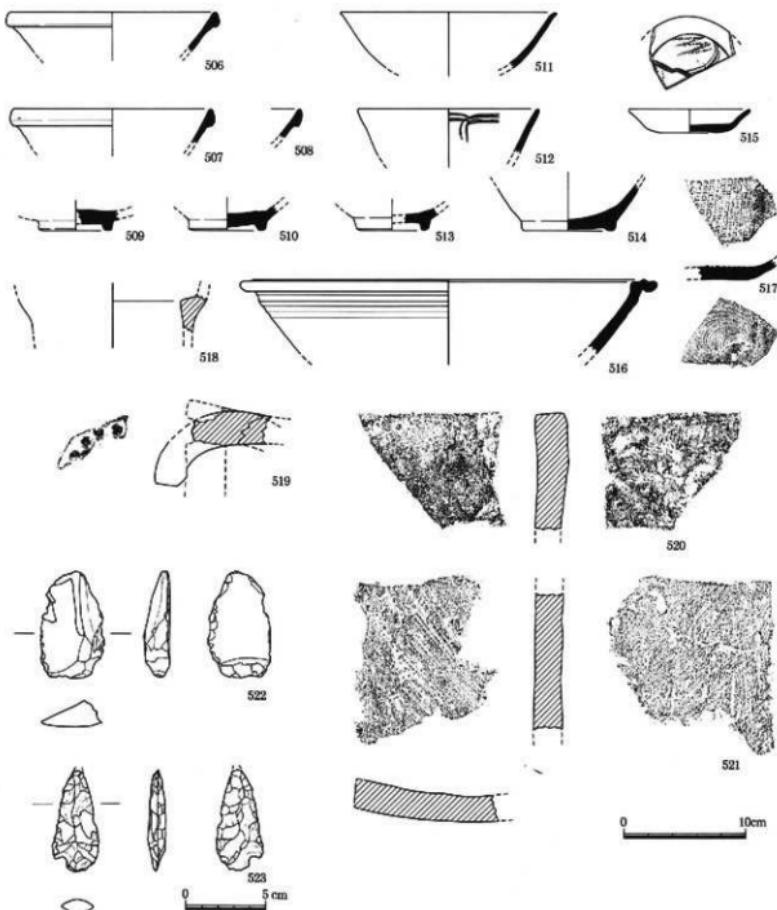
#### 中世以降

井戸905 建物108の北側の河川蛇行部の河岸に掘り込まれた円形の素掘り井戸である。検出面よ

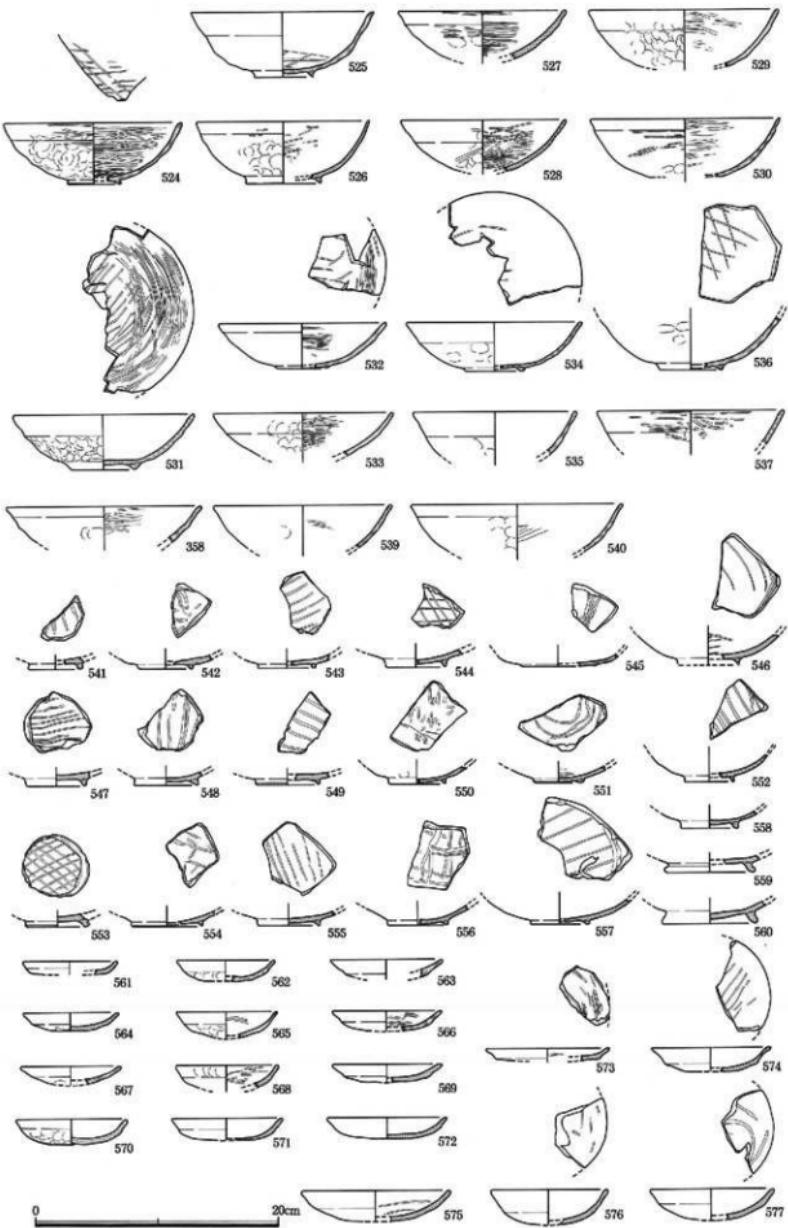
り1.8mまで影らみの軽い膨張り状に掘り込まれている。埋土は青灰色粘土のみで、須恵器の細片が1点出土した。しかし埋土の状況から見て中世以降の可能性が大きい。

井戸1053（近代） 調査区北半で機械掘削の時点で検出された円形の井戸で埋土は現耕土と同じである。出土遺物はない。深さ1mまで掘削した。

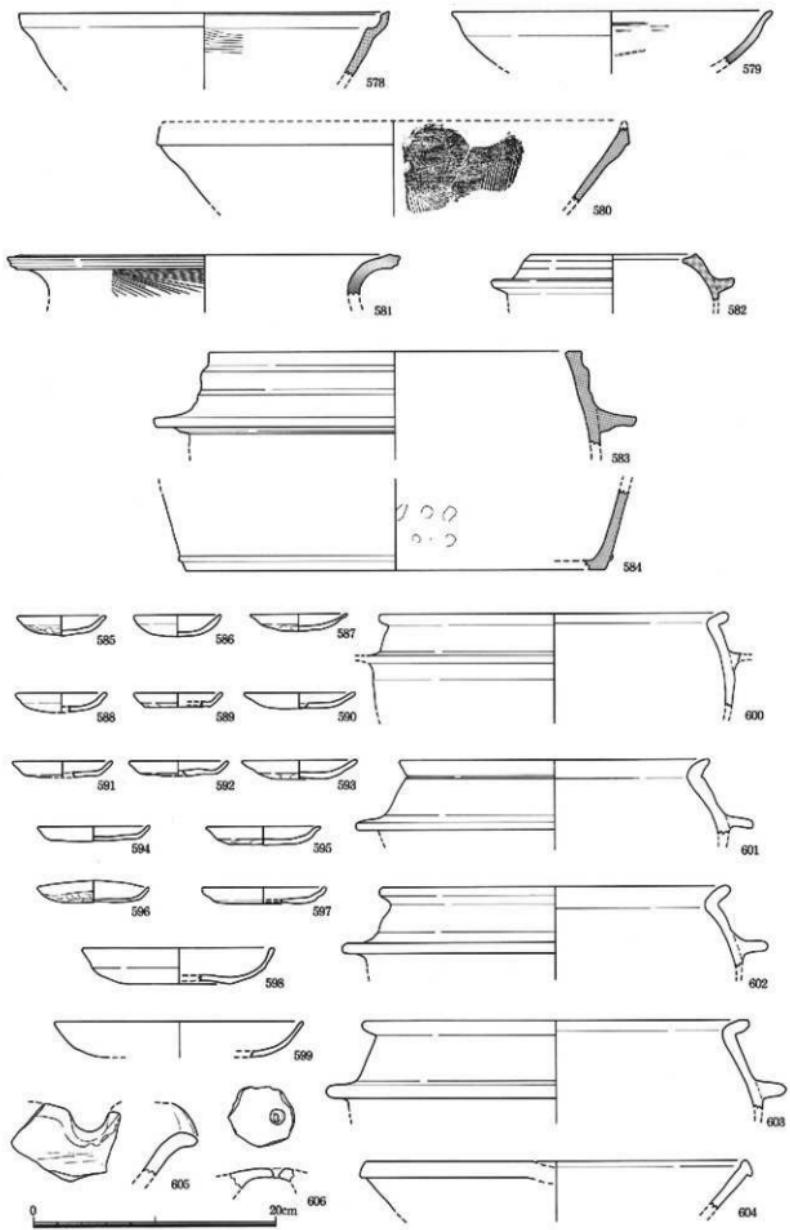
包含層出土遺物（第99～101図） 包含層からは瓦器鉢（639～656）、小皿（657～669）、瓦質羽釜（672）、鉢（673～676）、東播系甕（677）、土師器小皿（678～682）、羽釜（683～688）、須恵器杯身（689）、甕（690、691、694）、壺（692）、鉢（693、695～701）、白磁壺（702）、青磁碗（703～709、719～722）、白磁碗（710～718、726、727、723～725）、陶器壺（728、729）、滑石



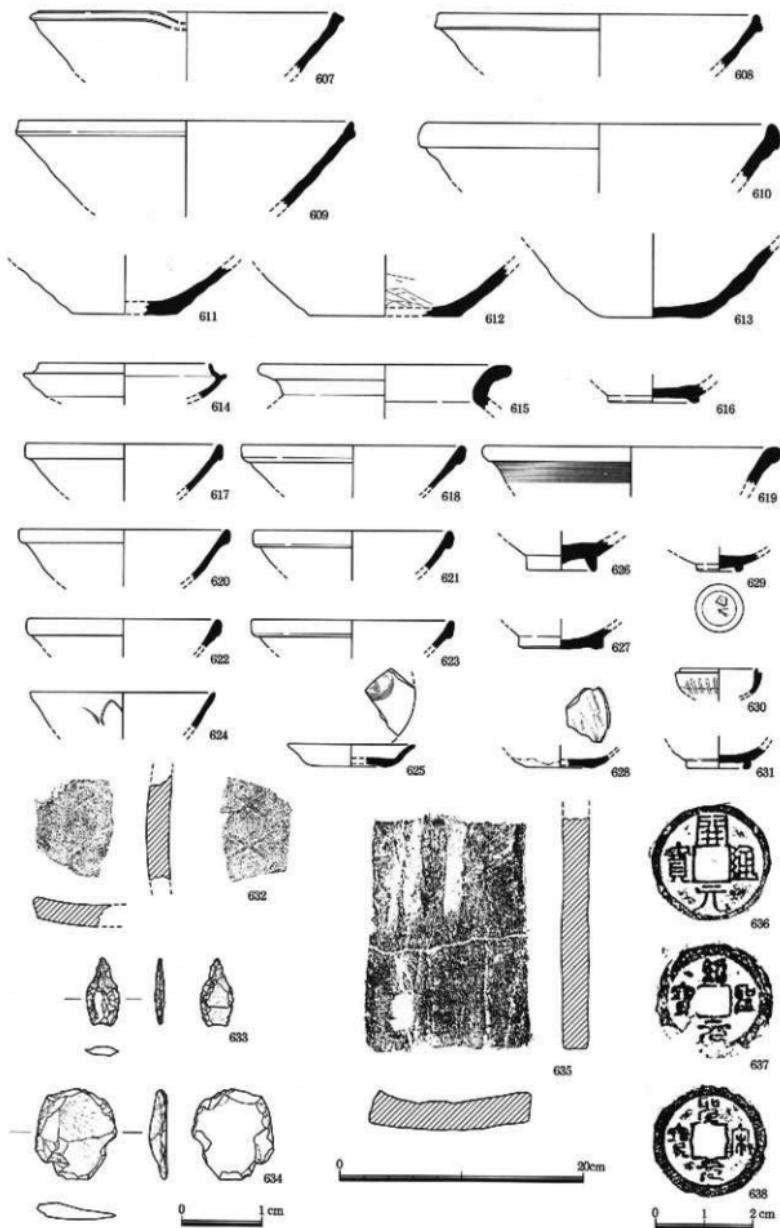
第95図 D区、池出土遺物（2）



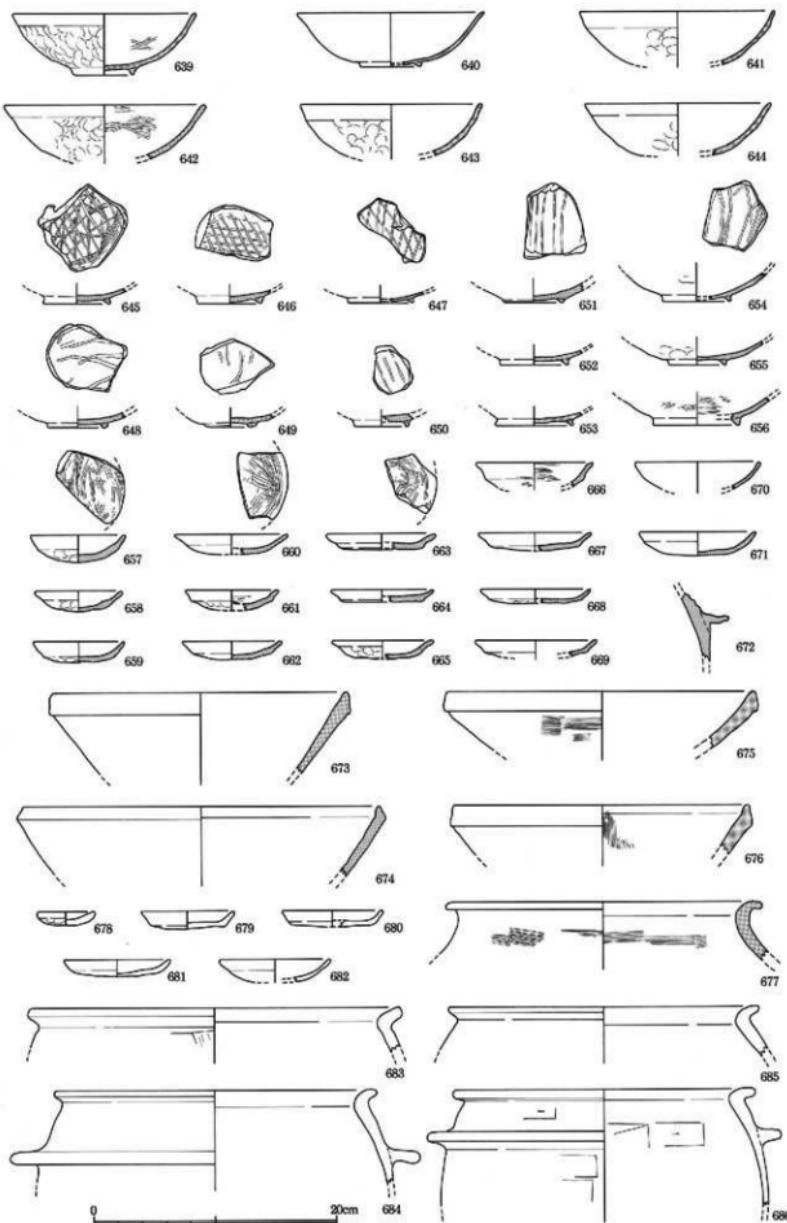
第96図 H区、池出土遺物 (1)



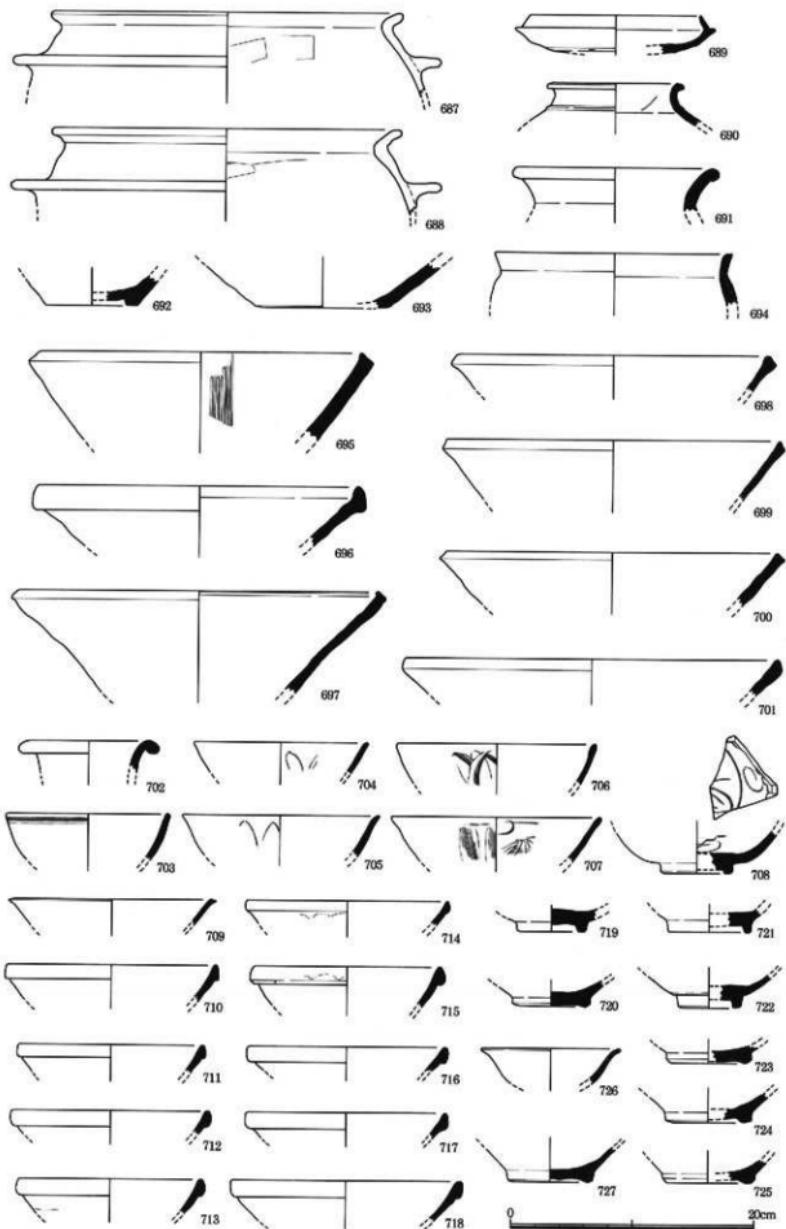
第97図 H区、池出土遺物（2）



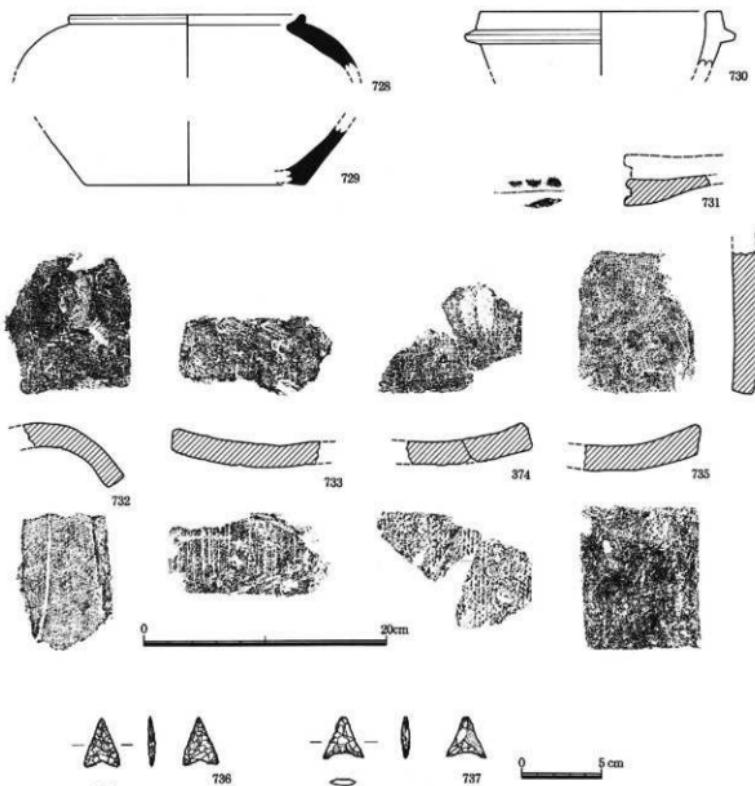
第98図 H区、池出土遺物（3）



第99図 H区、包含層出土遺物（1）



第100図 H区、包含層出土遺物（2）



第101図 H区、包含層出土遺物（3）

製鉄（730）、軒平瓦（731）、丸瓦（732）、平瓦（733～735）、縄文時代の石鐵（736、737）が出土した。瓦器椀は内底面に平行暗文を施すもの、斜格子文を施すものが確認され、瓦器椀編年のⅢ～Ⅳに相当すると考えられ、これら13世紀後半から14世紀代の遺物を中心に古墳時代後期の遺物（689、691）等が若干出土した。

調査の過程で、下記の方々に有益なご教示をいただきました（敬称略・順不同）。  
 包丁道明（美原町教育委員会）、森村健一（柳市立埋蔵文化財センター）、西田孝司（松原市市史編纂室）。整理作業では以下の方々のお世話になりました（敬称略・順不同）。主査 広瀬雅信、地村邦夫技師、東英美子、井上能子、宇澤ヒデ子、大上馨、奥野容子、越智和子、川東貴子、河本直子、小門邦代、古下佳代子、納谷有香子、西村香織、増川順子、松尾照子、八柄あさ代、矢野早苗の多大な協力を得て、滞りない作業を進めることができました。ここに記して以上の方々に心よりお礼申し上げます。

## 第5章 まとめ

狭山池から北に流れる東西両除川の間には中位段丘の可耕地が開けている。大阪南部に特有の年間降水量が少ない風土は、この地の灌漑を困難にしてきたが、大小多数の溜め池を築くことでそれが克服されてきたといわれる。過去のこの歴史的事実に目をむけるとき、当調査地点の土地がどのように耕地として開発され、潤されてきたか、まずこの点を発掘調査から得られたデータに基づいて検証することがもっとも基本的な課題と思われる。そこでこの課題に対していまのところ思い描いている調査地点の遺構の変遷のイメージを模式的に示し（第102・103図）、若干の説明を加えて報告のまとめにかえたい。

古代から近世にいたる開発の根底に一貫してみられるのは、耕地の拡大とその灌漑、つまりどこから恒常的に水を確保するかという問題意識だった。当調査地点で検出された遺構の変遷にうかがわれる人間集団の動静は、まさにそのための営みが地表に投影されたといつてもよい。

古代では自然地形を克服しようとする志向がうかがわれても、結局は自然地形を部分的に利用するほしかなかった。その頃はまだ流水があったとおもわれる河川から導水したようであり、たとえば、溝629・1087や、溝924、昨年度のD区溝281などはその痕跡とみられる。またこの時期に建物や井戸といった生活臭い遺構は2年度にわたる調査の中でも、まったくみいだされなかつた。そのてんからみても、腰をすえた開発はおこなわれなかつたと考えられる。それだけ自然環境面でも、それを克服できる社会経済的側面でも、まだ不安定要素が多くつたといえよう。

中世、特に13世紀は周辺でも遺跡数の増大が指摘されているが、余部遺跡（その1）の地点もこの現象の一貫として浮上てくる。遺構分布のありかたは、それまでとは違い、自然地形に左右される部分が残るといえ、基本的には条里の地割りに適合させている。それが現在の地籍図にみられる1丁四方を基本にしているてんでは、近代の余部地区のほぼ原形をなす時期である。遺構の存在する区画に、地籍名を該当させれば、居住域と耕地、さらには貯水個所の輪郭がよりはっきりとする。「樋ノ上」、「八反田」の境の弧状の南北ラインは一丁四方の区画を外れるが、これはかつての河川の左岸であったため、自然地形の克服し難い名残りとして現在もこの個所の道路の形状にうかがわれる。「樋ノ上」の地籍の中で西に14間分ほど張り出した、河川部分を除く一丁四方で検出された建物・井戸それに附隨する畠地の遺構は、一単位の屋敷地の体裁をとつて、実に整然と営まれていた印象を受ける。その中には幕のある屋敷地もみられる。

屋敷内の建物が棟を東西に向けるものがほとんどであるが、建物109だけは南北である。これは旧河川がゆるやかに東に蛇行していく個所にあたり、その分西側に余地がないためのやむえない処置であったろう。だからここでは家屋は基本的に東西方向をとっていたとみてよい。その理由のひとつとして風向きを考えておきたい。建物群の時期のうえでの先後関係はそれほどはっきりしていない。しかし占地の違いに注目すれば、地山の硬い礫層が隆起する旧河川の岸辺よりは安定した場を占める屋敷地Bがある。あるいは当初ここに定住したムラびとの家屋であったかも知れ

ない。次いで旧河川に接近して建てられるようになると考えたい。

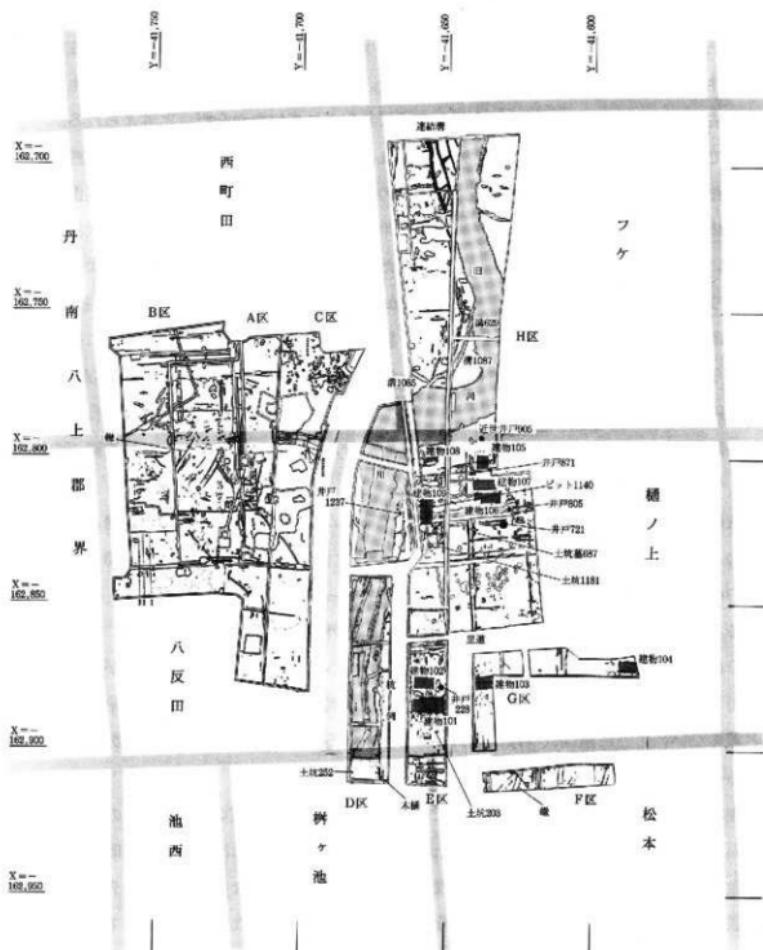
いずれにしても建物群の時期差は前章でみたように大差ないと思われるが、かりにあったとしても居住域の一定区域への占地がすでに一丁四方内で定まっていたことに変りはない。重要なのは、13世紀前半にきわめて計画的に占地されたムラがなぜここに出現するかである。古代には安定した土地ではなかったが、この時期になって出現するこのムラは、それに比べれば住むに安定した条件がととのった、あるいはととのえられた。つまり、ここに定住して耕地の養生にいそしめる手法がこのムラに住う人間集団全体にすでに共有されていたからだ、と考えられる。

河畔で生活を営むのに季節的な冠水は避けられない。特に、河床が高いといわれる西除川流域ではなおさらである。しかし、古来農耕を営むのに、かえってその冠水を利用する事例は多い。その意味ではムラとしての形をとった13世紀前半にようやく河岸地帯へ進出できる状況が醸成されたといえる。ただこの頃、調査区で検出された河床は厚い泥土の堆積にみられるように、すでにかなり高くなり、當時流水がある状態ではなかったようである。この状態の河川から導水する、H区北部の連結溝群には底面に粗い砂の堆積が認められ、それが付近の土坑や窪みにもみられることからして、季節的には氾濫した形跡もうかがわれる。しかし河川の埋没過程全体からみれば、徐々に停滞していく状況があった可能性は高い。この時期の河川はおそらく河川から谷池へ移り変わる段階で、ムラびとは天水と西除川左岸からの分流とをここに貯水し、これを周辺の耕地へ配水していたのだろう。

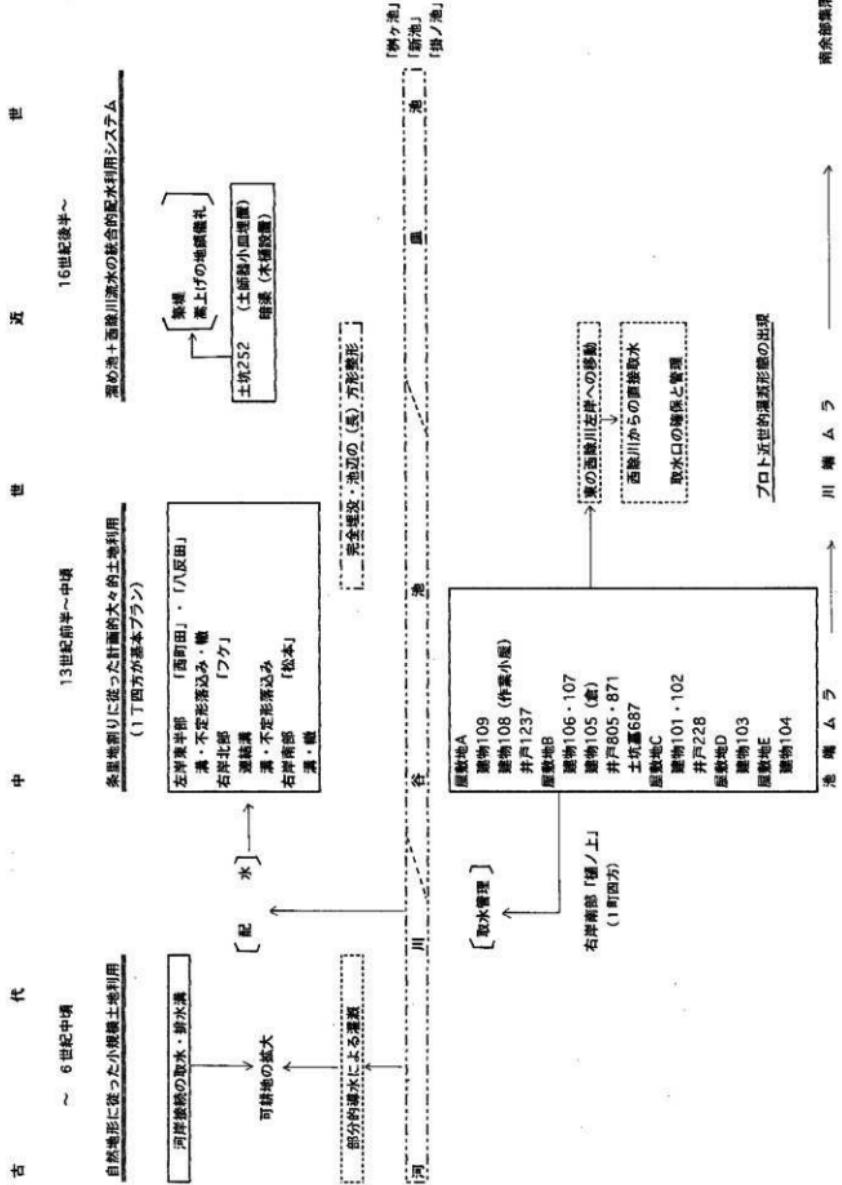
13世紀中頃以降、この池端ムラの状況は一変する。ムラの屋敷地がなくなり耕地となって、かつてのムラの中に里道（溝664・685・862・863・864と溝669・671・672・675・683・689・872。里道の両側溝か。かつての屋敷地の墓や井戸を断ち切っている）が南北に通る頃、住まいは他所に移る。その後補となる場は、おそらく東方の調査区外に求められよう。

かりにそうであるなら、東への移動は、西除川左岸への進出という新たな状況が展開し、谷池を利用した貯水池以外に西除川左岸からの直接取水が可能になり、それを管理し始めた結果だったと考えたい。ここに池端ムラは川端ムラへと変貌する。そしてこの位置が近代の南余部の集落そのものの前身となっていく。

調査地点でのその後の状況は、別の形でも確かめられる。昨年度のD区では池の埋没し切った平坦面に径0.5~0.6m、深さ0.15mの小土坑が掘ってあり、そこには16世紀の土師器小皿が蓋と身の合わせにして3組納められていた。埋没した後の谷池のさらなる上地利用に先立って、地鎮めの儀礼を行なった痕跡である。季節的な貯水の氾濫や日照りのないことを願って、谷池を新たに嵩上げする地業に付帯する遺構と思われる。この土坑の時期より遅れて、やはり谷池の埋没平坦面に松の幹を縦割りし、芯材部分を溝状に荒削りした樋が南北方向に設置されていた。そしてその樋とほぼ同じ位置に上方から掘り込まれた攪乱坑があり、そこにコンクリートの埋設管が布設されてあった。この位置はかつての「樋ヶ池」との間の堤（現在は高層住棟前の道路で、地割り坪境にあたる）の下に暗渠として設けられたものである。その位置が地籍「樋ノ上」の中にお



第102図 検出構造と地籍との関係図



第103図 調査区の土地利用の変遷模式図

さまっている。また旧河岸に打ち込まれた東西、南北の杭穴の並びが地割りラインに沿った形で旧河川の埋没平坦面上で検出されたが、これらはもはや近世～近代へ連なる地割りに合わせて池辺を長方形に整形する作業の一端を反映している。このような16世紀の状況はいわゆる皿池への変貌ということができるかもしれない。

以上のようにみると、屋敷地とその池端立地はここでの中世的灌漑形態として理解され、一方屋敷地の消滅と耕地への変貌、くわえて西除川左岸への進出、そこで新たな川端ムラの出現は、いわばプロト近世の灌漑形態の出現といいかえられよう。近世文書に描かれる狹山池下流域の、西除川左岸の統合的な配水利用システムの萌芽をそこに求めるのは無理だろうか。ここで検出された遺構の多くをこの一連の灌漑史の中に位置づけてこそ、南余部の遺跡の性格の特徴づけが際立ってくるように思える。E調査区の土坑203には牛（馬）のものかと思われる下顎骨が2点の瓦器碗のうえに置かれていた。屋敷地があった頃の遺構である。牛馬の部位が水にかかる宗教儀礼の中で象徴的に用いられる事例を念頭に置けば、それが降雨・止雨いずれの祈願であろうと、これまた灌漑と結びついてくる。気候、地形などの自然環境にきたすさまざまな形の劣悪な条件を精神的にも克服しようとする、ムラびとの象徴的な宗教儀礼的行為の痕跡であるにちがいない。

13世紀には中世村落が急速に広がっていくといわれるが、規模・内容は古代以来の土地毎の自然環境に応じて、それぞれ異なるニュアンスをもってわれわれの前に浮き上がってくるはずである。それを類型化して土地利用の変遷を美しく説明するまでは、現実の過去のムラの姿はまだまだとらえ難い意外性を秘めている。ここにあえて描いた模式図も、限りない事実のほんの一面についてい目を奪われて、本質からはほど遠い理解ではないかと、調査担当者として危惧している次第である。議者諸賢の御批判を仰ぎたい。

## 参考文献

- 服部昌之「美原町の字図」「美原町の歴史」第1号 美原町教育委員会 1975  
服部昌之「美原町周辺の地形環境」同上 第2号 1996  
鶴田 晃「美原町の川と道」同上  
福島雅蔵「近世狹山池と美原町域の村々」同上  
金田章裕「中世村落と灌漑への接近法」「中世村落と灌漑」大和古中近研究会 1999  
堀江門也「関西新空港連絡道路他発掘調査と日根荘遺跡」「泉佐野市史研究」第2号 泉佐野市史編さん委員会 1996  
上田繁之「史料に見る佐野村水利の初期展開について」同上  
『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1997  
『第2回狹山池フォーラム 狹山池築造と古代の開発』大阪狭山市教育委員会 1995  
『狹山池 埋蔵文化財編』狹山池調査事務所 1998  
『美原町国土利用計画』美原町 1985  
『余部遺跡』(附)大阪府文化財調査研究センター 1997  
『余部遺跡(その1)発掘調査概要』大阪府教育委員会 1998  
『余部遺跡(その1)発掘調査概要』II 大阪府教育委員会 1999  
『余部遺跡(その2)発掘調査概要』I 大阪府教育委員会 1998  
『余部遺跡(その2)発掘調査概要』II 大阪府教育委員会 1999  
『大阪府地誌』河内国第7編丹南郡 大阪府 1885

## 付章 花粉分析・珪藻分析結果

川崎地質株式会社

### 第1節 試料採取層準

模式柱状図を図1に示す。1～9の層準で試料採取した。採取地点はH1区北壁である。

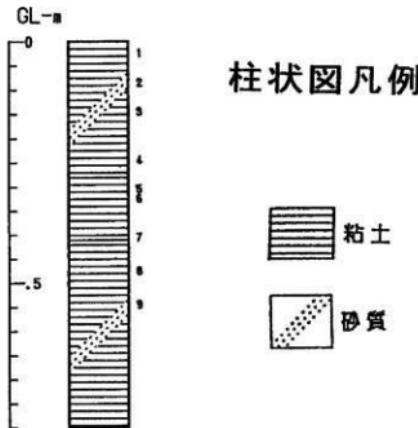


図1 模式柱状図

### 第2節 花粉分析結果

#### (1) 花粉化石の含有状況

9資料の花粉分析を行った結果、全ての資料から花粉化石が検出された。

#### (2) 検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は表1に示す64種類であった。これらのうち、全資料を通じて花粉組成を特徴づける種類は、以下に示すようなものであった。

##### ①卓越木本花粉

マツ属（複維管束亞属）、スギ属、アカガシ亞属

##### ②卓越草本花粉

カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）

##### ③栽培種花粉（栽培の可能性のあるものを含む）

## イネ科（40ミクロン未満）

### （3）分析結果

花粉分析の結果を、花粉ダイヤグラム（図1）と花粉分析結果表（表1）に示し、花粉ダイヤグラムは計数した木本花粉を基数にし、各々の木本花粉、草本花粉について百分率で表した。また検出数の少ない試料では出現した種類を「\*」で示した。

### （4）花粉組成の特徴

1、2では、マツ属（複維管束亜属）が50～60%程度と高い出現率を示す。

また、草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が200%を越える高率で出現する。

3～6では、スギ属が30～40%と高い出現率を示すほか、マツ属（複維管束亜属）アカガシ亜属、コナラ亜属が10～20%程度の出現率を示す。また草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が100%を越える高率で出現する。

7～9では、「化石種」のカリヤ属、フウ属、が低率であるが出現する。

## 第3節 珪藻分析結果

### （1）珪藻化石の含有状況

9試料の珪藻分析を行った結果、試料No.4、5を除くすべての試料から珪藻化石が検出できた。また、今回の分析で検出された珪藻化石の種類は表2に示す70種類である。

### （2）分析結果

珪藻分析の結果を、珪藻ダイアグラム（図3）、珪藻総合ダイアグラムと珪藻化石組成表（表3）に示す。珪藻ダイアグラムは計数した総数を基数にし、百分率で表した。珪藻総合ダイアグラムのうち、左端の「生息域別グラフ」は同定した全ての種類を対象にそれぞれの要因（生息域）毎に、百分率で表したものである。そのほかの4つのグラフは、淡水種についてそれぞれの要因毎に百分率で

表したものである。

### （3）珪藻組成の特徴

1、2では淡水種が検出固体のほとんどを占める。特に卓越する種類はないが、*Pinnularia*属や*Stauroniscis Phoenicenteron*などが10～20%の出現率を示す。

1、6では、*Pinnularia*属が40～50%の出現率を示す。

7～9では、汽水種の*Achinanthes brevipes*が40～50%の出現率を示す。

## 第4節 考察

### (1) 花粉分帯

花粉組成の特徴から以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉文帯のと特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、資料NOも下位から上位に向かって記した。

#### [1] P-III帯（9～7）

「化石種」のカリヤ属、フウ属が低率ではあるが出現する。そのほか、アカガシ亞属、コナラ亞属も10～20%の出現率で安定して出現する。

#### [2] P-II帯（6～3）

マツ属（複維管束亞属）、スギ属が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、アカガシ亞属、コナラ亞属も他の種類に比べやや高い出現率を示す。また草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

#### [3] P-I帯（1, 2）

マツ属（複維管束亞属）が高率を示す。また草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

### (2) 硅藻化石群集の設定

各地点の硅藻分析結果をもとに、D-I～IIIの硅藻帯を設定した。以下に各硅藻帯の特徴を示す。また硅藻帯の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載する。

#### [1] D-III（9～7）

淡水種が50%程度の出現率である。

種構成では、汽水種の *Achinanthes brevipes* が卓越する傾向にあり、淡水種の *Coccineis placentula*、*Cymbella tumida*、*Epithemia turgida*、*Synedra ulna*などの出現率もやや高い傾向にある。

#### [2] D-II帯（6, 3）

淡水種が80～90%を占め、淡水・底生種の *Pinnularia* 属が優先する。

#### [3] D-I帯（1, 2）

淡水種が100%近くを占め、淡水・底生種の *Pinnularia* 属や *Stauroneis phoenicenteron* などが高率を示す。

### (3) 古植生変遷

ここでは、花粉分析結果より遺跡周辺の古植生を推定する。

#### [1] P-3帯

P—I带期以降、調査地周辺は陸化しており、小河川の氾濫による砂層の堆積が続いたと考えられる。

この時期の珪藻組成では、海～汽水種が多産する。しかし、海～汽水種は淡水・浮遊種と正の相関関係を示す。また花粉組成ではフウ属やカリヤ属などの「化石種」が特徴的に認められる。これらのことから海～汽水種の珪藻、「化石種」の花粉は、いずれも後背の丘陵を形成する布志名層からの二次堆積である可能性が極めて高い。したがって、この時期には調査地周辺は淡水化していたと考えられる。

山地縁辺にはコナラ類、ニヨウマツ類を要素とする二次林が、山地縁辺の谷沿いにはスギを主とする渓谷林が発達し、山地にはカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。またマツ属（複維管束亜属）花粉の一部は、浜山砂丘に分布していたであろうクロマツに由来する可能性がある。

#### [2] P-II带期

前時期に比べ神門水海が縮小し、小河川は自然に流路を変え、あるいは人為的に用水路として整備されていったと考えられる。調査地内の小河川の跡は水の溜まる凹地（湿地）となり、やがて水田となった。また、一部ではソバの栽培も行われた。

中国山地、北山山地の様子は前時期とほとんど変化がなく、山地縁辺にはコナラ類、ニヨウマツ類を要素とする二次林が、山地縁辺の谷沿いにはスギを主とする渓谷林が発達し、山地にはカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。またマツ属（複維管束亜属）花粉の一部は、浜山砂丘に分布したであろうクロマツに由来する可能性がある。

#### [3] P-I期

調査地周辺は明治から戦前に観られ、現在の記録に残るような田園地帯になったと考えられる。

上記の原稿は余部遺跡（その1）発掘調査において実施した花粉分析・珪藻分析委託の報告書から必要な部分について抜刷し編集したものである。

当分析調査業務は、大阪府教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施したものである。

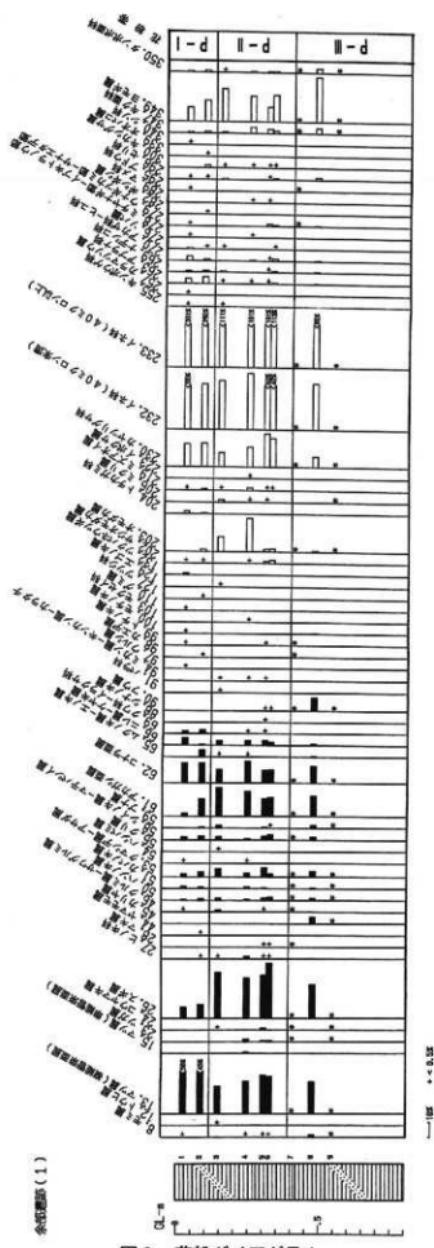


図2 花粉ダイアグラム

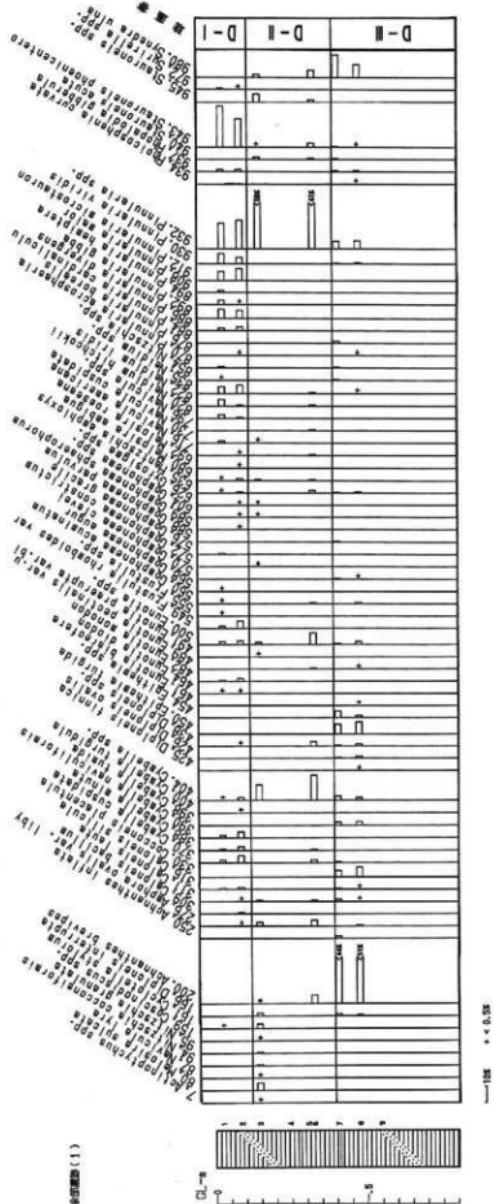


図3 硅藻ダイアグラム

表1 花粉化石組成表

全部選択(1)

NO.	DEP.U	DEP.L	8	12	13	15	23	24	26	27	28	44	45	46	50	51	
1	0.02	0.03	1	-	132	-	-	-	( 7 )	-	-	-	-	1	2	4	
2	0.08	0.09	-	-	97	-	-	-	-	1	1	-	-	0	1	2	
3	0.14	0.15	2	1	41	-	-	-	1	66	1	-	-	3	3	5	
4	0.24	0.25	1	-	47	2	4	-	56	4	-	-	-	2	3	-	
5	0.30	0.31	-	( 0 )	-	( 23 )	( 1 )	( 2 )	-	( 23 )	( 2 )	-	-	( 1 )	( 1 )	-	
6	0.32	0.33	1	-	56	-	2	-	80	1	1	-	-	1	4	2	
7	0.40	0.41	-	-	8	-	1	-	1	1	-	-	-	1	( 3 )	( 1 )	
8	0.47	0.48	3	-	43	-	-	-	44	1	-	-	9	3	1	-	
9	0.54	0.55	( 2 )	-	( 22 )	-	-	-	( 23 )	( 1 )	-	-	( 5 )	( 2 )	( 1 )	-	
			( 3 )	-	( 25 )	-	17	-	1	1	9	-	-	9	9	1	
			-	-	( 1 )	-	( 1 )	-	( 37 )	( 0 )	( 0 )	-	-	( 13 )	( 1 )	-	
NO.	DEP.U	DEP.L	53	54	55	56	59	61	62	65	66	69	88	90	91	94	
1	0.02	0.03	5	1	-	5	-	5	32	-	12	5	-	-	-	-	
2	0.08	0.09	8	-	-	6	2	-	( 14 )	-	( 5 )	( 2 )	-	-	-	-	
3	0.14	0.15	12	-	1	5	4	42	20	1	7	-	-	( 0 )	( 0 )	-	
4	0.24	0.25	6	1	-	2	-	35	31	1	7	1	-	-	1	-	
5	0.30	0.31	13	-	( 6 )	-	( 2 )	-	( 24 )	18	7	1	1	-	( 0 )	-	
6	0.32	0.33	5	-	-	8	1	28	20	-	5	-	-	1	-	-	
7	0.40	0.41	5	-	-	( 4 )	0	( 19 )	9	-	( 2 )	-	-	( 0 )	-	-	
8	0.47	0.48	8	-	-	( 3 )	-	( 20 )	( 8 )	-	-	-	-	( 11 )	-	-	
9	0.54	0.55	3	-	-	( 2 )	4	27	23	1	2	-	-	16	-	-	
			( 4 )	-	-	( 3 )	( 6 )	( 4 )	-	-	-	-	-	( 9 )	-	-	
NO.	DEP.U	DEP.L	97	98	99	100	103	110	127	129	132	202	203	204	206	219	
1	0.02	0.03	1	-	1	1	-	1	-	-	3	1	-	5	-	1	
2	0.08	0.09	-	( 0 )	-	-	( 0 )	-	-	( 1 )	( 0 )	-	( 2 )	-	( 0 )	-	
3	0.14	0.15	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	( 0 )	( 2 )	( 1 )	-	
4	0.24	0.25	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	46	-	( 0 )	
5	0.30	0.31	-	-	-	( 0 )	-	-	-	-	-	( 1 )	( 2 )	( 0 )	( 0 )	-	
6	0.32	0.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	5	-	-	1	
7	0.40	0.41	-	1	1	-	-	-	-	-	-	( 4 )	-	-	-	-	
8	0.47	0.48	-	-	-	( 1 )	-	-	-	-	-	2	-	-	( 1 )	-	
9	0.54	0.55	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	( 1 )	
NO.	DEP.U	DEP.L	223	230	232	233	255	257	263	269	270	276	278	279	282	289	
1	0.02	0.03	-	36	126	689	1	1	8	2	7	2	1	1	0	-	
2	0.08	0.09	-	( 16 )	( 55 )	( 301 )	( 0 )	( 0 )	( 3 )	( 1 )	( 3 )	( 1 )	( 0 )	( 0 )	-	-	
3	0.14	0.15	-	( 21 )	71	236	1	-	1	2	-	( 0 )	-	-	1	-	
4	0.24	0.25	1	-	( 10 )	( 5 )	( 0 )	-	( 0 )	( 1 )	-	( 0 )	-	-	( 1 )	-	
5	0.30	0.31	-	( 14 )	( 38 )	( 101 )	-	-	( 0 )	-	( 1 )	-	( 0 )	-	( 0 )	-	
6	0.32	0.33	-	( 23 )	( 52 )	( 101 )	-	-	( 0 )	( 0 )	( 0 )	-	-	3	-	( 0 )	
7	0.40	0.41	-	( 20 )	( 42 )	( 113 )	-	-	( 1 )	( 1 )	( 1 )	-	( 0 )	-	-	-	
8	0.47	0.48	-	( 7 )	( 31 )	( 82 )	-	-	( 1 )	( 1 )	( 1 )	-	( 1 )	-	-	-	
9	0.54	0.55	-	( 1 )	16	23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
NO.	DEP.U	DEP.L	295	298	300	309	340	347	349	350							
1	0.02	0.03	1	1	-	-	-	1	2	24	2	-	-	-	-	-	
2	0.08	0.09	-	( 0 )	( 0 )	-	-	( 0 )	( 1 )	( 10 )	( 1 )	-	-	-	-	-	
3	0.14	0.15	-	( 0 )	( 2 )	( 0 )	-	-	( 1 )	( 23 )	( 0 )	-	-	-	-	-	
4	0.24	0.25	-	-	( 1 )	( 0 )	-	-	( 1 )	( 23 )	( 0 )	-	-	-	-	-	
5	0.30	0.31	-	-	-	( 0 )	-	-	( 3 )	( 11 )	( 1 )	-	-	-	-	-	
6	0.32	0.33	-	( 2 )	( 1 )	( 0 )	-	-	( 2 )	( 19 )	( 1 )	-	-	-	-	-	
7	0.40	0.41	1	-	-	-	-	-	( 2 )	( 1 )	-	-	-	-	-	-	
8	0.47	0.48	-	( 3 )	-	-	-	-	( 20 )	( 106 )	( 3 )	-	-	-	-	-	
9	0.54	0.55	-	( 2 )	-	-	-	-	( 4 )	( 31 )	( 5 )	-	-	-	-	-	

上段数字は化石種類コード、( ) 内は%

表2 検出された珪藻化石の種類一覧表

コード	種	名	水域	生息域	pH	流速	水深	生息	生活
7	<i>Actinoptychus</i>	spp.	1	好塩	0	0	0	0	0
80	<i>Melosira</i>	<i>sulcata</i>	1	好塩	0	0	0	0	0
87	<i>Navicula</i>	<i>lyra</i>	1	好塩	0	0	0	0	0
94	<i>Nitzschia</i>	<i>cocconeiformis</i>	1	好塩	0	0	0	0	0
95	<i>Nitzschia</i>	<i>granulata</i>	1	好塩	0	0	0	0	0
159	<i>Coscinodiscus</i>	spp.	2	好塩	0	0	0	0	0
161	<i>Cyclotella</i>	<i>stylorum</i>	2	好塩	0	0	0	0	0
166	<i>Diploensis</i>	<i>interrupta</i>	2	好塩	0	0	0	0	0
200	<i>Achnanthes</i>	<i>brevispes</i>	2	好塩	0	0	0	0	0
250	<i>Achnanthes</i>	<i>infilata</i>	4	15	23	33	43	4	0
276	<i>Amphora</i>	<i>ovalis</i> var. <i>libyca</i>	4	15	23	32	41	4	0
309	<i>Caloneis</i>	<i>bacillum</i>	4	15	23	33	43	4	0
311	<i>Caloneis</i>	<i>lauta</i>	4	15	24	33	43	4	0
316	<i>Caloneis</i>	<i>silicula</i>	4	15	23	32	43	4	0
330	<i>Cocconeis</i>	<i>placentula</i>	4	15	23	32	43	4	0
370	<i>Cymbella</i>	<i>cuspidata</i>	4	15	22	32	43	4	0
388	<i>Cymbella</i>	<i>minuta</i>	4	15	22	32	43	4	0
390	<i>Cymbella</i>	<i>naviguliformis</i>	4	15	22	32	43	4	0
398	<i>Cymbella</i>	<i>tumida</i>	4	15	23	31	43	4	0
400	<i>Cymbella</i>	<i>turgidula</i>	4	15	23	32	43	4	0
404	<i>Cymbella</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
425	<i>Diploensis</i>	<i>finnica</i>	4	15	21	31	43	4	0
428	<i>Diploensis</i>	<i>ovalis</i>	4	15	22	32	43	4	0
438	<i>Diploensis</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
450	<i>Epithemia</i>	<i>turgida</i>	4	15	23	31	43	4	0
454	<i>Epithemia</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
461	<i>Eunotia</i>	<i>biareofera</i>	4	16	21	31	43	4	0
464	<i>Eunotia</i>	<i>diodon</i>	4	16	21	32	43	4	0
482	<i>Eunotia</i>	<i>monodon</i>	4	16	21	31	43	4	0
489	<i>Eunotia</i>	<i>pectinalis</i> var. <i>undulata</i>	4	16	21	32	43	4	0
491	<i>Eunotia</i>	<i>praerupta</i> var. <i>bidens</i>	4	16	21	32	43	4	0
500	<i>Eunotia</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
549	<i>Frustulia</i>	<i>rhomboidea</i> var. <i>saxonica</i>	4	15	21	31	43	4	0
555	<i>Frustulia</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
566	<i>Gomphonema</i>	<i>acuminatum</i>	4	15	23	31	43	4	0
568	<i>Gomphonema</i>	<i>augur</i>	4	15	23	32	43	4	0
570	<i>Gomphonema</i>	<i>clevei</i>	4	15	23	33	43	4	0
572	<i>Gomphonema</i>	<i>constrictum</i>	4	15	23	31	43	4	0
576	<i>Gomphonema</i>	<i>gracile</i>	4	15	22	31	43	4	0
588	<i>Gomphonema</i>	<i>parvulum</i>	4	15	22	32	43	4	0
589	<i>Gomphonema</i>	<i>sphaerophorum</i>	4	15	23	31	43	4	0
604	<i>Gomphonema</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
626	<i>Gyrosigma</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
635	<i>Hantzschia</i>	<i>amphioxys</i>	4	15	23	32	44	4	0
680	<i>Melosira</i>	<i>ambigua</i>	4	15	23	31	41	4	0
692	<i>Melosira</i>	<i>roesiana</i>	4	17	24	34	44	4	0
716	<i>Navicula</i>	<i>americana</i>	4	15	22	31	43	4	0
730	<i>Navicula</i>	<i>cuspidata</i>	4	15	23	32	43	4	0
796	<i>Navicula</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
820	<i>Neidium</i>	<i>hitchcockii</i>	4	15	21	34	43	4	0
822	<i>Neidium</i>	<i>iridis</i>	4	16	22	31	43	4	0
835	<i>Neidium</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
854	<i>Nitzschia</i>	spp.	4	17	24	34	42	4	0
870	<i>Pinnularia</i>	<i>acrosphaeria</i>	4	15	22	31	43	4	0
876	<i>Pinnularia</i>	<i>borealis</i>	4	15	22	32	44	4	0
884	<i>Pinnularia</i>	<i>cardinaliculus</i>	4	17	24	34	43	4	0
886	<i>Pinnularia</i>	<i>divergens</i>	4	16	21	34	43	4	0
892	<i>Pinnularia</i>	<i>gibba</i>	4	15	21	32	43	4	0
894	<i>Pinnularia</i>	<i>hemptiera</i>	4	16	22	31	43	4	0
908	<i>Pinnularia</i>	<i>maior</i>	4	15	21	31	43	4	0
912	<i>Pinnularia</i>	<i>microstauron</i>	4	15	21	32	43	4	0
930	<i>Pinnularia</i>	<i>viridis</i>	4	15	22	32	43	4	0
932	<i>Pinnularia</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
934	<i>Rhoicosphenia</i>	<i>curvata</i>	4	14	23	32	43	4	0
937	<i>Rhopalodia</i>	<i>gibberula</i>	4	14	23	32	43	4	0
940	<i>Stauroeis</i>	<i>acuta</i>	4	15	23	32	43	4	0
943	<i>Stauroeis</i>	<i>phoenicenteron</i>	4	15	22	32	43	4	0
945	<i>Stauroeis</i>	spp.	4	17	24	34	43	4	0
972	<i>Surirella</i>	spp.	4	17	24	34	42	4	0
980	<i>Synedra</i>	<i>ulna</i>	4	15	23	32	41	4	0
生息域凡例									
1	海水	15	塩分濃度	21	pH	31	止水	41	浮遊
2	海水～汽水	16	不確定	22	酸性	32	不定水	42	不定定水
3	汽水	17	嫌塩	23	アルカリ性	33	流水	43	底性
4	淡水	18	不明	24	不明	34	不明	44	陸生明水

表3 珪藻化石組成表

余部遺跡(1)

No.	DEP.U	DEP.L	7	80	87	94	95	159	161	166	200	250	276	309	311	316
1	0.02	0.03	-	-	-	-	-	( 0 )	-	-	-	-	-	-	( 1 )	2
2	0.08	0.09	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1
3	0.14	0.15	1	10	1	2	2	1	6	4	1	-	( 0 )	( 1 )	( 2 )	3
4	0.24	0.25	-	-	-	-	-	( 0 )	( 3 )	( 2 )	( 0 )	-	( 2 )	-	( 1 )	-
5	0.30	0.31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	0.32	0.33	-	-	-	-	-	-	-	6	-	4	-	1	-	-
7	0.40	0.41	-	-	-	-	-	-	-	( 6 )	( 4 )	-	( 1 )	2	1	-
8	0.47	0.48	-	-	-	-	-	-	-	2	104	-	2	1	1	-
9	0.54	0.55	-	-	-	-	-	-	-	( 1 )	( 51 )	-	( 1 )	( 0 )	( 0 )	-
No.	DEP.U	DEP.L	330	370	388	390	398	400	404	425	426	438	450	454	461	464
1	0.02	0.03	-	4	2	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
2	0.08	0.09	-	( 2 )	( 1 )	( 1 )	-	-	( 0 )	-	-	-	-	-	-	( 0 )
3	0.14	0.15	-	( 4 )	( 2 )	( 4 )	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1
4	0.24	0.25	-	-	-	-	-	-	20	-	-	-	-	-	-	-
5	0.30	0.31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	0.32	0.33	-	2	1	-	-	-	17	-	-	3	-	-	-	-
7	0.40	0.41	e	( 2 )	( 1 )	-	-	-	( 16 )	-	-	( 3 )	-	-	-	-
8	0.47	0.48	13	-	-	-	-	-	3	-	-	1	0	3	1	-
9	0.54	0.55	-	-	-	-	-	-	( 2 )	-	( 2 )	( 0 )	( 1 )	( 8 )	( 1 )	0
No.	DEP.U	DEP.L	482	489	491	500	549	555	560	568	570	572	576	588	589	604
1	0.02	0.03	-	( 1 )	-	-	4	3	1	1	1	-	2	-	-	-
2	0.08	0.09	-	( 2 )	( 2 )	( 1 )	( 0 )	( 1 )	( 0 )	( 0 )	-	-	-	( 0 )	( 0 )	-
3	0.14	0.15	-	-	1	3	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
4	0.24	0.25	-	-	( 0 )	( 1 )	-	-	-	-	-	( 0 )	-	-	( 0 )	-
5	0.30	0.31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	0.32	0.33	-	1	8	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
7	0.40	0.41	-	( 1 )	( 8 )	-	-	( 1 )	-	-	-	1	-	-	1	-
8	0.47	0.48	-	1	4	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-
9	0.54	0.55	-	( 0 )	-	( 2 )	-	-	( 1 )	-	( 0 )	-	-	-	-	-
No.	DEP.U	DEP.L	626	635	680	692	716	730	796	820	822	835	851	870	876	884
1	0.02	0.03	-	1	3	-	-	9	-	( 2 )	( 4 )	( 4 )	( 0 )	( 1 )	-	-
2	0.08	0.09	1	( 0 )	( 1 )	( 1 )	( 0 )	-	-	2	2	11	-	-	1	-
3	0.14	0.15	1	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	( 0 )	-
4	0.24	0.25	-	( 0 )	-	( 1 )	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5	0.30	0.31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	0.32	0.33	-	2	1	-	-	1	-	1	-	1	1	-	-	-
7	0.40	0.41	-	( 2 )	( 1 )	-	( 1 )	-	( 2 )	-	( 3 )	( 1 )	-	1	1	2
8	0.47	0.48	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-
9	0.54	0.55	-	( 1 )	-	-	-	-	-	-	( 0 )	-	-	-	( 0 )	-
No.	DEP.U	DEP.L	886	892	894	908	912	930	932	934	937	940	943	945	972	980
1	0.02	0.03	4	13	6	3	12	12	34	-	-	55	-	-	-	-
2	0.08	0.09	( 2 )	( 6 )	( 5 )	( 1 )	( 6 )	( 7 )	( 17 )	-	( 1 )	( 27 )	-	( 1 )	-	-
3	0.14	0.15	1	12	3	16	9	37	-	3	-	37	-	1	-	-
4	0.24	0.25	-	-	-	-	-	118	-	3	1	12	-	4	-	( 2 )
5	0.30	0.31	-	-	-	-	-	( 58 )	-	( 1 )	( 0 )	( 6 )	-	-	-	-
6	0.32	0.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7	0.40	0.41	-	-	-	-	-	-	-	-	-	( 1 )	( 1 )	-	( 1 )	-
8	0.47	0.48	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-
9	0.54	0.55	-	-	-	-	-	-	-	-	( 0 )	-	-	-	( 6 )	-

上段数字は化石種類コード、( ) 内は%

# 報告書抄録

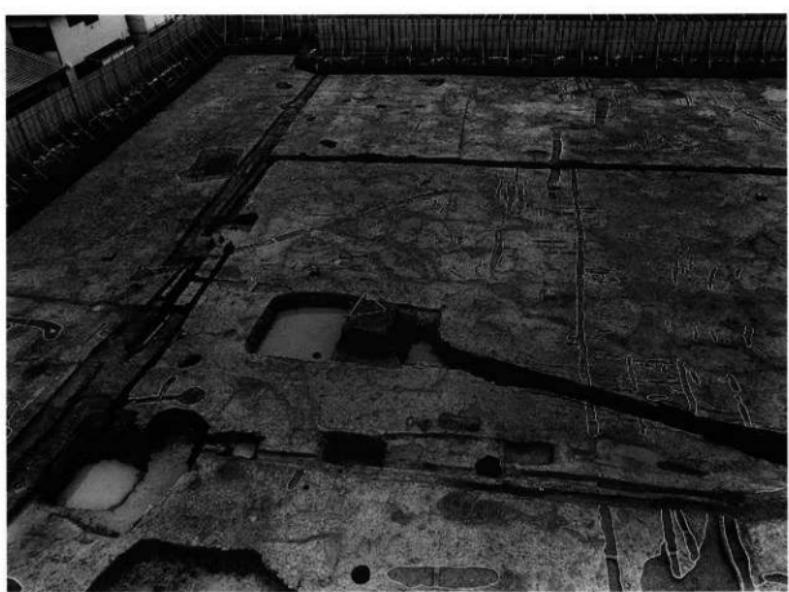
ふりがな	あまべいせき（その1）							
書名	余部遺跡（その1）							
副書名								
卷次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	1999-5							
編著者名	桥本 哲・森屋直樹・井西貴子							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351							
発行年月日	2000年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
余部遺跡	大阪府南河内郡美原町 南余部	27835	18	34 31 51	135 32 46	平成9年 ～ 平成12年	16,100	府営美原南 住宅建替工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
余部遺跡	集落	鎌倉・室町	掘立柱建物・井戸・ 墓・溝・池・旧河川	瓦器・瓦質土器・ 陶磁器				

図

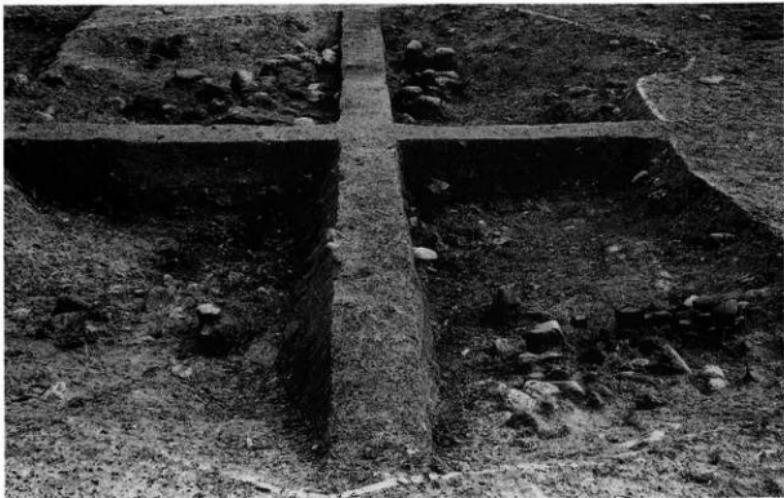
版



航空写真（上が北）



図版二  
A-C区 落ち込み



図版三 D区 流路・溝



(上) 流路跡全景  
(北から)



(中) 比壟断面  
(南から)



(下) 溝 281  
(北から)

図版四 D区  
流路



(上) 流路跡全景 (南から) (中) 同、南部東西杭列 (下) 同、南部小土坑 252

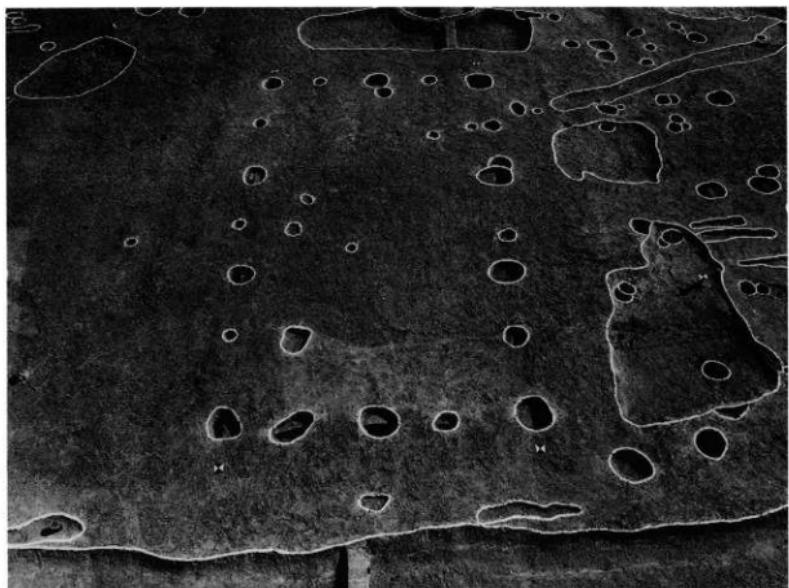
図版五 E区  
全景



(北から)



E区南西部（西から）



建物 101 (西から)



(左) 建物 101 ピット 8



(右) 同、ピット 7



(上) 建物 102 (西から)

(下左) ピット 2 (東から)

(下右) ピット 4 (東から)



遺物出土状況（南から）



灰黒色粘土内遺物出土状況（左 T.P. 46.214m, 右 T.P. 45.742m）





土坑 132 遺物出土状況（南から）

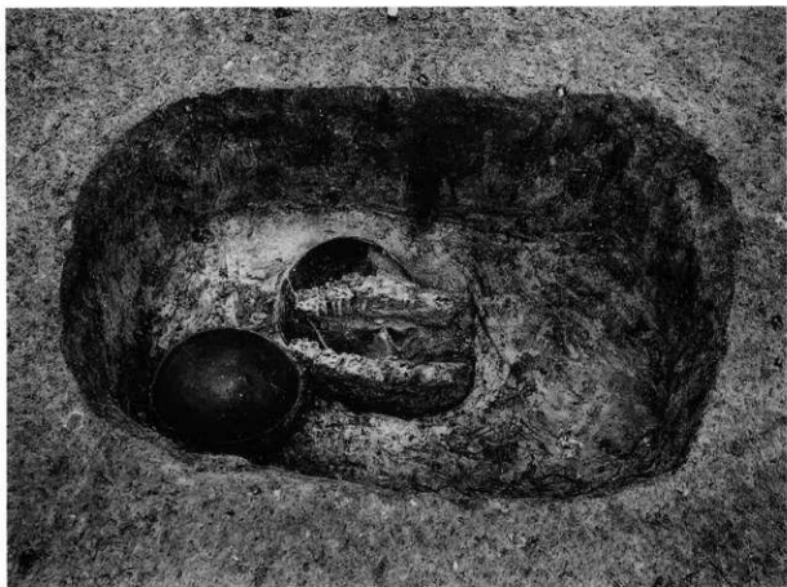


南半部 左、溝 230 遺物出土状況（東から） 右、溝 234（東から）





(東から)



遺物出土状況（北から）



(上) 東壁断面 (中) 東壁断面 (下) 東壁断面南

図版十二 F・G区  
全景



F区（西から）



G区（西から）

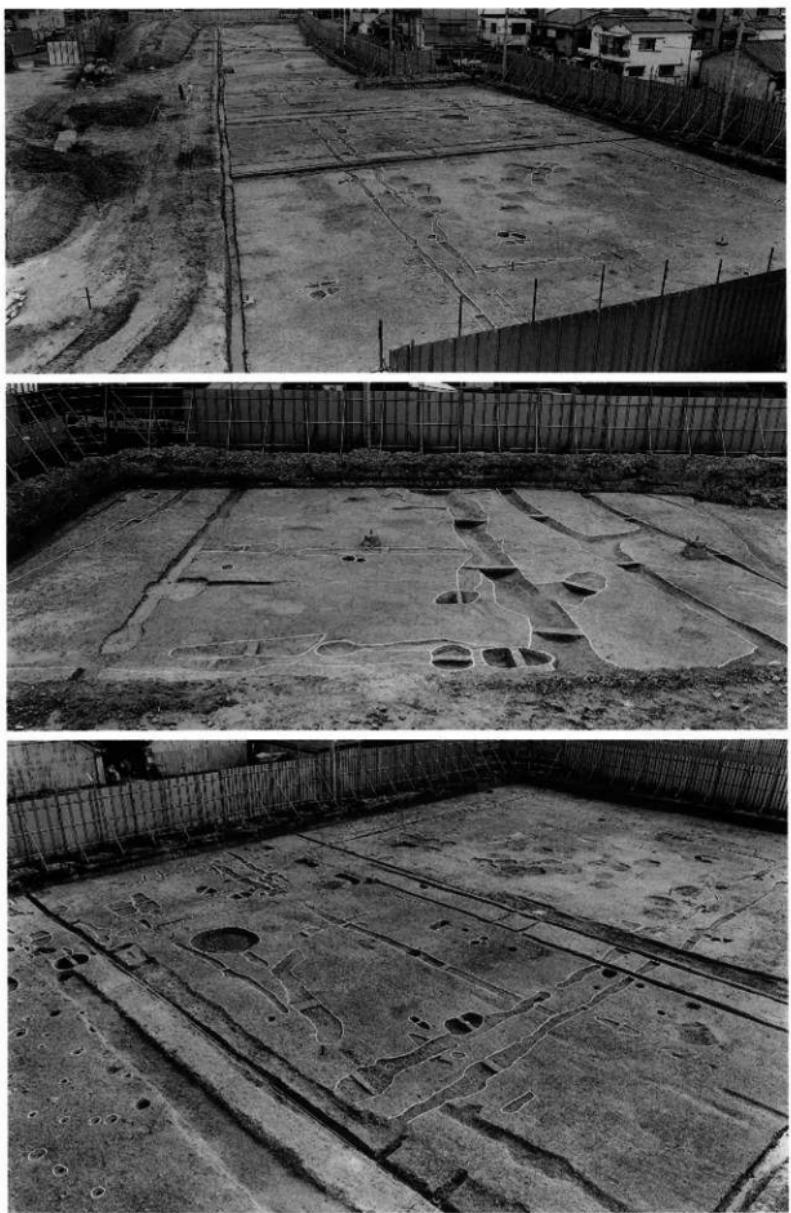
圖版十三 G 区溝・土坑



(上左) 土坑 435

(上右) 土坑 478

(下) 溝 439



(上) 全景 (南から) (中) 北端部 (南から) (下) 南東部 (西から)

図版十五 H<sub>2</sub>区  
全景



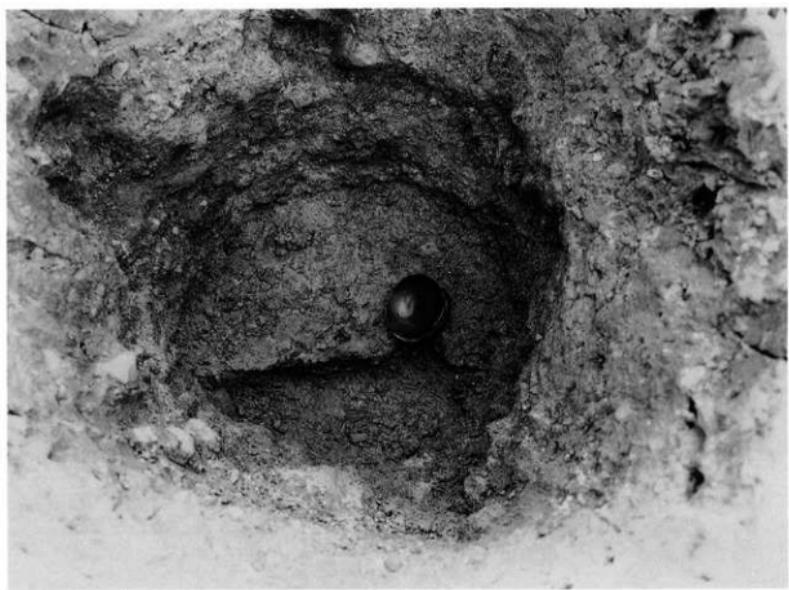
(上・中) (南から) (下) (北から)



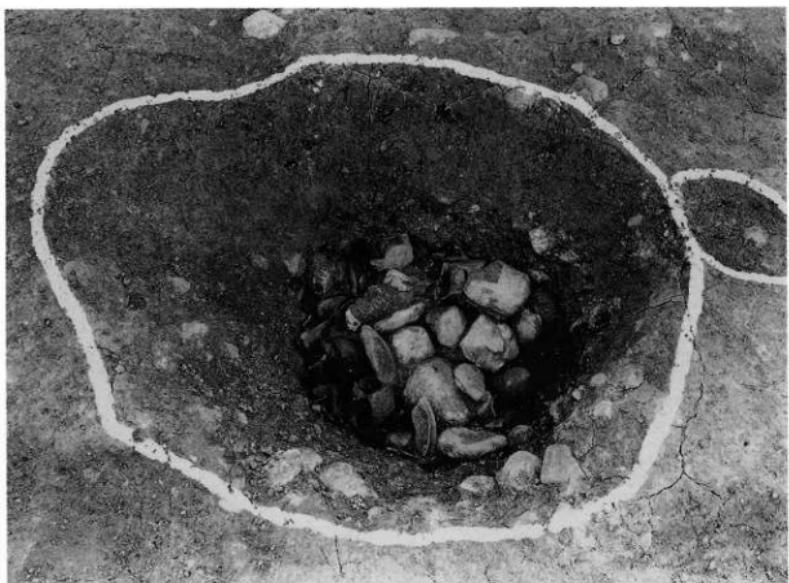
(南から)



(南から)



遺物出土状況（上が北）

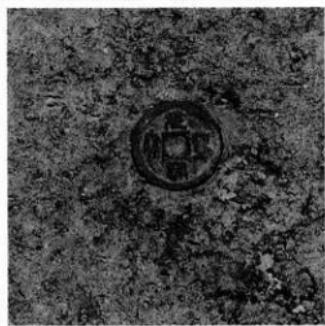
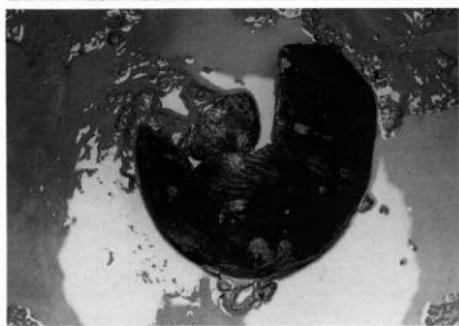


第1層（北から）



第3層（北から）

図版十九 H区 井戸・土坑



井戸 721 遺物出土状況（上一第1層、下右一同検出面上、下左一第5・6層）

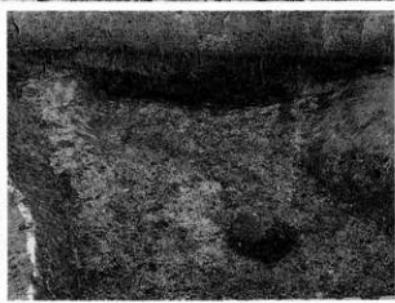
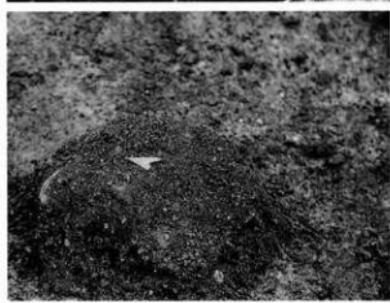


土坑 1181 遺物出土状況（東から）



(上) 検出状況（東から） (中・下) 遺物出土状況

図版二十一 H<sub>1</sub>区 溝



(上) 溝 629 (北から) (中) 溝 1085・1087 (西から) (下) 溝 1087 石器出土状況



(上) 溝 624 断面 (中) 溝 626 断面 (下) 溝 1225・1224



落ち込み 1017 (西から)



落ち込み 1191 遺物出土状況 (東から)

図版二十四 H<sup>2</sup>区 落ち込み・集石



落ち込み 978 (西から)



落ち込み 1191 (南から)



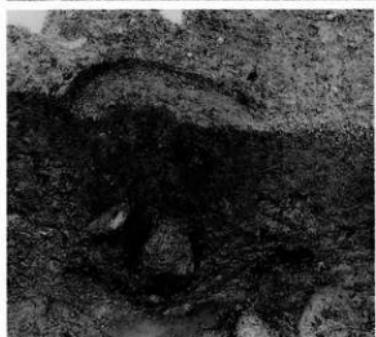
落ち込み 1191 (南から)



落ち込み 1191 (東から)



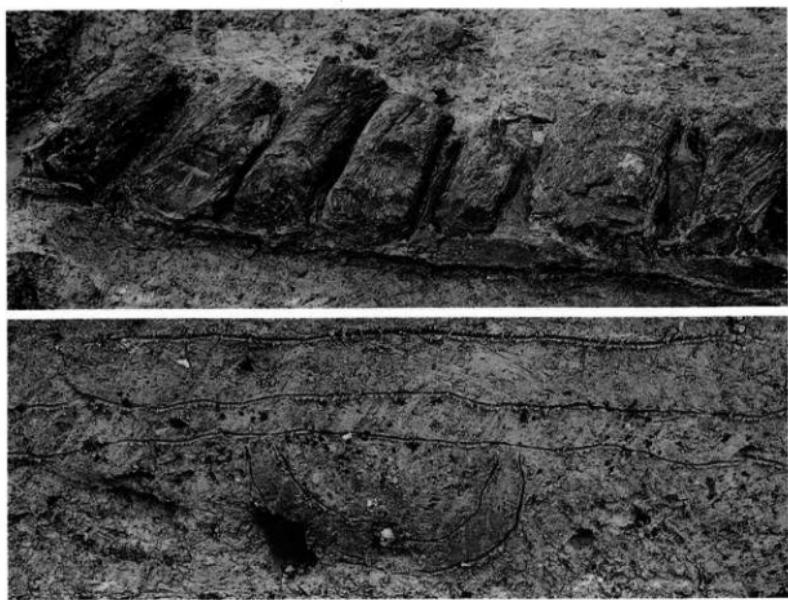
集石 627 (南から)



(上) ピット 1117 (上が北) (中左) G区ピット 485 (中右) ピット 1140 (上が東) (下) 同断面



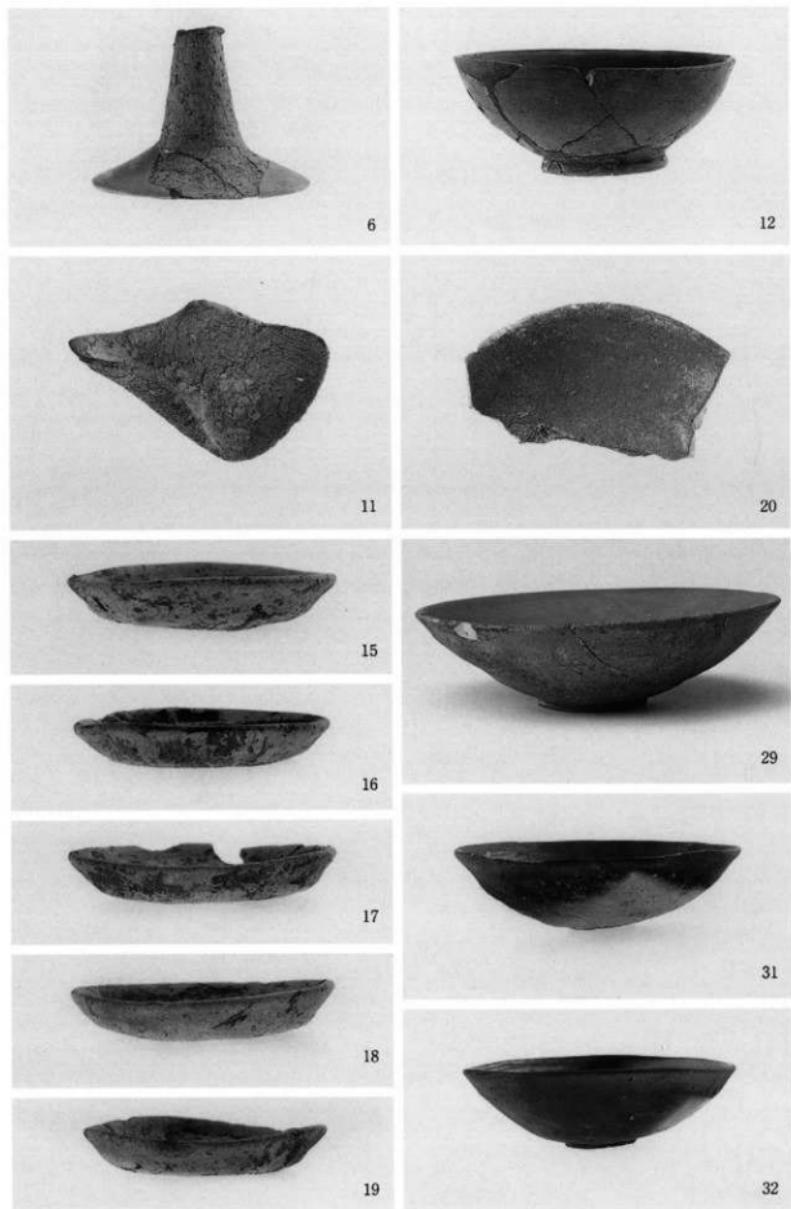
D区南部木桿出土状況（左、検出状況、右、被覆材除去後）（南から）



（上）木桿被覆材 （下）D区南壁断面木桿部分（北から）



流路断面



B区、土坑14（6）、C区、包含層（11、12）、D区、小土坑252（15～19）、  
E区、建物101（20）、建物102（29）、井戸228（31、32）



33



39



34



40



41



35



36



1

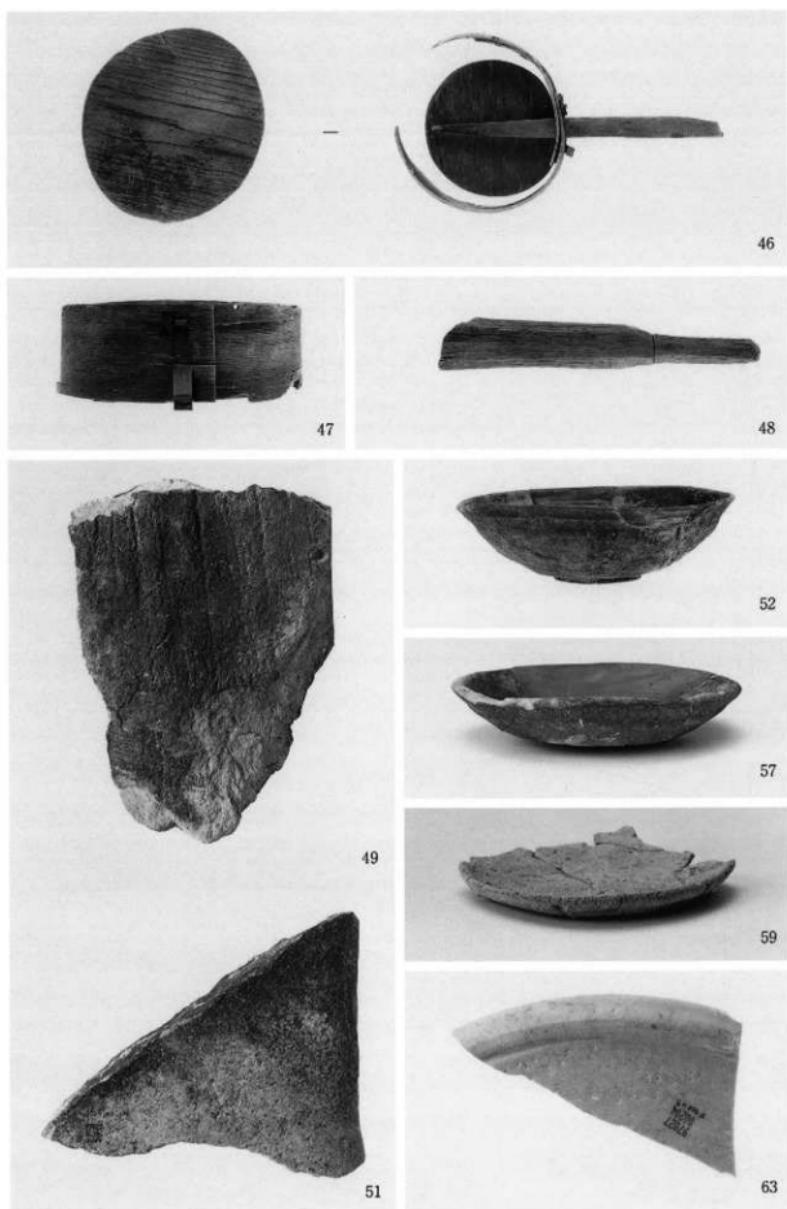


38

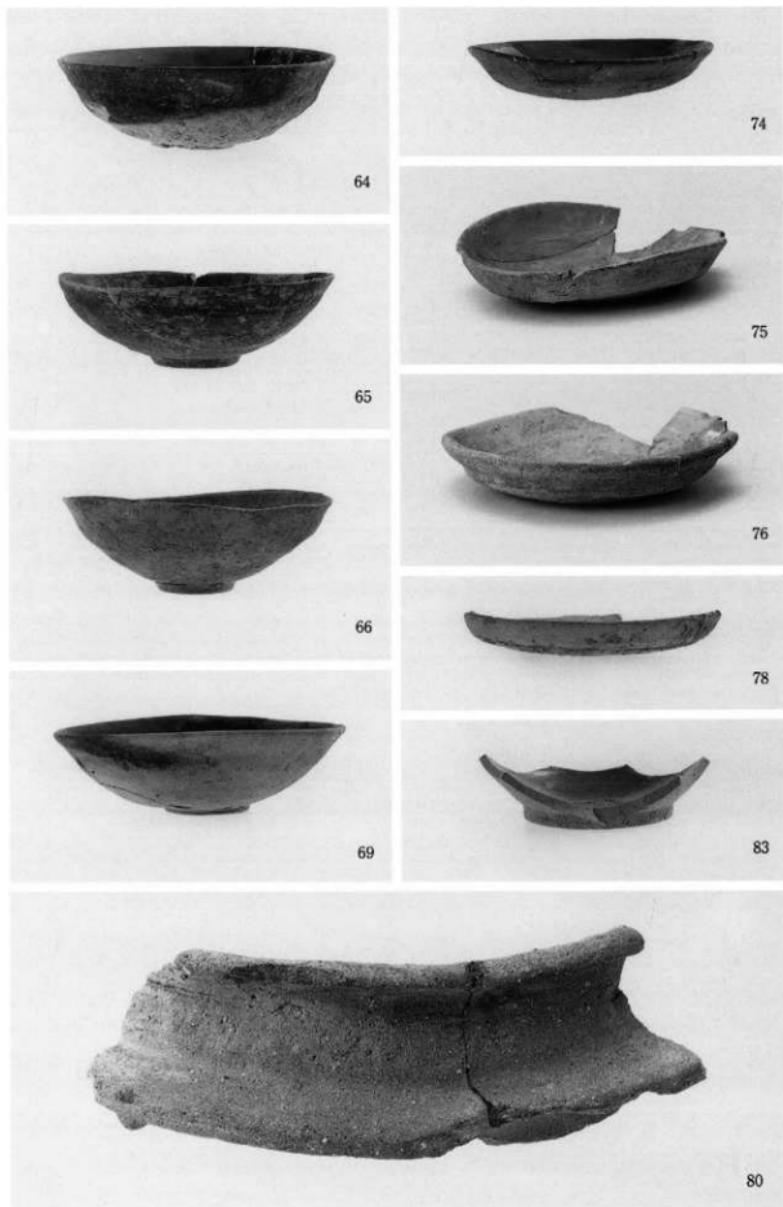


24

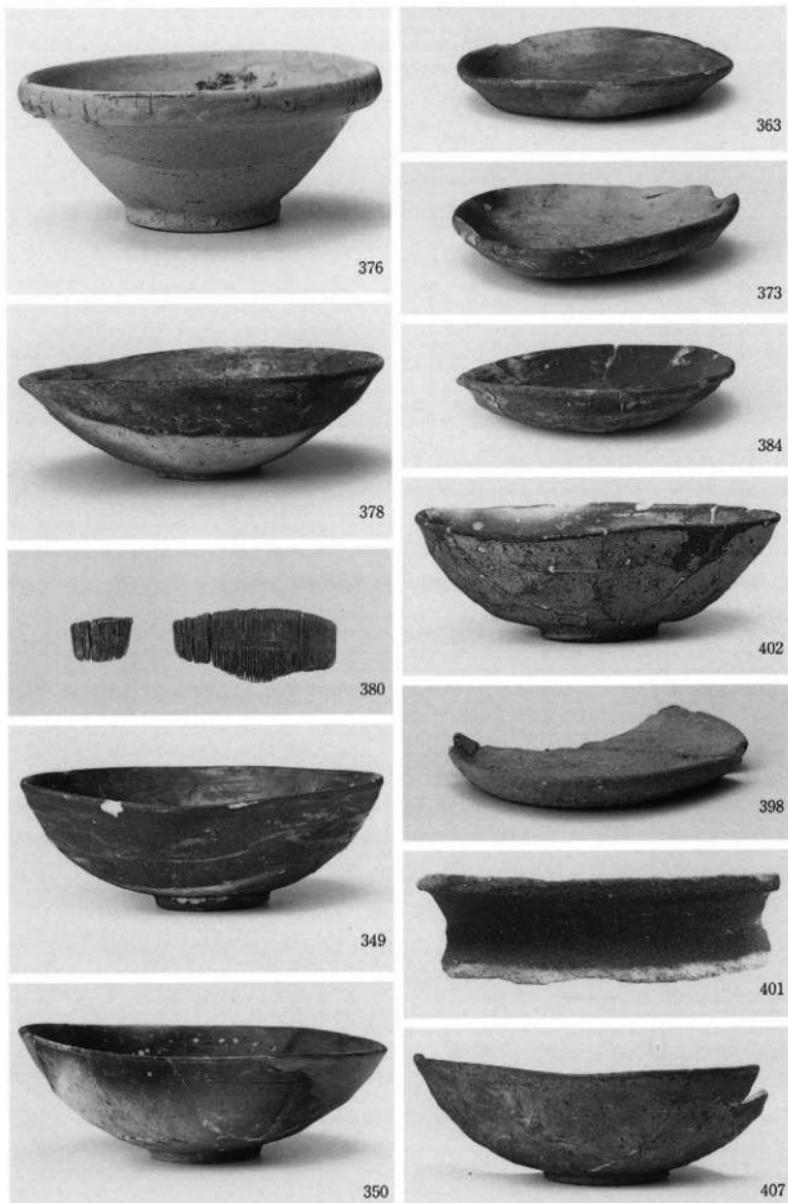
図版二十  
遺物写真3



E区、井戸228（46～49、51）、溝230（52）、溝234（57、59、63）



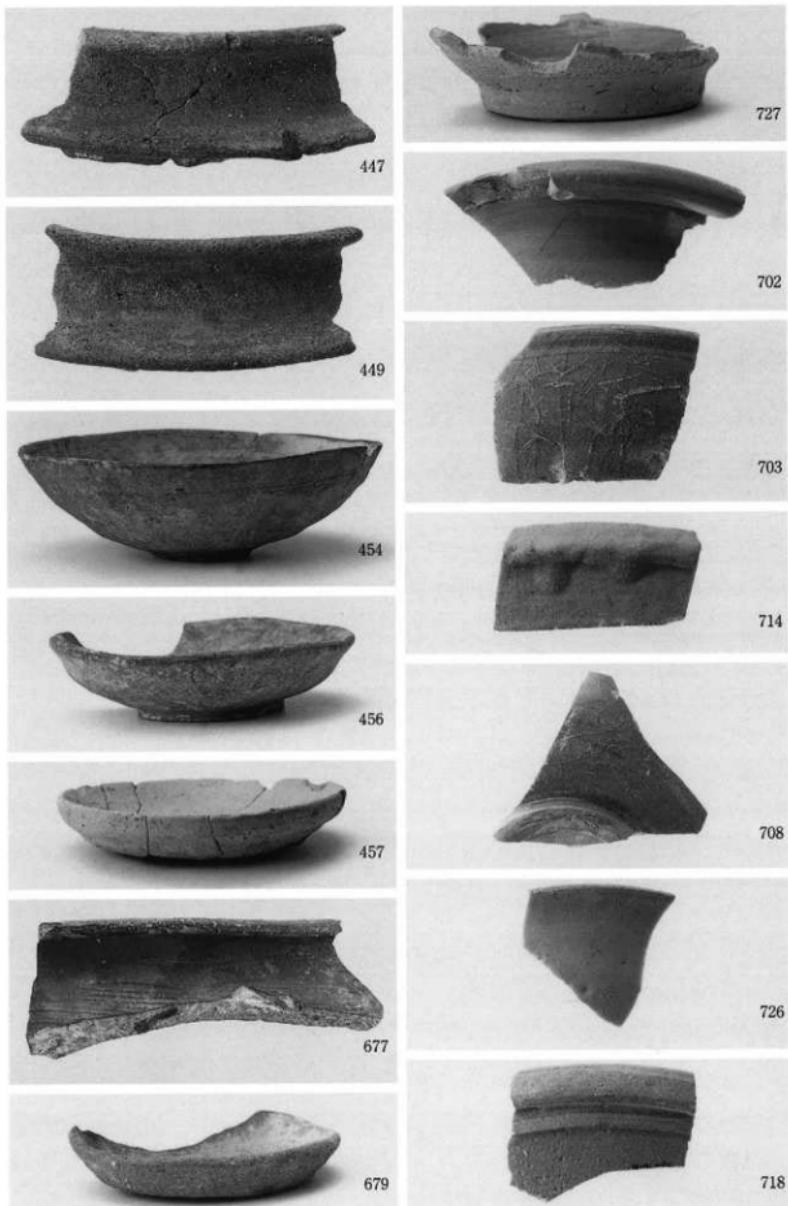
E区、ピット214（64）、土坑203（65、66）、ピット174（69）、土坑132（74）、  
ピット119（75）、ピット117（76）、土坑113（78）、土坑132（80、83）



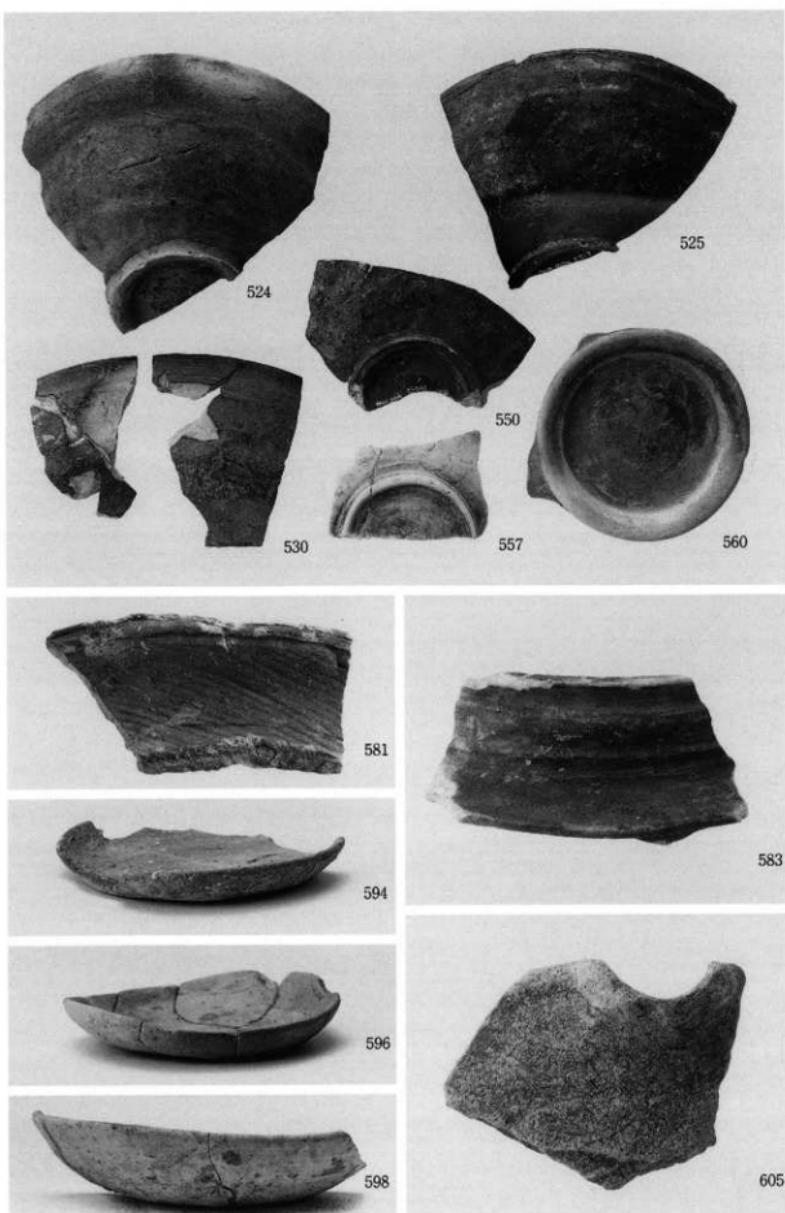
H区、井戸1237（349、350、363、373）、土塙墓687（376、378、380）、溝1192（384）、  
土坑1202（398）土坑1231（401）、土坑1244（402）、落ち込み1191（407）



H2落込み 1191 (408 ~ 439)



H区、落ち込み 1191 (447~449)、ピット 1117 (454~457)、包含層 (677~718)



H区、池（524～605）



603



613



633



625



634



637

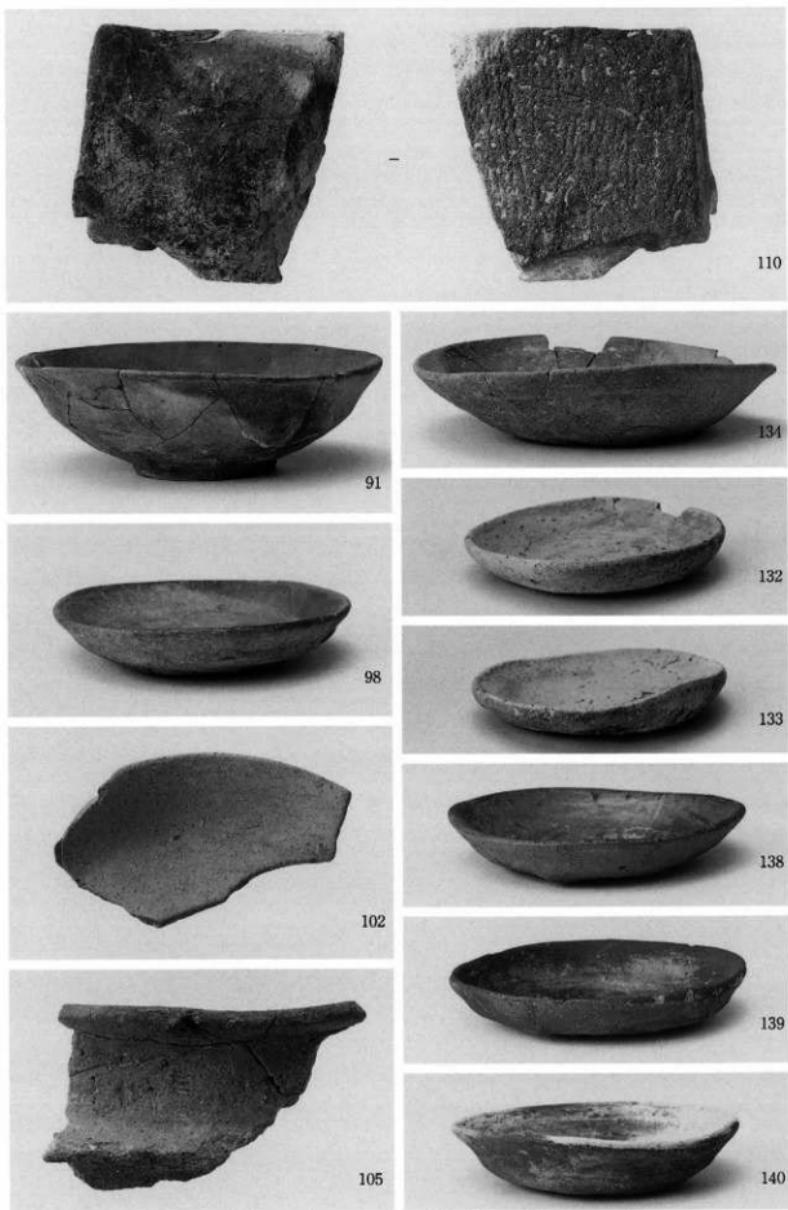


638

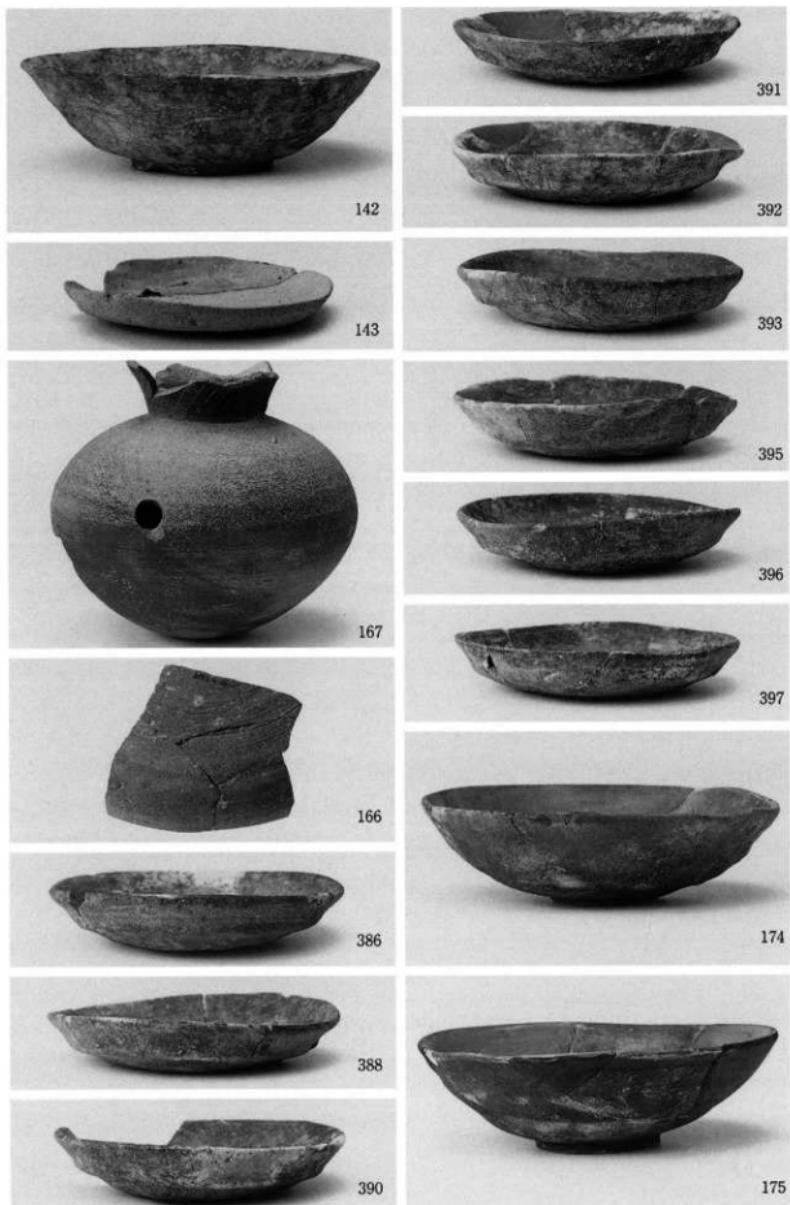


636

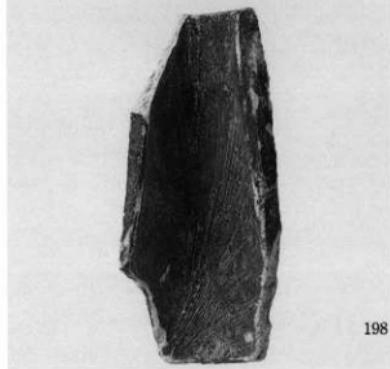
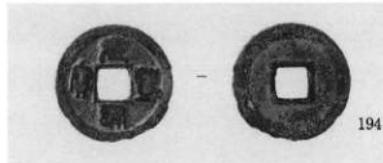
H区、池（603～636）



E区、ピット151（110）、土坑229（91～105）、G区、溝439（132～134）  
G区、土坑435（138～140）



G区、土坑478（142～143）、H区、溝629（166～167）、井戸721（174～175）  
H区、土坑1181（386～397）



H区、井戸721（176～198）



H区、井戸 805 (199 ~ 216)、井戸 871 (220 ~ 293)



296



297



321



300



322

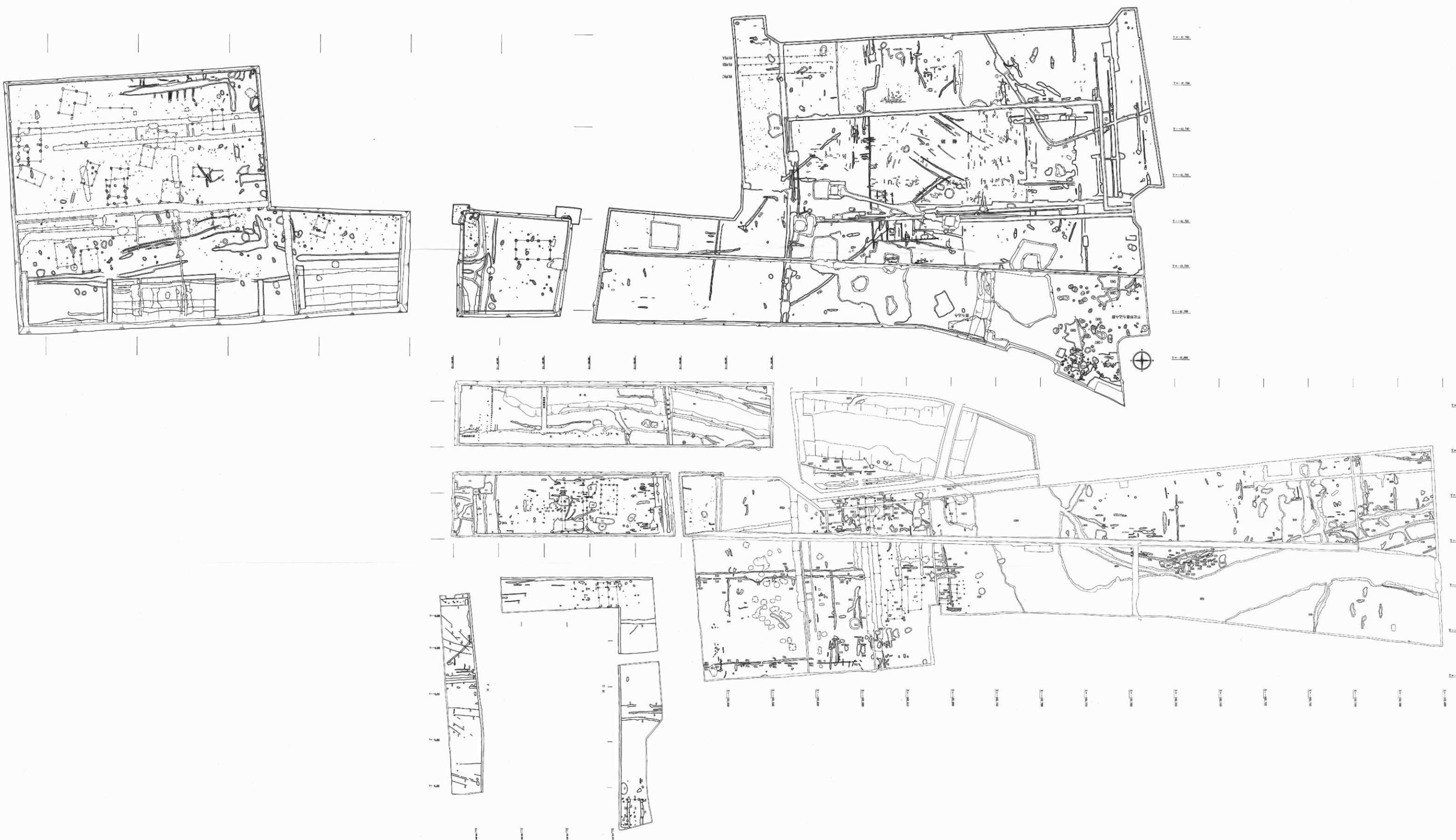


304

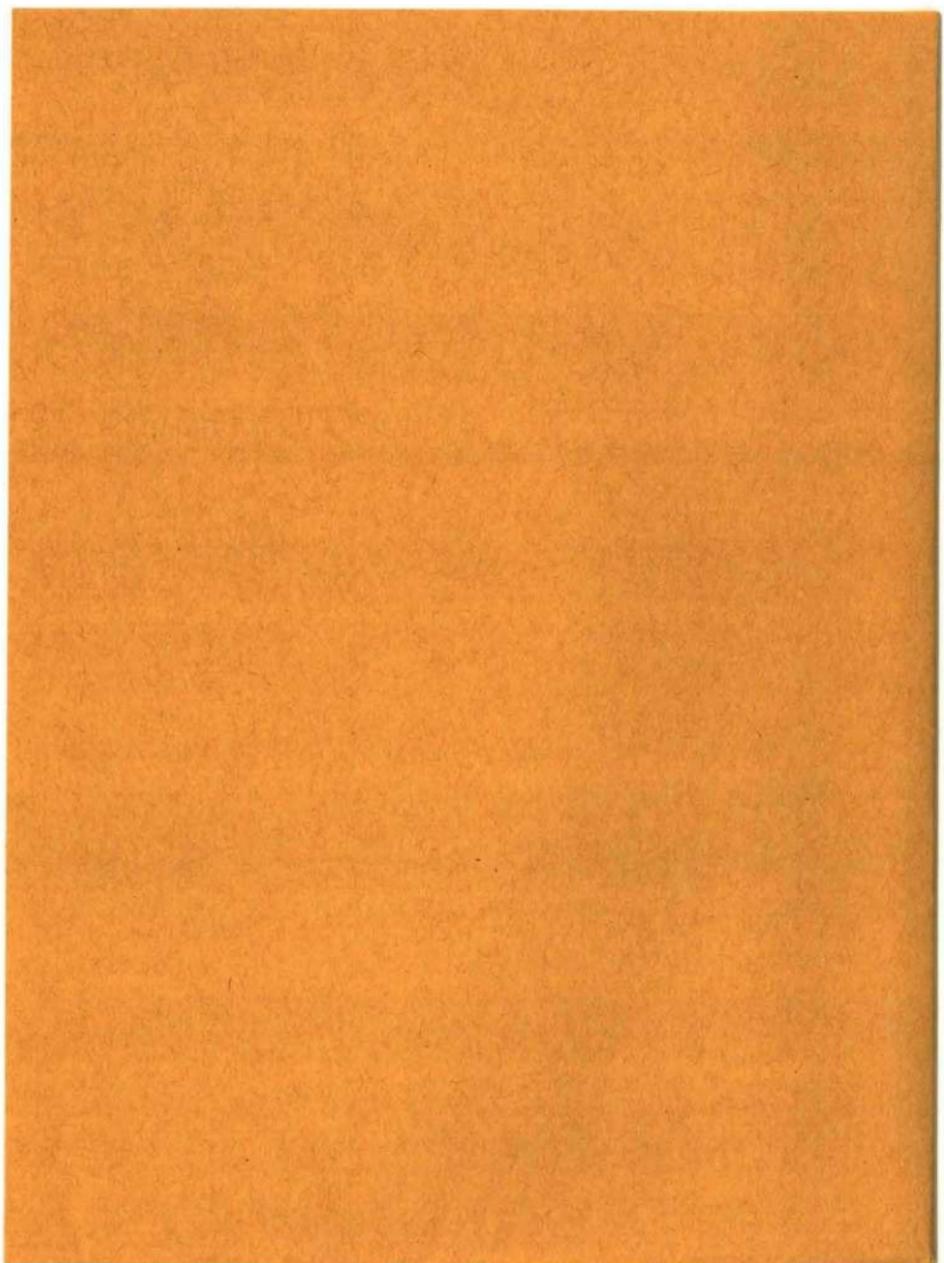


310

H区、井戸 871 (296 ~ 322)



付図1 遺構全体図



大阪府埋蔵文化財調査報告1999-5

余部 遺跡（その1）

発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目  
TEL. 06-6941-0351

発行日 2000年3月  
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所  
TEL. 06-6976-8761

